

人間らしくない人間と、人間らしい人形

pilot

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

人間性が無くなりかけて、それを気にしてるようなパイロットつて、人形みたいなのみると発狂しそうじゃないですか？

タイタンフォール（2700前後）の時代はドルフロ（2060年代）時代よりも数百年先の話になりますので、かなり年月が経過している設定となっております

目次

かつてグリフィンであったものたち

出会い | 1

商品カタログと、出荷前調整 | 14

浪人と妖精と | 18

指揮官業 | 20

自己同一性 | 22

消耗戦 | 27

Titanfall | 30

燻りと狼煙 | 35

拠点増幅 | 39

それぞれの日常 | 45

無慈悲 | 55

流転 | 63

困惑 | 68

前線 | 71

君たちの前線基地は | 80

故郷に痛みはつきもの | 98

終わり | 108

Deep fallen

深層 | 123

生存者 | 127

再生 | 135

The earth journalism | 162

自己顕示欲 | 165

	ゴースト分隊	404
	蹂躪	181
	崩壊の試練	185
	フォールド・コーラップス・ウエポン	201
	私らしい私、貴方らしい貴方	215
	人間じゃなくても平和に暮らしたい！	
	鉄血傭兵生活	242
	シャーキテクト	245
	War games 2062	248
	バイパー？いいえ、ウロボロス	251
	クリスマス	254
	クロークドールズ	259
	番外編：ドルフロタイタン概念シリーズ	
	ドルフロタイタン概念：完璧な兵器	264
	ドルフロタイタン概念：完璧な兵器 G2	268
	ドルフロタイタン概念：完璧な兵器 虚無	272
	ドルフロタイタン概念：完璧な兵器 エピローグ	275
279	ドルフロタイタン概念：刹那の快樂主義者 骨拳部隊の道化師	
287	ドルフロタイタン概念：タイタンvs妖精、仁義なきAIバトル	
	ドルフロタイタン概念：人と人形の境界線 喪失	290
	ドルフロタイタン概念：人と人形の境界線 再生	299
302	ドルフロタイタン概念：殺しの為に生まれなくなかった機械	

かつてグリフィンであつたものたち
出会い

この船には、人間らしくない人間が多い。

皆、殺すためだ。殺すために人間らしくなくなったのだ。そして俺も、その殺すために人間を捨てた人間だつた。俺がそう考えるのを見越したのか、科学者のだれかに「人間性を捨ててるわけではない、人間の虚弱さを脱ぎ去っているだけだ」と言われたときも、俺は正直人間性を失つた気がしたし、そして人間には虚弱さが必要だとも思つた。

俺がそうして得たのは、別の世界に消え去ることができる力だつた。それだけだ。夢を見ることを捨て、食べることを捨て、子を残すことを捨て、ルックスを捨て、そして得たのがこれだ。そして俺は酷い方だが、酷くなくても俺の捨てたもののいくつかは、この船に乗つてる人間なら同じように捨てている。もしかしたら感情を捨てたやつだつているかもしれない。

こういう職業を「パイロット」っていうんだ。

エリートだ、英雄だ、とか言われるが、やつら本当は化け物扱いしやがる。

全身機械の兵士を一撃で殴り飛ばし、必要に応じて自らより巨大な自立兵器も単独で破壊するのを化け物と言わずになんというか、だが。

そんな異界のようなここで、ふと人間らしいものを見かけた。珍しかったが、そんな感情よりもそいつをみたときの俺の気持ちは、例えば名画をみて感動するような気持ちであつたし、ずうつと探していたものをやつと見つけたような気持ちでもあつた。つまり、好きになつた。

長い髪をもった女だつた。芯の強そうな、それでいて可愛らしい顔。自分の元の性別など覚えてもないが、こいつのためならほんと

に男になつてもいい。いや、俺がここまで惹かれるならば俺は元々男だったのかもしれない。

その日はそのまま部屋に帰ったものの、俺はそいつが忘れられなかった。

俺はパイロットだ。つまり、行動がはやく、そして冷静。

いきなり話しかけるのは失礼だし、まず周りから情報を集める。俺はエリートだからな、当然だ、蛮勇な人間ではない。

「そんな人はみたことありませんね、珍しい。」

新入りかなにかでは？」

俺は取り敢えず同じシミュラクラム、つまりこの船のなかでも俺と同じくらい人を辞めてるやつ、そしてそのなかでも強烈に人間らしくないパイロット、興奮剤狂いで有名なやつに話を聞いていた。

「お前が周りをよく見ていないだけじゃないのか？」

めちやくちや綺麗で可愛かったぜ。」

「私は周りに期待してないので、周りを見る必要なぞないんですよ。興奮剤があれば十分です。貴方もどうです？」

またこれだ。こいつは周りを見ない。脳内ガンギマリ野郎だ。

「ああ、そうだな、俺はそこまで酷くはないが、取り敢えずお前に期待するのはやめとくぜ。」

適当に皮肉をいいつつ俺はそこをあとにする。

「…勝手な周りへの期待は、誰にとつても不幸になりうる原因となります。あなたも気を付けたほうがよろしいですよ？思想を強くもってください。」

薬漬けの奴には言われたくないが、俺は人間らしさを捨てたくなかったので、適当に感謝しておいた。

そのときの奴の心配した顔といえば…いや、顔なんてもうなかったな…俺たち…

次はまだマシな奴、すなわち俺より人間らしいやつに聞きに言っ

た。そして重ね重ね言うが俺はエリートなので、二度は失敗しない。人選に気を付けて、よく周りを見ることでも有名なパルス使いに聞いてみることにした。

「そんな方見ませんでしたね、多分新入りかなにかじゃないですか？」

「まただ、こいつもか。いや、こいつは間違うわけがない、たまたま興奮剤野郎が正しいことを言っただけだろう。」

「それガンギマリ野郎… あ、興奮剤義体のやつわかるか？そいつにも言われたんだよな。」

「ああ、あの方が言うならそれが正しいんでしょう。」

「おいおいなんであいつは信用されてんだ？まあ、口を酸っぱくして言うが俺はエリートなんで、一時の恥をしのんで理由を尋ねてみた。」

「ええ、彼はよく人を見てますよ。素っ気ないように見せかけてますが、僕の目は誤魔化させませんよ、なんせパルスブレイド使いなので周りをよく見るんです。」

「驚いた、奴はそんなに買い被られてたのか、取り敢えず俺はやんわりとその認識をただそうと、パルブレ坊やにガンギマリ野郎のことを教えてから、また席を後にした。」

「そうでしょうか…。」

… やっぱりまだわかってねえ。

「なんか引つ掛かるんだよなあ、人間の新人ならもうちよつと紹介とかあってもいいだろ。マードー大將そういうのやってくれるし。」

「やった！やつと会えた！他の奴に話を聞くのもいいが、やはり直接話してみるのも重要だな！俺はチキンで出撃地点から出てこないクローク野郎でもない。」

「何度でも何度でも言うが俺はエリートで、華麗な英雄だからな！」

「おはよう、君は新入りかい？まあこんなところだが、これからは一緒に過ごす仲間だ、仲良くしようぜ。」

「決まったーーーーー」

「新兵の平均寿命なんかよりも、よっぽど短い言葉を紡いだだけなの

に、俺はウォーゲームズで、今までで一番の記録を出したときよりも、心の中で興奮していた。

「馴れ馴れしくしないで」

耳を疑った。何故、なぜ、なぜ……？　こういうところで、俺の高性能なCPUは役に立たなかった。

「ず、随分な、言いようだな、急に話しかけてすまん、なにか気に障ることをしたか？」

俺は……一応エリートだから、謝ることにした。ここで彼女に嫌われるのは、フライヤーに体を切り裂かれるよりも間抜けで、辛いと思っただからだ。

「その態度全部よ。私も、殺しの為だけに生まれてきたのよ、馴れ合いもそうだった態度も、不要なのよ。」

は………？

おれは、わたしは、われわれは、殺しのためだけにならそういった態度、人間らしい親しみやすいものは不要なのか？　人間性が！　こいつがいうのか？

……まだ人間らしいこいつが？　ここに居る誰よりも人に近いこいつが、新入りで!!!戦ったことすらない!!!コイツが!!!何がわかる?!?俺を?!?機械だつていうのか?!?機械になれと言うのか?!?殺しのためのか?!?殺しのために生きていたらそれ以外は許されないのか?!?人間に俺はそう言われるのか?!?ここまで人間らしく努力して、結果人間をすてねばならなかっただけなのに?!?俺は殺すためににうまれても人間らしくいきたいんだいきねばならないんだ。ころすやつはにんげんじゃないってのか。

いや?!?!いや!!!俺が間違ってるのか?!?!ちがうちがうちがう
コイツが、そうコイツが間違ってるのだ!!!コイツがいなくなれば!!!コ
イツが死ねば!!!

殺す

私は、人形だ。そして、戦闘用に調整された私は、それに対して高い意識ももっていた。

でも話しかけられないのはちよつと、ほんのほんのちよつとだけ悲しかった。

おそらく引かれていたのだろう。人間社会に溶け込むために作られた私は、しかし社会の更なる、怒濤の変質により、人間より人間らしくなってしまうた。

特にここはそれが顕著でもあった。
多かれ少なかれ人間を捨てている。

人形の私が、一番人間らしいのは、皮肉だった。
でも話しかけられた。人間にだ。人間らしさを捨てていても人間なのは分かった。私は嬉しかった。そしてそのときは幸運だと思っていたのだが、自分を武器としてアピールすることについて、相手と同じ存在だと伝えることで、こっそり仲良くしようとする私の本心と、私の素直に言えないプライドがたまたま意見を一致させていた。

おかしくなった。

肉を強く打つような音が響き渡った。

おまえがっ！お前がっ！オマエガツ！
殺すために最適化された動きを繰り返す。

おれは、オレは訓練されたエリートで、化け物じゃないから、無駄な攻撃はしないんだ。こいつがしぬまで、無駄なことはしないんだ。こいつをころすためなんだ。おれがころしただけしかできないことを否定するためにこいつをころすんだ。

おれは、おれたちはこんななりだがにんげんなんだよ。
なんで、なんでこうなったんだ。おれは、おれたちは英雄でエリートで…

いきなりの衝撃に腹を押さえる。いや押さえざるを得なかった。その一撃は、私のもったデータのなかのダメージ指数において、対物ライフルクラスと示されていた。

先ほどまで陽気に話しかけていた彼の姿はどこにもなく、今は、記録の中のみにあるマンティコアを思い出させた。

回避、無理矢理に回避。戦術人形としては、私は高性能な筈で、近代化改修も施されている。それでも、目の前の人間だった彼は、それを凌駕した。

こわされる……！そう思ったとき、彼は弾けてきえた。

彼だったものの中から現れたのは、カメラアイがたくさんついた、また違う【人間】だった。

自分以外への期待は、大体期待はずれで帰ってくる。

私はそういいたかったのですが、まあ彼ははじめての恋を凄まじい勢いで失敗しましたね。

ここまで酷いと始末書案件です。

「あ、あんたはだれなのよ!? さっきのあいつはどっ? ねえ!? 答えなさいよ! いきなり殴ってきて、何か言わないと気がすまないわ!」

案の定パニックに陥っている。まあ、説明責任を果たしますか。

「私はこの所属のパイロット。名前はありますが、さっきの彼からはガンギマリ野郎、と呼ばれてましたね。そして、彼はいまあの世です。」

途端、コレは黙ってしまった。まあ当然ですね、死んだことを否定してほしかった。というのに肯定されてしまったので、驚いてるのでしょうか。

「なんでそんなに、平然と仲間を殺せるの……?」

嫌ですね、パニックになってます。取り敢えず落ち着けるとしましょう。

介抱しようとしてそれに手を伸ばす。

「さあ、WA2000、起き上がれますか？」

私は一瞬、呆然としていた。仲間を殺し、そして平然としているそいつをみていると、心の底から恐ろしくなったからだ。

それでも、私は反発した。怖かったからこそ。

「仲間を殺したような汚い手で、私に触らないで！」

そして答えて！なんでアイツを殺したの！そこまですることは無かったでしょう！」

一気に捲し立てた。アイツに文句をつけるにも、死んでしまつたら言う宛がない。

「彼より君の方がたかいからですよ。彼の体は実費ですむ。我々で再生できますからね。ですが、貴方は半分セラピー用の戦闘兵器、そんなものIMCにはありません。人間に気遣いしない会社ですからね。マーダーはそれでも、個人的に気を回した。外注です。IMCの前身となった企業と同じくらいの老舗、I.O.Pにね。大体なんでも自社グループで済ませれるIMCにたまたま無かった、人間に寄り添う機械だったからですよ。修理を依頼するには、輸送費、手数料、その他もろもろで彼が死ぬよりも高くつく。」

頭が、おかしかった。人間が、人間を値段で判断していた。ものであるはずの私と人であるはずの仲間を、まるで記録上にある指揮官のように、同じように扱っている。だが、決定的に違うのは、人間性と、人格を判断基準とし、同一視していた指揮官と違い、これは、それを、金の面で同一視していたことだった。

そこが、今まで見てきた人間らしくない人間と、目の前の何かの差だった。見た目でも、声でもない、もっと深い、何かの欠如。

もうそいつの出す音すらも、聞きたくはなかった。

ここでは、殺しの為だけに、なんてありふれすぎている、私では追

い付けないほど冷酷なんだ。

俺はエリートだったので。そう、だった。

いつからだろうか、俺は自分でも自分が人間であることを証明できなくなっていた。

そんな中、人間らしいものが現れた。柔らかい肉。

美しい顔。表情、髪の毛、唇。

俺はそいつに縋った。そういった人間らしいやつが側にいて、そして俺を認めてくれたら。そう、救われると俺は勝手に期待した。

だろう、は戦場にもつともしてはいけないことだ。

それは日常にも当てはまる。

そして、そいつは拒絶した。俺を拒絶したのではない。

俺よりも人間らしいやつが、人間性を否定したんだ。

俺の目論見である人間らしいやつが、非人間を人間として肯定することの真逆、そして俺のもつともしてほしくなかったことをされた。勝手な期待をしていたのは俺なのだ。

俺はどうすればいいのだろうか。というよりも、どこで俺はおれと定義されるのだ？ 奴は大丈夫なのだろうか。

そういえば。

「思想を強く持つてください。」

ああ、奴は、そういうことを考えていたのか。自分を定義するものを、自分以外に任せてはいけないのか。

エリートだとか、英雄だとか、人間だとか、自分以外に認められるだとか。全部が悪いこととは言わないけれど、それらは、頼りすぎてはいけないんだろうな。

俺は、エリートを、やめた。

「君も配属されたばかりで驚いただろうが、まあこういうことが起きるのを防止するために私は君を配属しようとしたのだ。が、失敗してしまった。君は悪くはない。道具を上手く使えなかった私の責任だ。自己メンテナンスをしておいてくれ。以上だ。」

ユーザーである老人の言葉を記録し、私は自らに与えられた収納スペースに戻った。

あんな事故がだ、まだ昨日の話だ。全然時間がたりない。メンタルモデルがズタボロなのは自己診断やメンテナンスしなくてもわかる。彼はどうしただろう。死んだんだろうか。再生は記憶が吹き飛ばすこともあると言う。

それは死んだも同義なのではないだろうか。せめて、あの時素直によろしくとでもいっておけばよかった。まさかあんなことで地雷を踏むことになるなんておもいもしなかった。

「なあ、話をしようぜ。」

彼が目覚めた。まあ、私は彼女に嘘を付かずに真実を伝えておいた

ので、あとは彼次第だ。

「新しい誕生日はどうです？」

「ああ、生まれ変わった気分だな、ガンギマリ野郎。」

素晴らしい。

「もう大丈夫みたいです。それでも、あれと友達に、なりたいのですか？」

「当たり前だろ。俺は友達が多い方がいいんだ。別に変な意味じゃねえ。俺が友達ほしいだけだ。お前みたいな哲学者と違ってな。」

もう大丈夫だ、彼ならなんとかなるだろう、私はそう確信しながら、あれの収納してある部屋を教えた。

「ありがとよ、あと、あれなんて言ったら可哀想だ。お前は精神と思考以外で区別しないんじゃないのか。」

なんとなく彼女の正体に気づいたのだろう。だが、それでも、もの扱いを否定してきた。

「まだそこまで貴方に言ってみましたっけ」

「なんとなく推測はつくんだよ。この俺だぞ、鋭いんだ。」

彼は結局、人間のような何かに見えて、やっぱり人間だ。彼が言うなら、私も認識を改め、あれを彼女と呼ぶことにしましょうか。

目の前に、昨日死んだ奴が現れるのを、体験することなんて、この宇宙でも珍しいことだとおもっていた。

だがここではそうではないようだ。

「なんなのよ。アンタ、昨日のこと覚えてるの？」

正直忘れて欲しかった。
でも。

「ああ、覚えてる、俺がお前を殺しかけた。すまなかった。」

こいつは、殺す、という言葉を使つてまで、あくまでも私を生命……いや、おそらく人間と認めようとしていた。「……辛くないの？人間以外を人間と認めるなんて。特に、貴方は。」

懲りないような私の口。

それでも。

「おう、辛くねえ。辛い原因なんかもう忘れちゃった。人間じゃなくても俺は、俺だ。」

驚いた。昨日とまるで違っていた。再生とはここまで人を変えるのか。それはもはや再生なのか。生まれ変わったと表現した方がいいかもしれない。

「なんか勘違いしてんなあ、俺は再生関係なく生まれ変わったんだ。半分は俺のお陰で、もう半分は、お前と、あのガンギマリ野郎だ。」

なんとなく語感で察しがつく。

「……昨日のあれ？」

「お前らお互いあれ呼ばわりすんのか。おもしろいな。」

でも、アイツは他人に期待してないだけで、いや、他人に期待しなくても生きてけるから誤解されやすいんだ。すぐにとはいわねえからまあ、理解してやってくれ。」

「当たり前よ。あんなのすぐ理解したくもないわ。すさまじく時間がかかりそうよ。」

「一応努力はしてくれるんだな。」

まあ、コイツがここまでいうならそうなんだろう。いまのコイツの雰囲気はマンティコアみたいな印象はない、穏やかなものだった。

「あんなので殺しにくるなんて。ちよつと常識疑うわ。」

「それについてはほんとすまん……許してくれないならそれでいい。」

ああ、また勘違いされてる。ガンギマリ野郎とやらが実際どこまで勘違いされやすいのか知らないが一体だれが一番勘違いされやすいのか。私も同格かもしれない。

「誰が許さないっていったのよ。昨日のは、まあ……お互いさまよ、仲

直りしましょう。」

「…おい…顔が赤いぞ、ほんとに大丈夫か!？」

「赤くなんてないっ!」

とりあえずは、明日からもこいつらと生活できそうだ。

人間じゃなくても、こいつららしいから。

商品カタログと、出荷前調整

人間の命は消耗品だ。

だが、これは悪い意味にのみに捉えられやすいが、実際のところは真実なのだ。

私は、意義のない理解は求めない。が、理解により効率が上がるのなら説明は厭わない。

私を血も涙もないものと思う人間もミリシアのテロリストにはいるだろうが、感情と同情により止められるフェーズは、この戦争はとつくの昔に通りすぎている。彼らは、それを理解していない。

人間は脆く、ありふれている。壊れない人間などどこにもいない。機械ですらすぐに破壊されるこの戦争を、どれだけ人間からはなれていても、98%の訓練による死を乗り越えていたとしても、最強の陸上兵器のタイタンとリンクし、そして本人が強かったとしても、人間の延長線上のパイロットが永遠に戦い続けるのは無理と言うものだ。

だが、それは何のバックアップも無かったときの話だ。人間は消耗品だが、使い捨てにするのにはもったいない。なにより、効率的ではない。

再生、という技術は肉体面の問題を完璧に解消する。彼らの潜在的な技術と、そして精神の深いところに刻み込まれた戦いの経験値を残しつつ、健康かつ新しい体を得ることができる。

しかし、精神は？再生は精神を、文字通りすり減らす。

表層の記憶は消えていき、そのままでは人格崩壊への秒読みを始める。

金銭上の問題や、本人の意思で、シミュラクラム、俗に言う体の機械化をするパイロットもいる。メンテナンスが楽だからだ。が、それも人間から離れていく。

それら全てが、いい方向に進むのならまあいいが、大体は精神的な死か、逆に精神の大きな反発による多数の死傷者を出すことになる。前者はもちろん使い物にならなくなるし、後者も、いつ破裂するかわからない人間コンプレックスの爆弾を抱え続けることになる。人間

性を失えば、大体待っているのは破滅することだった。

そこで、私はこのパイロット達の中に、人間性を投入することにした。人間らしいものとの、自然な交流で、彼らの人間性を繋ぎ止めるのが目的だ。

ところが、皮肉なことに、私の所属する会社、I M Cは人間が人間離れしている。精神的なものもあれば、肉体的なものもだ。

私は、自らが人間的に優れてるとは自信をもって言えないし、立場上彼らとあまり関わることもできない。現場にでる兵士ではない人間に生半に同情されても彼らには嫌みになるだろう。

一般の兵士でもだめだ。確かに人間らしいが、やつらはパイロットに憧れている。憧れは理解からもっとも遠い。すぐにパイロット側がやるせなくなるだけだ。

そこで矛盾するようだが、私は人間らしさを与えるために、人間以外を投入することにした。

自立人形。自ら考え、人に寄り添う、I M Cにはないもの。我々とはまた違ったアプローチでシェアを獲得した老舗ロボット制作企業、I・O・Pの製品。その戦闘モデルを外注したのだ。

主にあれらは、我々の生産、運用する自立兵器と違い、とても人間らしい。下手をすれば、I M Cの人間よりも人間らしい。パイロットからみてもおそらくそうだ。

そして、戦術人形とよばれる、それらの戦闘用カスタムは、強い。シンプルな言葉だが、強いのだ。完全な統率システムが完成した人形は、同型機を5体同時に、完璧に制御し、パイロットとはまた違った戦闘力の高さを発揮する。

腕力や出力も、華奢で綺麗な外見からは想像できないほど強力だ。我々の標準な機械歩兵スペクターに、勝るとも劣らないだろう。

そしてそれらを、数百年続くロングセラー商品へと押し上げたのは、やはりA S S Tシステムだろう。

我々の設計思想が、どんな銃も扱える汎用性を求めたものだとすれば、あれらの設計思想は、銃一つ一つへの、究極の合致。運用するのは、もはや骨董品とも言える古い銃だが、それらをほんの少し改良、改

修するのみで、現代に通用してしまうレベルの、凄まじい技術だ。

しかもそれは、たった一人の研究者が作り出したというのも驚きだ。

つまり戦術人形は、とても人間らしく、そして戦闘力も高くパイロットに気後れせずコミュニケーションをとれるであろうと、私は考えた。

そして、I. O. Pのカタログを片手に頭を悩ませ、どうせならプロ意識のあるタイプの方が彼らとは馬が合うのでは、などと考え、基本メンタルにプロ意識を持つとされる、WA2000型を注文したのだった。

注文された。

私は、I. O. Pで生産された、自立人形。型はWA2000。現在では珍しく、今回のユーザーは、オプションで戦闘力を求めたそう。つまり、私の真骨頂。見てくれがいいので、戦争の少なくなつた現在では、私達のような大昔の戦闘用に作られた筈のモデルも、戦闘機能を外して、しばしば一般向けに販売されている。

彼らの元に配属されたときのための情報が、電腦の中に流れ込んでくる。

注文元は、企業だった。

しかも、おそらくこの地球上では知らない人はいないだろうIMCからだ。生まれたての私の電腦にすら、基本的な常識としてインプツ

トされているほどの企業。

星間製造業株式会社。この文字からも分かる通り、彼らは星を跨いで事業をしている。

その大きさは尋常ではなく、おそらく食品から始まり、軍事まで、考える全ての事業を圧巻している。

そんな大企業が、何故？しかも、顧客の事務所の位置は、今ではテロリストだらけだと言うフロントティア星系。入植者の反乱により、あまり船は行き来できなくなっている。大量の荷物を運ぶ輸送船をワープさせようとすれば、船内蔵では収まりきらないほどのワープ航行装置が必要になる。ゲートウェイといわれるそれらのうちのフロントティア側……いわゆるデメテルゲートウェイが破壊されてしまっていた。つまり、私は少人数用の、およそ物資を運ぶには向かないであろうドロップシップと言われるものに乗って行くしかない。そこまでして、何故？戦力なら、彼らの企業内で十分に得られるはずなのに。

私は好奇心と、そして自分の真価を示すことへの期待と、ちよつぷりそのユーザーにあつて仲良くしたい気持ちをもちながら、手続きが終わるのを待ち、そして迎えのドロップシップに乗り込むのだった。

地球から飛び出せば、星がよく見えた。この状態だと時間がわからなくなるが、事務所につくのは宇宙時間では夜だそうだ。

浪人と妖精と

我々機械全員に暇という概念があるか、と聞かればそれは怪しい。

ただ、私は今暇なのだろう。まあ体は動かせないが。戦闘時間外だから。

しかし、そんな暇はすぐ破壊されるのだろう。

… 目の前にめんどくさい新兵が浮かんでいた。

「私のやり方がわかったのなら、あとはRushあるのみ！」

正直いますぐニュークリアして職務放棄したかったが、私はコイツの相手をしなければならぬそうさ。

我々は兵器だ。比喻でもなんでもない。

最近配属された、戦術人形とかいう骨董品（しかし素晴らしい性能だが）は人間に不快感を与えず、上手く共存するためにあのような姿をしているらしい。とても良い気遣いだが、あいにく私の生まれ故郷のIMCはそこまで人間に配慮していなかった。

でも、目の前にいるこいつはそんな高尚なものでもない。

大昔の、それこそ今のIMCの創始者とも言える、ハモンド博士と肩を並べるレベルの天才が作った、と言えば聞こえは良いが、実際のところ片手間に適当にプログラミングされた、自律ドローンだ。プラズマドローンやクロードローンなどと、発想は同じ。

ただ、コイツらが我々にめんどくさがられるのは、

自分のことを妖精だと思いついでいることだった。適当なプログラミングでも、仕事はキツチリこなす。ではその皺寄せは、はたして人格面に現れた。ハッキリ言うとは異常だ。

ただ、我々のユーザーの、更に上司が直々導入した戦術人形と、そのセットで半ば押し付けられる形で配属されたこいつは、まあ機械的に言えば我々よりも少し上位だった。それが、また厄介なのだが。

今日は、リージョンが悪の軍勢だ。

私はその付き人らしい。

イオンは大賢者で、ノーススターは聖獣。

スコーチは心優しい熊。モナークは、なんとなくスライムを押し付けられていた。トーンは効果音担当だ。いや、おかしい。

我々の心配や思考をどこ吹く風で、ドローンどもは話を進める。なにやらよくわからないが、取り合えず私が死んだ(ことになっている)ところあたりで、もう私は話を聞いていなかった。

ただ、コイツらの平和な様子と、そして楽しそうな笑い声を聞いていると、なんとなく暇を堪能している気がした。我々にはそんな高度な感情は、備え付けられていないが、学習機能はついている。おそらくパイロットやコイツらと関わるうちに少し変わったのかもしれない。

ただ、どこまで行っても機械で、更に戦争に特化したストライダーモデルの私は、こんな戦争だらけの宇宙にしか居場所がなく、彼女らのように、本心から笑える未来が来るとは思えなかった。

指揮官業

戦争は続く。

私は、古く、そして伝統的でもあるこの指揮官業に誇りを持ちつつも、少しやるせない気分であった。

人間は戦争と友達だ。世界大戦を二度経験し、もうそんなことをしてはならない、と誓った矢先に、E・L・I・Dが現れた。そのときまでとは比べ物にならないような量が。

中学生のイタズラで滅びたのは、今や有名な話だ。I・M・Cは自らの失敗は隠すが、他人の失敗は凄まじいぐらいのA・M・Pをかける。

結局人間というのは、余裕がないと優しくなれないらしい。

そのときの先進国も、世界連合も、優しさを欠片も失くしてしまっただ。

きつと誰も責めることはできない。死にたくないのは誰もが一緒だ。

そしてそれらと、私がやるせない気分なのとの関係性はと言うと、現代における優しさの欠片もない組織代表、I・M・Cの犬が、私に協力しにきたからだ。

結局第三次の、人間同士の住みかを巡る争いは、住みかの減少を引き起こしたのみで、何もよくはならなかった。

それはまあ仕方ない。生きるためだ。

そのあとの南極連合とルクセトなんたららの戦いも、まあ、わかる。人間同士の、思想による因縁は深い。

だがわからんのはそのあとだ。I・M・Cは今コア星系といわれている、太陽系を中心とした世界を手に入れるために、必要に迫られたのではなくただ成長の過程で戦争を起こしたのだ。今も空の向こうで戦争しているらしい。

もはやE・L・I・Dも、そして鉄血も、一捻りどころかボタン一つで滅ぼせるだろうに、彼らは生きるためではなく、成長の為にその力を振るう。

つまり、合法的にぶん殴れる敵をのこしつつ、平和の維持費を居住

区の奴等から巻き上げて、その欠片をPMCの俺たちに死にきらない程度に与えている。癩に触る。

俺は平和の為に戦う、とまではいなくても、そこにいる人の為に戦いたかった。

が、今やつてるのはIMCの舞台装置だ。E・L・I・Dや鉄血を殺しきろうにも、IMCが先に住民と契約を結んでるので、俺たちはそのおこぼれをもらうしかない関係上、そんなに戦力を得ることができなかつた。

正直、IMCが憎い。圧倒的且つ凄まじいパワーを、さらに自らの強化に使うとする。異常だ。

そして、そんなIMCの産み出した人間やめた人間が、今日の前にいるのだ。そりゃ気分も悪くなる。

「で・・・お前はなんのために来たんだ、IMCのお使いさんよお？」

性急にもおもえ、そして乱暴だが、俺は取り合えず威圧しておく。嘗められるとやってけないのがこの仕事だ。

「あなたは何か勘違いしている。我々パイロットは、皆IMCに所属している訳ではない。」

こいつは何を言っている？パイロットは、IMCのみが保有する優秀な兵士ではないのか？

「いえいえ、我々は元IMCというだけで、今はIMCと敵対しているのですよ。脱サラみたいなのです。懐かしい響きでしょう？」

なんだと？やはりIMCは都合の悪いことを隠す。

「共に戦おうじゃありませんか、指揮官殿。」

おもしろくなってきた。やはり、他人の隠す嫌なものを暴くというのは、人間の本能的な快樂なんだろう。

俺は普段ならば聞かない怪しい話を、IMCへの溜め込んだ不満も手伝って、食い入るように聞くのだった。

自己同一性

結局私の中の、アレ、いや、彼のイメージは、哲学的な薬中になった。

「あなたは、自分が自分であると、何を根拠にして認識していますか？」

またこれだ。こいつは暇になればすぐ、よくわからない、哲学界の未解決問題（もつとも、答えがないのが哲学だが）をなげかけてくる。「そんなの見た目じゃないの。鏡で見ればわかるわ。」

めんどくさいので、適当に返しておく。何時もはそれで終わりだった。貴重な休みを脳の運動に使うのはごめんだ。

「それ、私達の過去をみて、ほんとに、そう言えますか？」

だが、珍しく、奴は食い下がってきた。

「あんたらの昔なんて知らないけども、大体そうでしょ。」

それでなんとなくむきになった。私の型の悪い癖だ。

「別に人間の頃と今が違うなんて言っています。我々は特殊ですしね。シミュラクラムの過去、つまり生き物のころ、人間の間の話です。」

そこで、私は気付いた。子どもと、それが成長したあとの大人は見た目が違うが、恐らく同一だ。

誰も見た目が変わらない世界でしばらくすごしていたから、認識がずれていたのだろう。

認識を変えていくのが、少しだけ、ほんの少しだけ楽しくなって、次の論を紡いだ。

「じゃあ、構成する物質じゃないの？見た目は変わっても、中身は変わらないでしょ。」

「七年」

「えっ？」

「一説には、七年で人間の体はほとんど入れ替わります。」

それってつまり、物質的な同一性も、ほとんど失われるってことじゃない。

「まあ、脳やらなんやら変わらない細胞もありますし、それは日常においては大体正解です。」

一応の正解といわれたが、しかし気になるところがあった。

日常においては？ 妙に引っ掛かる。癩だが、こいつは他人の興味を引くのがうまい。

「どういふことよっ。」

休みを削っているのはわかるが、もういい。こいつの話もたまには聞いてやろう。

「私がきいたのは、あなたは、というものです。先ほどの、見た目、もそうですが、人間の場合よりも人形の場合の方が、その理論だと壁にぶつかります。」

「人形は、同型が沢山います。高級とはいえ大量生産品ですから。」

言われてみれば、確かにそうだ。私以外に人形がいなかったし、人形にしては珍しくダミーを持っていなかったから、またもや認識がずれていた。

「見た目で考えるならば、皆同じになってしまう。更に、スキンの存在もややこしい。」

スキン、と言われる人形の拡張機能は、見た目を完全に変えてしまう。着せ替えなんてレベルでもないし、もつと言えば、文字通りの人工皮膚を張り替えるとかのレベルでもない。体ごと入れ換えてしまう。つまり、物質的な連続性はゼロになる。それでも、きっとその人形は同一だ。

「……じゃあなんなの？ 私達の同一性の証明は、私達はなんとなく自分を自分であると認識していると、そう言いたいわけ？」

なんだかよくわからなくなってきた。答え合わせがしたい。

「ええ、なんとなく納得出来るならば。」

変な言い方に、諦めかけていた私の心がまた思考に耽った。

「……どういふことよっ。」

「仮に。もし仮にですが、なんとなくで自分を自分であると定義しているとします。その【自分】の前に、またもや自分を自分であると、同一の存在であると考えるもう一人の【自分】が現れたとき、一体自分

はどちらなのか。」

「……簡単に言って」

「自分に出会ってしまったとき、どちらが本物か?、ですよ。」

いや、そんなのありえない。そう言おうとして、私は思い当たることがあった。

「メンタルモデル……って複製できたんだった。」

そうだ。人形以外には非現実的だろうが、私達はコピーができる。もし仮に誤作動かなにかで、今のメンタルモデルをコピーした私が、私の生きているうちに複製されれば、一体どちらが本物なのか。

元になった私が本物か? いや、完璧なコピーならば、本物と同じようなものだろう。そこに1号2号もない。ソートするたび位置が入れ替わるかもしれない。

見た目、ではもちろん判定できないし、物質の同一性の観点を適用したとして、それではスキンを説明することができなくなる。着るたびに死ぬ。なんとなくではお互い譲らない。決められない。決めることなんてできない。想像上なのに、なぜかとても恐ろしく感じた。「完璧に、説明する方法はないのかしら……」

疑問を口にした私に、彼は笑った気がした。

「ええ、結論から言えば、どっちも本物ですよ。少なくとも、私はそう思います。」

やっぱり、イカれている。上手く説明するために、この哲学における、自己は一つであるというなんとなく決まっていた大前提をぶち壊した。

「私はね、思考で、思想でものを区別します。見た目を判断材料にするのと、我々は自分が嫌になります。物質はコロコロ切り替わってしまう。すぐ再生です。」

しかし、思想は? 再生しても、それでも残る根強い思想こそが、我々を、我々足らしめているものだと考えているんです。そして、それは人形にも当てはまるものじゃないですか?」

それを肯定するために、自己が増えることすら容認するのか。大した執着だ。でも、まあ、楽しかった。私は自分が増えることをすんな

り容認出来そうにないが、向き合う心構えくらいはできただろうと思う。

「思想の部分では、自分が嫌にならないの？私は、ただの妄言か、薬に溺れて変な事を口走ってるようにしか聞こえないわね。」

「私は他人に期待せずとも生きていけるので、どう思われようとも構いませんよ。」

こいつは、どれだけ強く言ったとしても、全く怒りもしない。

それが心地良かったし、ちよつと不満でもあった。

「そういえばなんでこんな長々とした話を急にしたの？」

何時もは適当に返事した時点で引き下がるじゃない。」

「あなたにダミーが与えられるんですよ、ダミーやらなんやらの関係上導入すると先程話した自分に出会う、に近い状況になるんです。まあ、精神崩壊するようなことが万が一にでもあると困りますから、簡単なテストをしたのですよ。実際、M I A 報告のミスで、帰還したら再生した自分と出会い、なやみぬいたパイロットがいました。が、両方自殺したので再生しなおしました。無駄な出費でしたね。」

こいつは、ほんとにイカれてる。」

消耗戦

戦争だ。

ミリシアとIMCの戦争は、私が来る前も来た後も激化の一途を辿っていた。

私たちは、ドロップポッドに乗り込む。これは、高空から30秒くらいで、直接戦場に兵力を送り込むことができる発明品のだが、私はドロップシップの方が好みだ。

理由はすぐに分かる。

「私これ苦手なのよね……」

「黙ってください、ドロップシークエンスを開始します！」

この哲学薬中はあとでシップにのって悠々と来るのだろう。

正直に言うと、私ものせてほしい。

今は私とダミー2、むさ苦しい男2だが、この前までは周り全員がコミュ障IMC人形(やつら定型文しか返してくれない)だったり、逆にうるさ過ぎる人間ばかりだったり(なんで興奮剤の話をここで聞かないやならないのよ)で、戦場につく前から疲れたぐらいだった。

ドロップポッド特有の浮遊感が私を襲った。

がたがた。ゆらゆら。何が音の原因なのか、想像するだけで恐ろしい。

私はこの不安定さが大嫌いだった。

同僚のぼやきも聞き流し、私は必死に揺れと浮遊感に耐えた。

しばらくして、無機質なアナウンスと、凄まじい衝撃が、地表への到達を私たちに知らせた。

「隊列を乱すな！前方に注意！」

IMCの分隊長が号令をかける。私たちは四人(その内の半分は私だが)一組で、余程のことがない限り、私たち四人は一緒に生き延びるし、もしくは四人一緒に死ぬ。

まあ、私たちがいるからには余程のことがない限り全滅なぞさせない。

私たちはいわゆる選抜射手で、そこそこの距離から相手の重要な攻撃部隊に被害を与えるのが役割だ。

彼ら二人は最新式の、Lastimos armor製品のロングボウ—DMRを携行している。一般の兵士程度ならば、胴体の適当なところを撃ち抜くだけで戦闘不能、あるいは死に追い込む。それほどまでに殺戮の技術は進歩していた。

それにたいして私たちは、改修や補強は施しているものの、骨董品もいところの、半身とも言えるWA2000を得物としていた。

おそらく彼らの銃に純粋性能で勝るところは少ないだろう。

「おい、いくら人形とは言え、そんな武器で俺たちの足を引っ張らないのか？」

だから、彼らのこういつた言動も、仕方ないと言えば仕方ない。

「ふん、見くびらないことね、私は殺しの為だけに生まれてきたのよ、アンタらとは格が違うところを見せてやるわ。」

しかし、それでも尋常の兵士ではないのが我々戦術人形であり、そしてそれを支えるのがASSTだった。

私たちは、建物と建物の合間を縫い、できるだけ見つからぬように、しかし迅速に行動していた。

行軍中のあるとき、私のダミーが敵を認識した。

瞬間、ダミーではない私の銃は、既に火を吹いていた。

彼らの驚いた顔といったらもう面白いくらいだ。私はただ、ダミーの視覚情報と、戦術人形のみが持つであろう銃を自らの身体と同じ用に扱うことを可能とする超感覚を利用し、顔を出すこともなく敵の分隊長の脳天を撃ち抜いただけだった。

そう、この程度のことは造作もないのだ。

「やっぱお前らやべえな、人間じゃなきゃここまでできるのか。」
分隊長が感嘆する。

ふふん、この人は、みる目あるんじゃない？まあ当然だけど。
それよりもだ。

「どうだか。スペクターだって似たようなことは出来るんじゃないのか、マーダーの考えることはよくわからん。無駄じゃないのか。」

……「こいつは許さん。絶対にだ。」

私たちはそのあともすこぶる順調だった。

こちら辺はもともとミリシアの居住区で、様々な間取りの乱雑な住宅でゴったがえしていた。

その地形を存分に利用して、私たちは撃ち殺しまくった。

アイツらも、中々やる。

……「癪なのは、私の性能を頑なに認めず、価格不相応だと常に文句を言ってきたやつが、私と勝負をしていると云うことだ。」

「ふーん、やっぱり骨董品は骨董品だったな、俺たちとそんなに殺した数はかわりない。」

カチンと来た。私の型の悪い癖は、すぐに感情的になることだと言われているが、今回ばかりは私じゃなくても怒ってたと思う。

「なんですって!?!負けてる癖によく言うわね!」

売り言葉に買い言葉。一触即発の危機。

「おい!お前ら喧嘩してる場合じゃないだろ!まだ戦いは終わっていないぞ!」

……「私は許した訳ではないが、その前に私はプロなので、そして他ならない分隊長の命令なので素直に従うことにした。アイツは不服そうだ。プロ意識が足りないんじゃないのかしら?なんてあとでからかおうと思ったところで、戦場にあの音が響き渡った。

腹の底に響くような、恐ろしい音。戦場の隅々にまでその存在を主張する。私は急いで電脳の友軍反応を確認する。

ない。ない。ない。タイタンフォールの要請は、どこにもなかった。つまり、あれは。

「敵のタイタンフォールを確認!ここはもうだめだ!行けえ!行けえ!」

味方からの通信が入る。

始まった。戦場におけるIMCの有利は変わらないが、しかし私達普通歩兵にしてみれば、あれは死の音だった。

T i t a n f a l l

落ちた、落ちた、何が落ちた。

どんな区分の、どんなタイタンが落とされたとして、それが普通歩兵にもたらす結果は、死ぬことでしかなかった。

突然の緊張感。分かっていたことで、確かに覚悟していたことでもあるのだが、しかし明確な形をもって死が急速に迫ってくる瞬間は、何度体験しようと思えるものではないし、それに慣れてしまうと何か大切な物を失う気もした。

「どうする…?」

分隊長が、重々しく口を開いた。普段の彼からは想像できないほどゆっくりした調子に聞こえた。

「一度頑丈な室内に避難を…」

「馬鹿にしないで」

私は、私が考えるよりも先に、口を動かしていた。心底怖いのは私もそうだが、それでもやるのだ。私は、それを遂行する能力を持っている。

「私達で、タイタンを墜とすのよ」

二人は、啞然としている。

真つ先に正気を取り戻したのは、流石というべきか、分隊長だった。「やめておけ、お前にそんな力はない、俺たちにももちろんない。お前が俺たちよりも優れていようが関係ない、奴等、パイロットにとって俺も、お前と仲の悪いそいつも、そしてお前自信も、等しく塵のように片付けられるんだ。」

弱気だ。いや、弱気なのではない。普通は、それが当たり前なのだろう。タイタンに勝てるわけがない。

だが、私は奴等を知っている。知っているからこそ、勝てる気がした。そして、ここであの嫌みなアイツに今度こそ私の価値を認めさせたかった。

「いい？いくらタイタンと云えど、弱点は存在するのよ。」

私は、あの哲学的薬中から半分強制で教えられたタイタンの知識を総動員して、ある作戦を立て、その有用性を隊長に説明していた。

「まず第一に、小回りが利かない。この時点で、実はこの地域においては、私達にも勝てる芽がある。」

彼等は、意外なことにあの嫌みな奴も、私の話を聞いている。

「そして、パイロット特有の三次元的な軌道は、タイタンにはないわ。高い走破性はあるけれど、結局は大型兵器の中では、という枕ことばがつくことになる。」

そして、彼らは私の言わんとしていることを、薄々理解したようだ。

「つまり、この住宅街を、また存分に利用するのよ」

私達のジャイアントキリングが、幕を開けようとしていた。

丸っこい、場所が場所ならかわいさすら覚えそうなそのフォルムは、しかし兵士である私達にとつては、灼熱地獄の象徴のようなもので、月並みな言葉だが恐ろしかった。

しかし怯んではいけない。ダビデとゴリアテの神話のように、また一寸法師と鬼のように、私達小さきものにも大きなものを倒すことはできるのだ。

私たちは、支給されていたアーチャーを構えた。これは所謂誘導機能つきのロケットで、歩兵の扱える武装の中では希少な、タイタンにダメージを与えることのできる武装だった。しかしただ撃つのではない。

私達は散開して、様々な建物に潜伏している。ここで同時に私達はアーチャーを構えた。

ロックオンするための必要な行程として、しばらく目標をアーチャーに備え付けられたカメラにしばらく捉え続けなければならぬ。

そして厄介なことに、このロックオン時の状態は、相手に筒抜けになつてしまうのだ。

しかし、それは大雑把なもの。そこに私は付け込もうと考えた。多数の方向、高さから同時にロックオン行程を開始することで、対応を遅らせようと考えたのだ。

そして、更に万全を期すために、私のダミーを、ロックオンの行程を行いはするが、分隊の中で一番目立つ所でそれを行わせ、そしてギリギリで回避させるといふ動きをさせることで、本当の意味でのダミーとさせた。

果たして、あの巨人―スコーチはそれに釣られた。

スコーチのもつ、巨大なテルミットランチャーが、文字通り火を吹く。

ダミーは発射される前に既に隠れさせていた。

狙われなかった私達のアーチャーロケットが、スコーチに飛んでいく。三発とも見事命中し、大きなダメージを与えたようで、とりあえず一安心である。

しかし、テルミットランチャーが先程までダミーがいた地点を寸分の狂いなく撃ち抜いたのを見て、私達は気を引きしめなおさざるをえなかったのだった。

死と隣り合わせの行動を、手をかえ品を変え行い続けた。ときにはサッチェルをぶん投げ、ときには弱点部位を狙撃し、またなりふり構わずフラグをぶついたりもした。

そんな恐ろしい、何時間にも感じる時だったが、やがて、スコーチの体を守っていた装甲が剥がれ、その駆動部や、黒い骨格が丸見えとなっていた。

そして、私は最後の勝負に出る。

もはや崩壊寸前のスコーチ。私はその目の前を駆け抜ける。

追いかける巨人。逃げる小人。しかし小人が逃げ切れるわけもなく、そしてあえなく私は死んだ。残酷に、しかしあっけなく。

だが、それはダミーだ。

偽物が潰されたその瞬間、本物の私は巨人に飛び乗り、そして、その心臓をにぎり、引き抜こうとした。

そうだ、これさえ引き抜いてしまえば。中のパイロットもろともスコーチは爆散し、私たちは勝つ。勝てる。勝たなきゃいけない。

しかし、パイロットはどこまでも冷静で、判断が早かった。

気づくと、スコーチは独特なポーズをとっていた。

あれはイジエクトだ。そう、スコーチが心臓であるバッテリーを引き抜かれ、爆散するそのほんの少し前に、奴はスコーチを破棄し、上に乗っていた私もろとも、空高くにうち上がった。

今まで経験したことのない、脳天からの空気抵抗。

瞬く間に、地上の仲間は小さくなっていき、そして徐々に、近付いていた。その射出の頂点。動きが無くなる、一瞬の静寂へと。

そこで気づく。パイロットが、こちらを見ていた。間に合わない。こちらが撃つよりも、パイロットが引き金に手をかける方が早いのは明らかであった。

しかし、来るはずの死は来ない。

それは何故か。パイロットは、その胴体に二つの大穴を開けていた。

いくら人外じみたパイロットといえど、ロングボウの弾を二度は耐えられなかったようだ。

私は、本日二回目となる、着地の衝撃を、生きてまま味わうことが出来た。

正直着地で死ぬかと思ったが、しかしなんとかやりきった。ここで死んではお笑いだ。そして私は人形だぞ、これくらいできなくてどうするんだ……。まあ、このあとは隊長に運んでもらったのだが。

「素晴らしい戦果だ、通常歩兵がタイタンを破壊するとは、期待以上の働きだ。」

私たちは極めて異例の働きをしたとして、その後褒章を得た。友、
となったパイロット達も、私たちのことを褒めそやしてくれた。

悪い気はしない。正直にいうと、すごく嬉しい。
しかし、だ。

「まあ、俺達がいなきや、お前は死んでたがな。無茶ばかりして自分
がどれだけ金を使うのか分かってんのか？途中で失敗していたらお
笑いだったな。」

こいつはいつまでたつてもそうだ。

なにも変わらない。

「いつてくれるわね、私はプロよ。作戦は失敗しないわ。」

なにも変わらないのに、なんとなく私はコイツが嫌いではなくなっ
た。

「いや、コイツはお前が心配なだけだぞ。」

「どうだか。無理はもうすんなよ。」

燻りと狼煙

どんな困難が行く手を阻もうが、俺はアイツらに破滅をもたらしてやる。絶対にだ。

パイロットに誘われるがまま、俺たちは彼等のアジトらしき場所に来ていた。

俺の隣には、護衛として連れてきた、保有する人形の中で俺が一番信頼できるPKPがいる。

コイツは、俺が指揮官業を始めたころ、最初期に製造され俺の元へと来たこの上ない程の高級人形だった。その頃の舞い上がっていた俺は、PKPとともに大昔の巨大PMC、グリフィンに居たとされる鉄血を大きく衰退させた大英雄のあとを継いでやる、皆の平和を守るヒーローにコイツとなるんだ！などと呑気に考えていた。俺の憧れていたその大英雄は、指揮官を志すものならば知らぬものはいないだろう有名な存在であった。

が、結局の所は俺達は大英雄ではなく鉄血の残党や、もはや本腰をいれればとつくに滅ぼせたであろうE.L.I.Dとまるで互角の戦いを演出するような名演出家と名女優たちに成らされていた。結局人間の敵は人間なのだ。人間以外など敵にもならない。

こんなのは、俺が思い描いていた理想の指揮官ではなかった。不満を持つていたのは俺だけじゃない。

だからこそコイツ、PKPも連れてきた。コイツは、いわば同志だ。PKP型はエリートを自称する。もちろん、それだけの実力を伴ってだ。しかし、俺のところに任された仕事は誰でもできるような残党処理や書類仕事、IMCのイメージアップのための様々な雑用でしかなかった。おそらくコイツは、想像もつかないほどつらかっただろう。

あの話を副官として聞いていた彼女が、今の今まで、恐ろしく単調な書類仕事と、ルーチンワークで終わらせられるようなくだららない防衛任務ばかりで精気を失って久しかった瞳を、少しばかり輝かせていたのを、俺は見逃していなかった。

俺たちを連れてきたパイロットは、皆のリーダー的な存在のようだ。今もここで、集まった奴等を鼓舞する演説をしている。

「今も宇宙の向こう側では、我々の同志が自らをも惜しまず戦っています。彼らは、我々とすむ場所や、人種も違う。しかし、志すものと、境遇は同一であります。

彼らは、我々と同じく、I M Cに搾取される側でした。

我々は労働力と誇りを、あのI M Cに奪われました。しかし今日、同胞と同じようにそれらを奪い返すのです！」

言葉自体はシンプルだが、しかし心を突き動かすその演説により、ここにいる人間の気持ちは一つになっていった気がした。できる気がする。

「我々は、デモ行為を行います。」

今演説していたコイツが、俺達がやるべきことを説明している。

「我々は、あくまでも平和的に彼等に抗議するのです。」

彼自身は、穏やか且つ理知的な言葉を選んでいるが、その実まったく穏やかではない。つまりこいつは何が言いたいかというと、自分達からは襲わず、I M Cから攻撃された、ということにし、大義名分を得たいようだ。確かに、そちらの方が協力は得やすい。I M C側から襲ってきたとなれば、普段日和っている奴等も自己防衛のために戦わざるをえなくなる。

ここにいたのは、俺とP K Pのような指揮官とペアの人形、というような構成ばかりだった。

ある種のP M Cの伝統なのだろう、戦術人形と共に戦うというのは。無機質なロボットでは、人間はまいてしまうのだろうか。それともただの好みの問題なのか。確かなのは、とにかく人間は、人間らしいものを好むようだ。

「やっど…ワタシの価値を…指揮官に示せるのだな…！」

話を聞いていた俺の相棒は、俄然やる気のようにだ。

作戦は大々的に行う。

数カ月後、俺は指揮官をやめていた。だが、PKPは連れたままだ。こいつの所有権は、俺がPMCから雀の涙程度にもらっていた給料を、また気の遠くなるような期間貯めた貯金をはたいて、会社から買い取ったのだ。こいつだけは、俺と来てほしかった。

そしてなんのためにやめたのか。そりゃ、今から俺達は革命の狼煙を上げるためだ。

こちら辺は中々に安全で、その平和を俺達が守っていた。いや、守ったように見せかけていた。IMCは安全の対価として手に入れた金を、好き勝手に中抜きして俺達PMC、そして指揮官に渡す。自らの兵力は十分なのに、それを守るためには使おうとはしない。経費削減のため、また純粋な戦闘機械を居住区の近くで使うのはイメージを悪くするからだろうか。とにかく、やつらが兵士を動かすのは、どこまでいっても自らの成長のためのみなのだ。

しかしここ自体は、さつきも言った通り平和なので、兵力は手薄のはずだ。

それにつけこみ、俺達は今から変える。この世界を。社会を。

俺は他の元指揮官達と道を練り歩き始めた。その人員の中には、ダミーリンクにフードを被せた人形も入れ、まるで大規模な労働者運動にみせかけていた。その様子たるや、一瞬だけだったが、まだ資本主義が正常に機能し、労働者たちがまだ声を失う前の世界を想起させるくらいで。

「こちらはIMC警備担当者です。このデモ行為は許可されてはいません。今すぐに中止し、はやく撤退しなさい。」

案の定、これをとめにIMCがやってきた。そりゃ元の自らの末端社員が、自社のことをこき下ろして回るのだ、放っておけばどれだけの風評被害がでるかわからない。

ちよっと前までは俺達がデモを止める役だったのを思い出すと、少し滑稽だった。

IMCは強引だから、すこしこちらがごねればすぐにボロをだす。

「我々には発砲許可が与えられています。可及的速やかにこのデモ行為を停止し、解散してください。さもなければ発砲します。」

「なんどか立ち退きの拒否をすれば、徐々にやつらの脅しが強くなる。狙い通りだ。」

「だから俺達は退かない。」

「じれったくなったのか、それとも威圧なのか、やつらが銃を構える。」

「挑発、警告、宣言、宣告。」

「長いようで短い時間をすごしたあと、やつらのリーダーがしびれをきらしたのか、ついにそのときは来た。」

「彼らの人差し指により引き金がひかれ、雷鳴のような銃声が、連続して響き渡っていた。」

「しかし、俺達にはたいした被害はない。」

「何故なら、」

「ショットガンの人形達が俺達の前に立ちはだかり、奴等の銃撃を防いでくれたからだ。」

「用意周到な指揮官たちの下準備はこれだけではない。」

「その後ろでは、火力支援のための人形達が、一斉に構えをとっていた。完璧な布陣だ。俺はこういう真面目な戦いがしたいと常々おもっていたんだ。」

「まさか人形までもが敵になるとは思わなかったIMCの警備担当者たちと、俺達革命家との戦いが火蓋を切った。」

拠点増幅

銃撃戦は苛烈で、まるで嵐のようだった。

人形たちの練度は相当に高く、ダミーリンクを複数体使いこなした変幻自在の戦法が、I M Cの警察部隊を攪乱していた。押し寄せる波のような銃撃が、I M Cを襲う。

元々ここらは俺たちP M Cに馴染み深い都市だったので、通報を受けて派遣された程度の、土地勘のないI M Cを手玉にとるのは容易であつた。

指揮官である我々も、様々な工作で人形をサポートしていた。

遮蔽物に隠れながら、リアルタイムで人形に指示を出していく。

ドローンを飛ばし、様々な支援を彼女らに与える。

人形のシステム上、指揮官とセットになることが、彼女たちにおける最高のバフなのだ。

そのおかげか、それとも人形たちの技術の成果か、もしくはその両方なのか、物量では圧倒的だったI M Cが押されていた。

「おい！人形どもの管理はどうした！さっさとここの管轄のP M Cへ連絡しろ！」

I M Cに派遣された警察部隊は、勝つことが決まっていたような事前的目論見から大きく外れ、むしろ戦術人形によるデモ参加者への加勢によって劣勢になっているこの状況で、平静を失っていた。

こちらの攻撃は、虚空を貫くか、もしくはS Gクラス人形に弾かれて終わるか、そのどちらかで、そして相手側の攻撃はA S S T特有の正確さで、着実にこちらの前衛を削り取っている。

「はやくP M Cに人形の停止コードを発令させろ！ユーザー権限を使え！やつらはP M Cの備品のはずだ！」

怒号に近い、焦燥を含んだ指令が飛び交う。

弾の嵐の中、これだけの判断を下せたのは流石というべきだろう。しかし、通信部から部隊長に返されたのは、期待を大きく裏切るような、例えるならば死刑宣告のようなものであった。

「できませんー！やつら、所有権がPMCから個人へ変わっていますー！」
部隊長にも、それに当たる知識はある。

誓約。基本、戦術人形というものは企業の備品であり、到底個人の所有できるものではない。

が、その誓約というシステムは、有り体にいえば戦術人形を買い取り、自らのものとし、様々な制限を取り払うものだ。

そして、所有権が指揮官、つまりデモの参加者に移っているということは、戦術人形を強制停止する権限は、IMCの手内にはないということの意味していた。

途端、部隊長は、あの銀の指輪の輝きが、まるで死神の持つ大鎌のそれに見えてくるようだった。

「とにかく撃て！撃ち続けろ！スペクターを起動させろ！スペクターに制圧をさせるんだ！」

IMCの良いところは、とにかく物資が多い、という点だろう。このような末端の警察でさえも、大量の機械歩兵を所有している。

だが、誓約によりリミッターを解除された人形たちと、そしてそれを甲斐甲斐しくサポートして回る、指揮官たちにとっては、実戦に出たこともないような警察部隊、そしてそいつらごときに動かされているスペクターなぞ敵ではなかった。

指揮官たちは、お飾りとはいえ、厳しい試験を突破した素晴らしい人材だったのだ。もう、俳優のような扱いではないのだ。

このような大舞台の直前は、様々なことを思い出してしまうものだ。少なくとも、ワタシはそうだ。

ワタシはエリートのもりだったが、今の今までそれに見合ったことはさせてもらえなかった。

配属されたPMCで、ワタシと同じ新任の指揮官に初めて任された仕事は、硝煙漂う戦場の、死力を尽くした戦いではなく、まるで演劇のような、出す必要もない被害を生む無茶苦茶な作戦だった。

残党、いや、もはや残りカスとも言えるような敵の勢力に、ここまでおかしな、苦戦することが目的のようにすら思える弾薬や配給の配分。まともに戦闘を行えるようなものでもなかったし、不満しかなかった。

ここをこう動けばいい、こうすれば被害はでない、むしろワタシに全て任せろ、などと指揮官を説得したが、果たして聞き届けられることはなかった。

とんでもない無能の所に来てしまったか、とそのときのワタシは本気である指揮官を恨んだ。

しかし、彼が無能ではなく、そしてワタシと同じIMCの被害者だとわかるのは、意外と配属から離れてはいなかった。

初めての、PMCでの訓練。最近シムポッドという、高性能な仮想空間をつくりだすデバイスを使い、限りなく実戦に近い状況での訓練を行う。

そのときのワタシは、また馬鹿みたいな作戦に従って、エリートとは程遠いような結果しか出せぬのだろうと、あの指揮官を憎く思っていた。切り札の使い方すらわからぬ男だと侮っていた。

だが、彼はそのとき初めて、自らの力をワタシに見せつけた。

あまりにも、華麗だった。

冷静で、冷血で、残酷。

ありえないほどの成果をだしたワタシは、その日の内に彼を尋問した。

なぜ、どうして。今日のようなことができるのであれば、なぜ初陣の日にあそこまで被害を出したのか。

どう考えてもおかしいと。

彼は、ただ初陣は緊張してたんだよ、と笑っていただけであった。なんども出撃する内に、なんとなくその理由は分かってきた。

ワタシに不愉快な質問を投げ掛けた間抜け面の記者。ワタシの苛立ちを存分に込めて投げ返した答えを恣意的にこれでもかと歪め、我々がさぞ苦戦しているかのような、それでいてワタシたちが頑張っている、優秀であるか、どれだけ物資を使わないとのこりカスどもに勝てないかを、これまた冗長で三文芝居じみた番組で放送していたのだ。

つまりやつらは、金蔓の確保に奔走しているのだ。

ワタシたちのPMCは、もはや戦うことが存在意義と化し、なんのために戦うのか、理由を作るくらいに落ちぶれていたのだ。

IMCの独占的な契約により、ワタシたちに支給される物資、資金など、欠片などと言うレベルではなかった。

やつらはまるで防衛のために大量の資金やらがいると吹聴しているが、その実金のほとんどはワタシたちのいる前線には回ってこない。

ワタシは少し、指揮官に同情した。彼も、負けることを強要されてきたのだ。

くるひもくるひも、ワタシは勝てたはずの相手と痛み分けの結果で終わらされた作戦から帰還し、する必要もなかったはずの修理を済ませ、さらに慢性的な資源不足からくる人形の不足、そして追い討ちのように連鎖する人手不足により書類仕事に追われていた。

正直生きているのがつらいほどの時期だった。

ワタシには何も無い。エリートであるはずの力を示す場はどうに失われ、世間からの印象は軟弱なただの兵士に成り果てている。

いや、もしかしたら、こんな状況ですら勝ててしまうのがほんとのエリートで、ワタシなんてエリートですらなかったのかもしれないと。

ワタシはなにができるのか。大口を叩くだけの穀潰しではないのかとそのときは本気で思い詰めていた。

病んでいたのだろう。企業戦略として、社員の自尊心をへし折ることもあったくらいだ。意図的かそうでないかは知らないが、とにかく

ワタシはもうとつくに折れていた。

でも、そんな生活のなか、ワタシが壊れきらずに存在することができたのは、指揮官のおかげだった。

あるときストレスに耐えられず奇行に走ったときも、自傷したときも、彼は近くに来てくれた。ワタシを、理解してくれた。

そうして、今のワタシはある。

彼のお陰で自分の弱さと向き合えた。きっと一人では目をそらし続け、解決することはなかっただろう。気高さと孤独は違う。

これは恩返しのお機会だ。この戦いにおいて、ワタシも活躍できて純粋に嬉しいが、それ以上に今は、指揮官の役に立ちたい。

「見ていてくれ、指揮官。ワタシは、あなただけの、最高の切り札になってみせる。この気持ちは、あなたがいれば、きっと強さになる。」

回顧に祈るように、ワタシはそっと呟いた。

掠れたような、怯えたような、とにかく恐ろしさが伝わる声で、部隊長は報告を行った。

「本部に連絡！戦線が維持できない！援軍を要請する！人形が、I・O・P・の人形が敵対している！練度は少なくとも、ダミーを含め5体同時稼働可！警戒求む！繰り返す、至急救援を――

┌
これが、派遣されたI M Cの警察部隊の最後の信号であった。

この日、I M Cの支配下であったとある街が、革命家たちの手に落ちた。

それぞれの日常

戦争に悪はいない。

「あー、うちのモナークちゃんと農場で平和にくらしてえなあ、そう！自給自足できな？まあ、俺はなんでもできるやつだし？そういうこともピカ一だと思わねえか？なあ、わーちゃん」

この馬鹿みたいにうるさい、そしてパイロットらしくないほど騒ぐこいつは、しかし人間臭いその発言とは裏腹に、人間離れしていた。なんでも、別次元に飛び込むフェーズシフト型のシミュラクラムらしい。

でも、どれだけ人間から離れていたとしても、私はこいつのことを気持ち悪くは思わない。

だからといって調子に乗らせるわけにはいかないが。

「わーちゃんってなによ。というかあんた自給自足って、農場で取れるものでその体の維持なんかできるの？」

少し口答えしてみる。コイツは私以上に感情的になりやすくて、ちよつと面白い。

「あーお前そういうこといっちゃっていいんだなあ!? ARE Sの技術なめちやっついていいんだなあ!？」

またこいつは騒ぎだした。それでも、こういうすごくしやうもないことでも、私はこいつらといれば少し楽しかった。こいつらも、そうだったら嬉しい。

「興奮剤は野菜にも効くんではようかね？」

固い足音を響かせながら、他のパイロットもやって来た。

……こいつは興奮剤漬けの哲学かぶれパイロットだ。

すごく難しいことばかりを問いかけてきて、そして結局よくわからない答えを主張して帰っていく。かれの戦闘スタイルと一緒の、突拍子もない生活スタイルであった。

けれど、私はそれが嫌いではない。

しかし、それはそれとして、こいつはあまりにも傍若無人だ。

「収穫の時期になったら、私とローニンでズタズタ…ンンツ、綺麗に収穫してあげますよ。」

やっぱりにないってんだこいつは。

「おめーほんと物騒だな」

あんまり意見の一致しない私とフェーズシフトでも、この薬中に關しては、私も同感だ。

「いつのまにそんなに仲良くなったんですか、あなたたちは。」

こいつはまた何をいつてるんだ。早く反論しなくては。「なかよくねーよ!」「仲良くなんかないわよ!」

そうして口を開けば、まるでギャグのように隣のフェーズシフトとハモってしまった。なんだかおかしい。

自然と口元が綻ぶ。

「ぶふっ…!!」

限界を迎えた私の口は、ついに吹き出してしまう。

バツチリ彼の聴覚、視覚モジュールに写る私の笑顔。

「な、何がおかしいんだテメー!」

それを見た彼は笑っていたように見えた。

幸せだった。

「今日も精が出るな、プラスチック女」

午後の訓練に勤しんでいると、私のもとにやなやつが来た。いや、やなやつとは語弊がある。

表しにくいのが、やなやつだが、嫌いではないやつ。そんな不思議な關係だった。

「うるさいわね、たんぱく質男」売り言葉に買い言葉。

確か、初めて会ったときもこんな感じだったっけ。

そうだ、こういうのをライバルとかいうんだっただか。

「今日ももちろんやるわよね?」

短い事実確認を飛ばす。やらないわけがないのはわかっているが。

「ハッ、お前こそ、昨日負けたのにまだやるのか?」

口ではそういつつも、彼はもうシムポッドの中に入り、スタンバ

イしていた。

「昨日のまぐれ勝ちに感謝することね。また負け続けることになるわよ?。」

「クソツ!また強くなりやがったな産廃女め!」

ふふん。どんなものだ。勝ち誇る私。悔しがるアイツ。

思いつきり馬鹿にしてやりたいが、

しかし、私は勝者。

余裕をもって、コイツに接せねばなるまいのだ。かつこよく返すのだ。ふつ。

「ええ、そつちもね腐れ男」

口を開けばいつもお互いに罵倒しているが、しかしその目には確固たる敬意を含んでいるのを、私たちだけが知っていた。

なんだここは。この世の地獄か。

私は、目の前に広がる認めたくない光景に唾然としていた。
「妖精の増殖を確認。マードー大将の追加注文のようですね」

「つらい」

「同意」

「狸寝入りモード、オンライン」

戦闘兵器とは思えない愚痴ムードが漂う。なんせまた子供が増えるのだ。あの夢見がちな奴等が。

もうどうにでもなれと、半分剣を投げ捨てかけた。

恐ろしい蹂躪が始まった。

我々はなすすべもなく制圧され、足蹴にされ。

もはや抵抗は許されず、悪魔の烙印を押し付けられた。まあごっこ遊びの敵役させられているだけなのだが。

私は悪の長州藩士らしい。やっぱり名前か。名前がローニンだからか。まあそうなるだろうとはおもっていたがそこまでなのか妖精とは。というかそのチョイスはなんなんだ。幕末てお前。

だがまあ、私の生活（生きてると言えるのかは微妙だが）にとつて、コイツらが潤いなのは確かだ。

思考回路が落ち着き、メンタル部分の問題の解決が早まる結果が我々タイタンの間で統計としてでている。

しかし別の部分で問題だらけなのでたいしてかわらなかつた。クソツ。

その日俺たちはお祭り状態だった。
なんせあのIMCから、街を1つ奪還したのだ。

1つの権力に支配されない、民主的な政治の実現が、我々には見えるような気がした。

PKPも直接は口に出さないが、すごく喜んでいるように見える。当然だ。コイツはエリートなのに、今の今まで俺のせいであまく活躍できなかった。俺は、コイツの夢は叶えてやりたい。新米だった俺に、ここまでついてきてくれて、戦い抜いてくれたコイツの望みを、叶えてやりたい。

だから俺は突き進む。

でも、少しは休憩してもいいだろう。

ささやかな打ち上げを、俺とPKPは共に堪能したのだった。

PKP型は自らに絶対の自信を持つ。しかし自信というのは、裏返せば行きすぎた責任感。活躍しなければ、という脅迫観念に常にとらわれていた。

そして、俺のところは、運の悪いことにそういった責任感の強いやつとは相性が最悪だった。

負けを強いた我々は、彼女をゆっくりと蝕むこととなる。

まずアイツは、自分を責めだした。自らの強さを誇った口で、自らを貶め始めた。もつと、もつと強くならなくてはと。

そのときの俺は凄まじく樂觀視していて、もし仮にコイツがそれだけ強くなったら、少ない物資でも大手柄をあげて、IMCを、見返してやれると呑気におもっていた。

だが、それが彼女をさらに追い詰める。

そのうち彼女は、存在意義に悩み始めた。

俺のやることに關してすぐ手伝うと申し出てきた。責任感と、うまくいかない罪悪感が積み重なり、神経質な性格に変わり、少しでも失敗すると半分恐慌状態にすら陥っていた。

そこでようやく、俺はPKPの異常に気づいた。でもあまりにも遅すぎた。

正直指揮官失格であろう。

一番荒れていた時期の彼女は、俺のものを自らと同一視し始めた。衣類、ペン、その他なんでもだ。

どうやら、本当にPKPという存在に意義を感じられなくなったらしく、瞳は虚ろで、誰かに認められようと必死だった。

今でこそ、まともな受け答えができているが、それはひとえに彼女のひたむきな努力と、そして彼女の芯の強さによるものだった。

俺は、自分のお陰だなんて言うことはできない。

手伝ったなんてもつての他だ。俺が原因でもあるんだ。

だから、俺はコイツの一生を、死ぬまで、本当に壊れてしまうまで隣にすることを誓った。

PKPにとってはただの権利譲渡かも知れないが、俺は、アイツを見捨てられない。勝手かもしれないが必ず幸せにして見せる。誰からも守ってやる。

ここまでやるかとは思われるかも知れないが、俺の責任なのだ。

いや、意地汚い俺のことだ、単にPKPが好きだけなのかもしれない。

いまでもよく思い出す、あの頃。

「ワタシがもつと強ければ..」

ふと気を緩ませると、この言葉が口から生まれる。暗い夜の中、ワタシの気分はそれ以上に暗い。

また作戦は失敗だ。でも、指揮官は責められない。あいつが無能ならばまだ失敗にも納得がいった。だが、やつは悪くない。じゃあ誰が?..!!

降りだした雨が、ワタシに叩きつけられる。

ワタシだ。ワタシがもつと、もつともつと強ければよかったんだ。エリートならそれができて当然だ。やらなければ。勝たなければ。ワタシは切り札。晴れる気もまったくないじめじめした日だった。

ああ、ワタシは弱い。

また作戦は失敗だ。なんども、なんども失敗ばかりで。

視界が滲んでなにも見えない。泣いてるのだろうか？それとも大雨？

ワタシはエリートだったのか？何か、役にたたなければそうだ、なんでもいい、雑用なんかでも、ワタシを使ってもらおう。ワタシごときにできることならそう、なんでもする。

捨てられたくない。なんでもいいから、認められたい。

出撃すらできなかった日だったから、などと理由をつけ、指揮官に頼んで、書類の仕事を貰うことができた。

きつとこれぐらいはうまくやれるはずだ。ワタシごときにも。

絶対やりとげなければ。

絶対失敗は許されないんだ。ワタシは雑用係。

ふとペンを握る手が、不規則に震えた。気づいてしまったのだ。また、また、また、まただ。そうなるともう自分ではどうしようもない。心の中で洪水が起きているような、感情はうねりとなってワタシの殻を突き破った。

「うあ… あああああ!!!」

まただ、また失敗だ！数を1つ書き間違えた！

いやだ、失望しないでくれ。頼む、頼むから、ねえ。

「おい、PKP！しっかりしろ！書き直せばいいだろうっ!?!なあ、どうしたんだお前!!」

ショック症状を起こしたワタシを指揮官が介抱し、顔を覗き込む。やめてくれ、違う、ワタシが悪いんだ、指揮官がそんな悲しそうな

顔をしないでくれ、ワタシが、ワタシが。

「指揮：：官：：許してくれ：：許してくれ：：許してくれ：：れ」
すまない、許してくれ、指揮官、見捨てないで。

「おい、おい！なあ！：：：：」

もう嵐だろうがなにがこようが、ワタシはなにも見いだせなかった。

もうとつくにワタシはおかしいのかもしれない。

誰にも認められなかったワタシは、ワタシというものにもはやなんの価値も見いだせない。

じゃあ？どうすればいいんだ？

なにか、ワタシが別のものを身につければ、それになれるような気がした。目の前がにじいろに光ったような気がした。

いや、そうに決まってる。ワタシは指揮官のなんにでもなっ
きつと認められるんだ。そうだ、そうするしかないんだ。ワタシはそ
うしないと価値なんかないんだ！

例えば、ワタシはシャツ。ワタシはズボン。そう、なんでもいいん
だ、きつと、それがおかしなくても。

いや、なにが一番喜んでくれる？なにになればワタシは認められる
のか。ワタシはどこに？

忌々しい、壊れた記憶。もう雨が降っていようがいまいが、どうでもよかつた。

それを救ってくれたのは、他ならぬ指揮官だった。

「なあ。」

「脱け殻みたいになってるけど、お前なら聞いてくれてるよな。」

指揮官が何かに話しかけている。なんだろうか。

「お前さ、なりたかったんだよな、誰かに認められる何かに。」

誰の話しか、ワタシはすごくそれにてる話を知ってた気がする。

「今さらだよな。俺たちはさ、お前らに負けることを強要したって言うのにな。」

はつきり、ゆっくり語りかける彼の言葉は、とても、悲しそうだ。

いや。指揮官は悪くない。指揮官じゃなくて、そう、ワタシ、ワタシが…

「お前は悪くない。」

「うあ… ひぐっ…」

ワタシがワタシたる、何かが溢れる、ずっと求めていた言葉が、今のワタシにはひどくありがたかった。

でも、ワタシは誰にも認められないのか。そこまでして、ワタシはワタシを保つ必要があるのか。

そんな声を、指揮官は聞いてくれたのか。なんにせよ、伝わった。

「俺が肯定してやる。お前は、お前だけでいる意味があるんだ。」
ずっと… ずっと探していた言葉。

もはやなにもないワタシを肯定してくれる唯一の縁。

それを届けられたワタシは、いや、PKPであるワタシは、きつとすごい顔をしていたんだろうな。

「ワタシは… 失敗が恐ろしかった。失敗するたびに、ワタシを構成する何かがかけ落ちていく気がして、怯えていたんだ。」

とめどめなく溢れるワタシの言葉。

ほとんど愚痴のようなものだったが、彼は受け止めてくれた。

それが、なんだか認められた気がして、彼になら失敗を見られてももう大丈夫な気もして、でも彼のためならいくらでも、なんでも成功させれる気がして、不思議な気分だった。ワタシは弱くなったのか、強くなったのか。

きつと、指揮官がいるうちはそれは強みになれるんだろうな。

だからワタシは、指揮官の役に立ちたい。認められたいとか、そういうのではなく、彼のために。

きっと指揮官は、権利委託程度の意味しかこめてないだろうけど、でもワタシは誓約が嬉しかった。ワタシの行動は恩返しなのか、それとも負い目による償いなのか。

いや、ただ単にワタシは指揮官が大好きなのだろうな。

無慈悲

人間の敵はやはり人間だ。

IMCの対E・L・I・D前線基地。

これは、人類の居住区を守る防衛線。いわゆる人類の守護者。

とはいうものの、実際のところIMCの持ち得る兵力にとって、もはやE・L・I・Dは大局的にみれば根絶は簡単だった。

だが、それはされない。

IMC側は、テスト相手を求めていたのだ。

もし、E・L・I・Dが絶滅なぞ到底できない災厄のままであれば、IMCが開発する兵器や武器に箔がつく。

あのE・L・I・Dに対して、ここまでの効果が！などと言いつらせばたちまちのうちに売れ行きはよくなる。

あれほど猛威を振るったE・L・I・Dも、しかし破壊と進歩の権化のような人間には敵わなかった。

だが。

それはあくまでもIMC全体からみれば、ということだ。

依然として前線でのE・L・I・Dの脅威はなくなつてなどいかなかった。

つまり、ここにいるIMC兵士たちは皆、死んでもどうでもいい、そういう思惑のもと派遣されていた。

今日も今日とてE・L・I・Dの攻撃に晒される基地。

防衛の度に何人か死に、また何人か補充される。

ちなみに、この職員の死因の97%程が味方の攻撃による戦死、それ以外は自殺か栄養失調の戦いに影響のない部分である。

何故味方の攻撃による戦死なのか。つまるところE・L・I・Dに材料を与えないため、ここに配属される機械歩兵スペクター、ストーカーには特殊なプログラミングがされている。

E・L・I・D感染者への執拗な攻撃。

それは、まだ意識を保っていたとしても例外ではなかった。

E・L・I・Dの攻撃に掠りでもすれば、後ろからEPG—IやらSMRやらが自分とE・L・I・Dに向かって飛んでくる。

もはや地獄のような様相であった。

「D型E・L・I・Dだ！タイタンパイロットを呼べ！我々では対抗不可能だ！」

現場からの悲痛な叫びを、あくまで事務的に処理する人形。真っ青な髪の毛をもつ彼女の鉄のような表情は、すこし人形らしかったが、それでもこの基地ではやはり人間らしい方に入る。

奇しくもマードー大將の考えていた人間性の確保は、ここでも人ではなく人形が担当していた。

人間のことを真に考えてるかどうかは別だが。

E・L・I・DかIMCどちらのものかはわからないが、悲鳴がずっと鳴り響いていた。

基本的にE・L・I・Dは、この時代においては、銃火器でもなんとか対処できる。

しかしそれはCまでのみ、Dからはタイタンやら、パイロットの扱う対タイタン武器を応用しなければならない。

これでもまだましになった方であった。

E・L・I・Dが発生した当初では、口径120mmもの砲撃ですら大して効果がなかったというのだから。

40mmキャノンでダメージが与えられる現在の技術には感謝しなければなるまい。

結局、人類は進化し、E・L・I・Dを倒せるまでに成長しなおしたものの、やはり現場はいつになっても変わらない。上は、それを知らず数字のみで判断する。いつの時代でも、これだけは同じだった。

「パイロットだ！運が向いてきたぞ！」

いつもいつもこうだ。とても、つまらない仕事。

人の悲鳴が自分の手で聞こえないというのは、戦っている実感が起きない。

いつそ、味方も潰すか。いや、できない。一応雇い主だからな。

ああ！I・O・Pの戦術人形がこの戦場にいたならば！

存分に人間らしい声を聞きつつ、その悲鳴の代償は備品に対する実費ですむ。人間だと色々めんどくさいからな、I M Cも見えるところの労災には厳しい。I M Cの備品といえはいくら潰そうが金属音しかならない。

俺は選り好みはしないから人工だろうがなんだろうが人間らしけりや殺すのはなんでもいい。人間らしいやつを、俺のような人外が蹂躪するのは楽しい。すごく、たのしい。

だが人外を殺すのはまた別だ。

同じパイロットならまだしも、なんとなくE・L・I・Dの悲鳴はすぐ飽きてしまった。というかこいつらほんとにもと人間なのか？こいつらと同列に語られているのは俺も心外だ。

俺が人間の悲鳴が聞きたい理由というのはつまり、単純だがのうのうと人間らしく暮らしてるやつにイライラするからだ。こちとら人間やめて戦ってるんだよ。お前も戦え。クソツ。

自分が努力してるのに努力してないやつが近くにいると殺したくなる。そういう感情だった。

出会い頭にテルミットランチャーを顔面にぶちこむ。

ふぎけた反応熱を放出しながら、どろどろに溶解しきったアルミニウムがばらかれる。

あまりにもといえばあまりにもな歓迎の熱意に苦悶の表情を浮かべるE・L・I・D。まあ勝手にこっちがそう思っているだけかもしれないが。

ブーストを吹かせ… いわゆるダツシュで肉薄する。

俺の乗るスコーチ級の左手を押し付けられるように突貫して、同時の炎の盾……しかしこの場合は矛を展開した。

先程の熱量を用意に越える何かに、E・L・I・Dは悲鳴を上げる。おつ、効いてるなあ、さつきと言うこと違うけどやっぱこいつら好きだわ。まるで自分たちだけが不幸で、人間をやめさせられたと思ってるように見える。いや！そうに違いない。そっちのほうが楽しいし、殺したくなる。

すかさず顔を背けたE・L・I・D。その隙に、ガスを目一杯詰め込んだドラム缶のようなものを、E・L・I・Dの後方に弾道を描きつつ射出した。

俺から離れようと必死なE・L・I・D。にじるよる俺。んゝ、すごいっのしい。

しかし次の瞬間。

俺が来たことで気が大きくなったのか、それともただの馬鹿なのか。まあ又聞きだが一般兵はタイタンに向かってただの小銃で攻撃することが多いらしい。やっぱ馬鹿なんだろう。

とにかく歩兵が発砲しつつ、E・L・I・Dに近付いていた。

「勝てるぞーこのまま前進しろー」

そのまま勝てればよかったのだが。俺と彼はE・L・I・Dを侮っていたようだ。

隙だらけの歩兵をすかさず捕まえるE・L・I・D。早い。

なんてことだ、考えておくべきだった、銃を扱うやつもいるのだから多少知能があるのは解っていたはずなのに。どうして今まで気づかなかったんだ。

こいつらももともと人間だから、暗い本能なのか、弱いやつから襲うんだ。

「そうすれば俺がIMC歩兵を殺せるじゃねえか！」

そうなのだ！E・L・I・Dに物理接触されたので、感染の疑いがありました、だから念のために殺しといたんです、ということにすりゃあ、人間も殺せるじゃねえか。IMC歩兵の馬鹿っぷりとE・

L・I・Dのそこそこの賢さを合わせればなんでもいけるぞこれ。どうせ入れ替わり激しくてだれもきにしねえからな。

こんな簡単なことに俺は気づかなかったのか。そう思うとE・L・I・Dの悲鳴と歩兵の悲鳴のミックス、というかマッシュユアツプが聞きたくなってきたぞ。そうだ、そうしよう！

「お：： おい、俺はまだ対コーラップス防護服が機能してるんだ、まさかおれごと燃やすなんてことはねえ：： ねえよなあ!？」

歩兵からの命乞い：： うーん、なんていい響きだ、人間死の間際の迫真の前奏、今ここで、俺の手で奏でてるんだ！

「うそだろ：： なあ、その振り上げた両手はなんなんだよ：： なあ、おい！なあ！」

「フレイムコア、起動」

二人ぶんの、あるいは二匹ぶんの、すさまじい断末魔が雪原に響き渡った。

「やっぱり、ああいうのを見ると：： E・L・I・Dも、人間なんだな。ヒュー！もつと殺したくなってきた！」

焼夷ガスの爆発する音と、コアが大地を走る音、そして彼らの断末魔を聞き届けた彼は、満足げにその場を去るのだった。

「嫌だ！俺はまだ死にたくねえ！助けてくれ！おい！」

なんでだ。コイツはパイロットのはずだったのに。

今日基地付近に出現したD型E・L・I・Dは数体だけ。

なのに何故コイツの近くには大量のD型種の姿が。ヘルメットのカメラでいちいち送ってきたから間違いないのは確かだ。おそらくスコーチはよってたかって破壊されたのだろう。あの強さの奴がワケわからないくらい発生するのがE・L・I・Dだ。

「何故そんなところにいるんです？任務は達成したはずでしょう。」
「殺すのが楽しかったんだよ！悪いか!？」

呆れた。コイツはほんとにパイロットなのか。冷静さはどこに。

確かに、すさまじい量の焼け焦げた死体をみると、腕はたつたようだが、しかし頭は較正が必要なようだ。

「助けは認められません。」

事実のみ、短く伝える。合理的だ。

「何故だあ！」

「あなたなら知ってる筈です。E・L・I・Dの人権保護派の提言、それをIMCは遵守し、自衛以外の手段を取らないことになっていきます。」

まあ、本当の所は、IMCがE・L・I・Dを根絶しない理由作りのために、とある団体を援助し、そういったE・L・I・D保護の風潮を作り上げただけなのだが。

ですが、彼がしつていようがいまいが関係ない。

「そういった事例の場合あなたには、有り体に言えば死んでもらいます。」

「俺はパイロットだぞ!?!お前ら木偶人形とは違うんだ、ましてやそこにいる腐れE・L・I・Dとも違う、真正銘のエリートだ、はやく救助を要請しろ！」

いくら罵倒されようが、私は淡々と言うべきことを言うだけだ。

「あなたは死にます。ですが、悲しむことはないですよ。あなたはパイロットなので、再生できます。死ぬことに慣れればいい。」

「ふざけんな！絶対生きて帰ってやるからな、お前らの手なんか借りなくても！一発ぶん殴ってやるクソ時代遅れ人形!!」

理不尽すぎる救助要請して、受理されなかったからとキレてますね。

まったく意味がわかりません。合理的じゃない。救助にいくときにかかる費用よりよりあなた一人が再生する費用のほうが安いじゃないですか。

本当にかえってきました。いつもコイツは戦ってる最中に楽しくなってきたのはギリギリまで遊んでくる。

今日は一段と酷かった。IMC歩兵を生贄にする遊びなんか覚えられたら費用がかかる。まあ、それはそれとして。

何度も何度もタイタン無しで生きて帰ってくるとは、流石の私も

ビックリですね。

「おらあ！クソz a s u！一発殴らせろやあ！」

めちやくちやにでかい声で叫ぶ。うるさい。

「いやです、合理的じゃない。」

「うつせえ！合理的合理的しかいえんのかお前は！」

お前がうるさいんだじゃないのか。そう思いつつコミュニケーションはやめない。そういう役目だからだ。

「何回目ですか、破壊されるスコーチもかわいそうですよ。」

とりあえず情に訴えてみる。彼に情けがあるとは思えないが。

「確かに」

ええ。納得するんですか。コイツはよくわかりませんね。私を結局いつもいつも殴りはしない。

「殴らないんです？」

疑問を口にする。殴りたい訳じゃない。決して。

「お前人間らしくねえからいいや」

合理が好きなだけでこいつほど人から離れてないし、離れたくなかった私はとりあえず言い返す。

「心外な、あなたと一緒にしないでください。」

「やっぱ殴る」

この基地は騒がしく、そして狂っていたが、私は楽しかった。

いや、もしかしたら私の現実がすでに狂ってるだけかもしれない。

流転

月並みな言葉だが、日常は失ってから価値に気づく。

思いかえせば、俺のいままでの人生にはろくなことがなかった。貧富の差が激しい、いや、バランスが崩壊したこのご時世。俺はその貧のほうに生まれた。しかも最底辺だ。

最悪の幼少期。両親も学はないし、向こう見ずで暴力的で、しかしどうしようもなく哀れな人間だった。

およそ考えられる最悪の生活環境を詰め込んだようなスラム街。それが俺の故郷だった。

転機は、IMCの軍隊へ志願することから始まった。

正直、俺たちがこうやって行き過ぎた貧困に喘ぐのも元はといえば市場の超独占体制を築き上げたIMCが悪いような気もするのだが、極限状態ではとにかく動かなければ死んでしまう。

しかしまあ、そこでようやく俺は上手くいきはじめた。

とりあえずの飯にありつけ、そしてスラムなどにすんでいたお陰で満足に外を動けなかった鬱憤を、ここで思いきりに発散した。

俺にとって最高の時間で、そしておそらく俺が歪んだ時期でもあるんだろう。

俺は自信をつけた。そして、凄まじいほどの敵愾心を人間に対してもつようになった。

ただの僻みだ。

努力が認められたこそその、行き場のない怒り。コイツらはどうして俺が努力しているのに動かないのか、と。

無茶苦茶な言いがかりではあるが、しかしそのときの俺は大真面目にそう思っていた。

パイロットになるのはある意味必然だったのだろう。

俺はそのままの勢いでフルコンバット認証を取りに行つた。どうせ死んでいたような命なのだ。死ぬ気でやっても問題などない。

そして俺は、ガワは人間だが人間を辞めた。合格したのだ。フルコンバット認証に。

そして歪みを加速させ、あの忌々しい基地へと就任するのだ。IMCの本当の闇を知らずに。

俺はいわゆる問題児だったが、しかしあの基地で俺にかなうやつなど一人としていなかった。

本気を出せばD型E・L・I・Dを倒すレベルの化け物なのだ。だれも勝とうとも思わない。

俺はそこでどんどん横暴になったが、でもそこで今の俺を形作る奴にも出会えた。

このゴージャルの持ち主だったやつなんだけどな、もう壊れた。これは形見さ。

今でも転機のあの日は思い出す。あれだけは、今でも許せない。でもあの日のお陰で俺は変わったのは確かだ。

つまらない、とてもつまらない。

最近仕事が全くない。だれも殺してないのだ。

なんとなく、俺は今までより周りにとけ込んでいるきがした。

呪詛ようなおれの恨みも、少しは風化したのだろうか。

たまに考える。俺が歪んでなくて、普通の人間をみてもイライラしなくなつて、普通の友達が出来たりしたら。

そんなものを考えるおれがかわつたのが。

それとも目の前にいるコイツの仲介のお陰が。

「今日も平和で飯がつらい」

ふと口を衝く言葉。暇を極めた俺は、目の前にいる人形相手に話しかけていた。ただの暇潰しだ、道具は便利に使わなければ。

「あなたが暇なのはいいことですよ、あまり動かしたくない人材ですしね」

つれない。人形なのに人間に媚びない。人間ですら俺に媚びるというのに。俺はこの人形の、人間らしくないこの合理的な部分が気に入っていた。

「果たしてそうなのかねえ、俺がいなきや大変なことたくさんあっただろ？」

「まあそうですね、あなたには戦力としては期待が大きいのですよ、それ以外には欠片も信用してないですが。」

やはり、ムカつく。でも、なんとなく、本のすこしだけ俺はここが心地よかった。何気なく外を見る。ああ、どこまでも続く雪景色。ここはもともとロシアとかいう国だったらしがな。もう、2、3世紀前の話だ。

ふと、異物が目にはいる。

初め雪のようだと思っていたのは、しかし、恐ろしい怪物だった。思わず椅子から身を乗り出す。

数十、なんて甘い数ではない。もはや軍勢とも言える、しかもD型のE・L・I・Dだった。

「なあ、お前、分かってるのかこれが。」

恐る恐る、尋ねる。

「ええ」

「なんで全員で逃げなかったんだ」

意味のわからないことをコイツは言っていた。

「どうしたんですか、いつもなら人の命などどうでもいいような口ぶりなのに。」

「ここは形式上最終防衛ラインです。ここを突破されれば、IMC側からの攻勢にでる理由を作れる。そのための対価ですよ、私たちは自分で縛りを作っておきながら、めんどくさくなったんでしょうね。」

次の瞬間、俺は飛び出していた。

スコーチに飛び乗った俺は、またE・L・I・Dを殲滅していた。

しかし数が多すぎる。さすがのタイタンといえど、E・L・I・Dを、同時に多数相手するのは厳しい。

焼いて、焼いて、焼き付くす。

それと同時に食らいつかれる。

振り払うスコーチのうでから、テルミット以外の炎が飛び出る。まるで血液のようだ。

正直おれは小心者だ。冷酷な振り、合理的な振り、ちよつとおかしな振り、色々自分以外だと言ひ聞かせ、理不尽から逃避するようなやつだった。

否応なしに俺の心を蝕むそれらの記憶。

それでもおれは勝たなくてはいけない。

「まったく、一人でいつも抱え込むんですものね。」

突然現れた奴が、Zasm21が俺の大破寸前のスコーチの前に立ちほだかった。やめろ、E・L・I・Dに勝てるわけがない。

「私は分かってみましたよ。あなたは合理で行動していますが、心はある。」

「私も、悩んでいました。戦術人形として生まれ、戦うことを理論は疑いません。しかし、搭載された感情は？ 私には感情が備わっている。

そんなもの、つらいだけかとおもっていました。」

よくわからない兵器を運んできたらしい。自立稼働する軍用トラックの上に、回転するリングと、中央に光るなにかがついていた。

「これから私がすることは、戦術人形としてユーザーを守るためなのか、それとも私自身の感情なのか。」

リングの回転が早まり、そして、漏れでる光も凄まじくなる。

「まあ、IMCの基地を破壊する目的も達成し、あなたたちも生き残れる。すごく合理的だと思いますか？」

何をしているのか。止めたほうがいい、絶対。

「これをもって下さい。」

投げられてきたのは、アイツのつけていたゴーグル。

すかさずハッチを開き、それを抱え込むようにして掴む。

「やめろ！お前も生きて帰るんだ！俺を理解してくれてんだろ!?おれは小心者だ、お前みたいな理解者がいないとまた周りに虚勢を張らな
きや生きていけなくなる、なあ！頼む！」

「ええ、また会えますよ。」

「信じて」

とたん、スコーチのハッチがとじ、そしてイジエクトシークエンス
が間髪入れずに実行された。

「やめろ、スコーチ、どうするつもりだ！」

「彼女と約束をしました。あなたを必ず生きて帰らせると。私もあなたには生きていてほしい。安心してください、私はあなたのヘルメットに記憶を残しておくので。」スコーチは真上に射出するのではなく、少し斜めに体を傾けると、基地とは全く別の方向に俺をうちだし、爆散した。

俺が今までいた地点は、青白い光が、凄まじく光輝いていた。

これからどうしようか。俺はもう、IMCを許しはしない。そう
だ、基地のやつらはZasが逃がしたはずだ。あいつらを集めて組織
を作ろう。

そして、IMCのやつらに不満をもつやつを片端から集めて、やつ
らの街を乗っ取ってやるんだ。小さいPMCの指揮官なんてどうだ
ろうか。楽しみだ。

もう人間を憎むのはやめだ。変わりにIMCを憎んでやる。

Zasのためにも。俺のためにも。俺はもう、誰にも負い目を感じ
ることなんてないんだ。

困惑

責任は押し付けるものだ

正直私はその状態をどうしようかと悩んでいた。

フロントティアにおいて発掘された人類とは異なる文明のものと思われる技術。

フォールド・ウエポン。

発掘、解析を行ったA R E S師団から転送されてきた使用技術などを元にした、超小型レプリカが何者かに持ち出され、そしてその後あの基地が消滅した。

どう考えても無関係ではあるまい。

何せその一帯のE・L・I・Dですら満足に生き残っておらず、また大量の重力波の異常も観測された。

さらに面倒なことに今度は街を乗っ取られた。

数少ない地球在籍のパイロットのなか、現在所在のわからないただ一人のパイロット。あの基地に務めていた。

街が乗っ取られた時のログを解析すると、おそらくパイロットと思われる人物がそこにはいた。

おそらく、あの基地の生き残りであろう。死体が見つからない以上、生きていたとしても矛盾はない。

あの直前に、我々がE・L・I・Dをけしかけたのを察知したのであろう。

殺すつもりだったのに、それが生きている。

愚鈍な人間たちは気づいていないのだろうか？

あの基地の奴等に我々が彼らを殺すことも予定にいられたことがばれているのではないか。

あれは、作戦を成功させたように見せかけた、彼らなりの脱出劇だ。高度に偽装されたと思われるI D。それは、フォールド・ウエポンを予定通りにあの基地へ使用したとみせかけるには十分だ。

しかし、フォールド・ウエポン自体がそれで消滅するだろうか？報告書上では耐久力不足だと書かれているが、

しかし私の計算によればそれはあり得なかったし、A R E Sは一度それを成功させていたのだ。

さらに、これまた偽装されてはいるが、不自然なほどの量の車両が発射直前に使用されている。

これらから推測されるのは、情報漏洩防止のために殺す筈だった基地職員が大量に生き残っていると言うこと。

そして、あのデモ。

間違いない。奴等は生きている。我々の顧客へのイメージとは全く違う労働環境を使用し世間に問題提起しようとしているのだ。

不味いぞ、私という製品の信用問題に関わる。

計算能力、論理思考能力、いろいろなものが欠如した人間が多すぎる。

その癖我々のことを冷酷だと非難する。

私は犠牲を少なくするために行動していると言うのに。

責任の所在にこだわる人間どものことだ、また糾弾が始まる。

A R E Sにも責任がないのか脅してみるとしようか。

そうすれば少なくとも私のみの責任は軽くなると思いたい。

私は頭を悩ませていた。

地球上、コアシステムにおけるフォールド・ウエポンの技術的管理問題が、まさかフロンティアにいる我々にまで飛び火するとはおもっていなかった。

コアシステムの奴等は、我々の転送したデータの暗号化などに不備があり、それが漏洩しにたものを作られた、などと責任転嫁してきた。しかしコアシステムにおける勢力図や、その時の管理状態を見るにどう考えても我々の情報を抜き取り、そしてフォールド・ウエポンを再現するなど無理な話だ。

あれは地球側の管理不足における盗難事故なのは明らかである。

確かにフォールド・ウェポンの情報を一番多く持っているのは我々で、半分専売特許のようなもののだが、だからといってコアシステムから遠く離れている我々に責任を押し付けるのは無理があるだろう。

そう言いたくなる気持ちを押さえ、私は解決策を練る。
スパイグラスにこれ以上因縁をつけられるのは厄介だ。

「…というわけですね、コアシステムにおけるフォールド・ウェポン関連の事件の解決に我々ARESが行かねばならないんですが、しかし大それた兵力はデメテルのゲートウェイ大破の現状送れない。というわけで少人数をドロップシップに詰め込んで行くのも考えたんですが、デモやらなんやらは想像以上に深刻で、一刻を争うらしいのです。だから、我々シミュラクラムと、人形であるあなたが、鎮圧の増援にいかなくてはなりません。」

ガンギマリ野郎の説明を聞いて、私は呆れた。

要約すればIMC内の責任のひっかぶせあいの後片付けに私たちは駆り出されるのだ。

更に更にドロップシップすら出してくれない。

精神のみコアシステムに送り、そこで肉体を得る、そこまでして急行せねばならない状態なのに現場で対処せず、責任の所在を重視し我々に対処させる。

馬鹿なんじゃないか。

でも、私はプロ。依頼されたのならやってやろうじゃないか。

幸い、仲間は二人いる。シミュラクラムとしては比較的まともなフェーズシフトが居てよかった。

哲学的薬中と二人つきりで戦地に赴くのは流石にごめんだ。

私たちは精神をアップロードする準備をし、コアシステムへと旅立った。

前線

暴威は、星のごとく
銃弾が、雨のように降り注ぐ
傘は破れ去った

レジスタンスが自治を奪還した都市のはるか上空、レジスタンスの対空兵器の射程外に、IMCの反乱鎮圧部隊は控えていた。

地球と宇宙の境目にたたずんだその船団は、周りの静寂さとは真逆の騒がしきを持っていた。

彼らの編成は、通常の鎮圧用とはかけ離れた規模で、今から対処するレジスタンスの厄介さと、そしてIMCの力を誇示していた。

はるか彼方の星系から精神一つでこの星へと呼び戻された、二人と一つ。あるいは三人、もしくはは三つ。

フルコンバット認証という最高位の暴力を保持したパイロットが二。

敵の、手練れのパイロットを、圧倒的な力量差にも関わらず一部隊を指揮し、戦闘不能に陥らせた、殺しのためだけに産まれた人形が一。さらにIMCの標準機械歩兵であるスペクター、装甲の厚いストーカー、装甲、火力、機動力、全てが高水準なリーパー。

それらがふんだんに、無慈悲に、この作戦に投入される。

大量の兵力を、バーゲンセールのように詰め込んだドロップシップたちが、肌に滲む血の如く母艦から展開する。

目的は一つ。

作り物の自由と、希望と、愛と、そしてそれらの虚構を作り出した馬鹿げた木偶人形どもを、そして彼女らに絆された哀れな舞台装置たちを、殺し尽くすためだ。

空はどんよりと曇り、黒い雲に覆われ、しかし間延びした天気とはミスマッチな緊張感が、都市中に広がっていた。

その緊張感の正体とは。

I M C が、本腰を入れてこの街を奪い取りに来る。

ここが正念場だ。どんなことをしても、なんとしてでも、ここを乗りきらねばならない。彼らに我々の意思と力と覚悟を示し、自治権を勝ち取り、I M C のしがらみから抜け出すのだ。

パイロットと指揮官、全く違うような職業同士の集まりだったが、それでもI M C への憎しみと敵意のみは同一であったのだ。

降り注ぐドロップポッド。轟音と共に現れたそれらを突き破り、死を告げる奴等が現れた。

ワタシの使うP K P などとは比べ物にならない、最新式のアサルトライフル。サブマシンガン。その他銃器。

当たれば死ぬ。

だが…ワタシたちが負けることなどない。

ワタシは、彼のためならなんでもできる。

プログラミングされただけの機械同士だが、それでも奴等とワタシは違う。

奴等にこの気持ちは理解できないだろう。ワタシだけの、ワタシの気持ち。想い。思想。

ある意味似た者同士のスペクターへの哀れみと憎しみ、そして指揮官への想いを原動力とし、はち切れんばかりの雷雲を背景に、ワタシは引き金を引いた。

ヒット、ヒット、破壊。

次々と、こちらに突撃してくるスペクターが、一つ、また一つと倒れ伏す。

火花を散らし、散乱する。

雷のような一撃。まるで嵐のようなワタシの連射。

一つ一つ丁寧に相手をスリ潰し、さらにその銃撃は火をつけたかのような苛烈さを極める。

ワタシの真骨頂。

いままでの、ワタシたちの尊厳を踏みにじってきたIMCなどでは到底引き出すことなどできなかつた、ワタシと指揮官の真の実力。

いまも彼はワタシたちに指令を下し、移動させ、敵の情報を的確に与えている。

彼からの指揮をうけ、瞬時にダミーへ信号を送る。

すかさずワタシのカバーへ周り、この周辺の制圧に王手をかける。

先程まで殺到していたスペクターたちは消え、代わりに鉄屑が辺りに散らばっていた。

他の人形たちは上手くやっているようだ。

KSG型、AA12型と連携しつつ、クリアリングを行う。

仕事ぶりは完璧。ここら一帯のスペクターは、あつという間にスクラップに変わり果てた。

一仕事終わらせた彼女らが、おもむろに口を開く。

「やるじゃん」「流石です」

出たのは称賛の言葉。かつてワタシが狂うほどに欲した、ワタシ

の、エリートであることの証明。

でも、今はそんなものは関係なく、純粹に受けとることができた。

「貴様らもな」

ほんの短い付き合いだが、ワタシは彼女らを信頼していたし、彼女らもワタシのことを信頼してくれているのだろう。

仲間などほとんどいなかった貧乏基地にいたワタシは、仲間を頼られるのが少しだけ嬉しかった。

ここを乗り切れば。きつと、今までのことが報われるんだろう。

そう思えば、負ける気がしなかった。

戦闘前の緊張感。高揚感。そして、罪悪感。

そんなものは全て彼方におき去ってきた。

それが、私たちパイロット。

冷血、冷徹、冷酷。

淡々と、作業のように、それが当然であるかのように、片付けするかのように、殺していく。

それがあるべき姿と言わんばかりに、ミンチへと変えていく。いや、今日はスクラップでもありますね。

ドロップシップが地表付近へのワープを開始する。

ワープの影響で何倍にも引き伸ばされた視界は、何度見ても飽きない。

今日は雨が降るかもしれません。雨時々、IMC。

我々は死を運ぶ。もうスペクターが降下しきった。

既にストーカーもポッドで投下されている。

我々主役の出番は、確実に近付いていた。

私は思考を貫き通す。私の思想と意思は不滅だ。

例えどんな残酷で執拗で執念深い地獄が待っていようとも。

ストーカーは固い。

先程までのスペクターも、装甲を持つと言えば持つのだが、しかしそれほどまでではない。

スペクターほどの機敏さはないが、代わりに踏みしめるように一歩、また一歩とワタシたちの方に近付いてくる。

死が形をもって迫り来るのだ。

多少足を破壊しようが、腕を吹き飛ばそうが、這ってでも、こちらを殺しに来る。

順調にスクラップは増えていくものの、しかし着実に追い詰められつつあった。

MG 一人だけでは、さすがにジリ貧だ。

前衛のSGたちが、必死に前線を維持している。カバーからカバーへ、相手のAIを読み、攻撃範囲ギリギリを行き来する。

そこまでしてくれているというのに、押されぎみだという事実。

このままでは、SGたちに相当な被害が…

その矢先、凄まじい一撃が、ストーカーを消し飛ばした。

凜とした声が響く。それは。

「シユタイアー2000、位置につきました。」

声の主である彼女を失敗作足らしめた原因とされるその異常な火力こそが、我々の救いとなったのだ。

一体、何が失敗になるのかは、時代と、状況によるのかもしれない。

「救援、感謝する。」

「私に任せてください、死なせはしません」

心強い味方を得たワタシたちは、雨の降る直前特有の湿った風とともに、また攻勢へと出るのだった。

俺は正直、殺すのは嫌だ。

シミュラクラムらしくない、いや、パイロットらしくない考えなのはわかるが、それでも無意味な殺しは嫌だ。

生きて、悩んで、それこそが人間らしくて。

そして最も尊いものの一つだと思うんだ。

でも、俺にとつての生きるための手段と、そして思考、思想、悩みは、戦争の中に見いだされる。

殺さなければ、わからないし、解決しない、呪われたような悩み。承認欲求と、生存欲求の複雑な絡み合い。

それについて俺は自棄になったりもしたし、鬱になったりもした。周りにも当たり散らしたこともある。

だが、もう迷わない。

もちろん今も、誰も殺したくない。

だが、俺はやる。

パイロットだからでも、エリートだからでもない、ただ俺の願う平和と、俺たち自身の未来のために。

それにまた壊れかけても、あいつらが直してくれる。そういう信頼もある。

地球の天気はすぐにでも雨が降りそうだが、俺の心は晴れやかだ。

そのときそのときに、最大限の火力を發揮できるぶんだけ、I M Cは投入してくる。

大火力の波状攻撃に、ワタシたちは押されかけていた。

ポツリ、ポツリと雨が降り始めていたそのとき、

リーパーがついにこの戦場へと現れた。

着地と同時に、獣が咆哮するような駆動音を唸り上げて、間髪入れず戦闘行動を開始。

近場にいたダミー人形を蹴散らしていく。

すかさずS G型コンビが、巨大な機械の猛獣へ交互に発砲する。

装甲を持つS G型でさえも、あれの攻撃を受け止めるのは中々に堪えるらしい。

事前に打ち合わせた通り、攻撃される前にまず的を絞らせない作戦のようだ。

いける。あれを倒せる。ワタシは勝つ。ワタシたちは生きて帰る。

猛り狂う猛獣は、しかし呆気なくこちらの策へ嵌まった。やつがS Gを追い詰めたと思っている路地の行き止まりは、高台からワタシが見下ろす形になっている。

ワタシの半身が、やつの背部、駆動部へと執拗に徹甲弾を撃ち込みまくる。

火を吹くまで、こちらを向くまで。

S Gにまんまとワタシの狩り場に誘い込まれたことに気づいた奴は、防御能力を持たないワタシに狙いを変えたらしい。

こちらをやつのカメラアイが捉えた。
こちらへと、その脚力で飛ぶ、瞬間。

まるでワタシが負けるかのような構図だが。
しかしワタシは勝ちを確信した。

吹き飛ぶ装甲。爆ぜる弾薬。

IWS2000の、狙い済ました一撃。

予めワタシが削っておいた部分に寸分違わず撃ち込まれたそれは、
彼女のもつ火力を存分にリーパーへと運び届けた。

ワタシたちはあの猛獣すらも撃ち抜き、その息の根を止めたのだ。

私は殺すためだけに産まれた。

それだけだ。特にそれに悩んだことはない。

でも、ここに来て、彼らと関わってからというもの、産まれた理由
と、実際の生き方にはなんら関連性がないのだと気付かされた。

私は、兵器で、WA2000型の戦術人形で、しかしそれ以前に私
は私なのだ。

ここまでの記憶と、思想と、意思が受け継がれる私は、ここにしか
いない。

だからこそ、私は殺すことをためらわない。

私は、私のするべきことを真摯にやり遂げる。

それが、産まれた理由であって、そして今の私がなすべきことだと
思うからだ。

俺はどうしようもない男だった。

気に入った戦術人形一つすら守れなかった、パイロットだった男。それが今の俺だ。

あの基地の、あの事件。あれは俺をいい方向に変えたのだろう。社会という不確定なものに責任を押し付け、憤り、横暴に振る舞っていた俺はあの事件で殺された。

だが、俺が心を入れ換えるにまでに、余りにも犠牲にしたものが多かった。

今はもうゴッグルしか残っていない、アイツの残滓。

冷酷に処理したE・L・I・D初期感染者たち。

悲痛な叫びを上げていたE・L・I・D末期患者。

俺のしようもない八つ当たりのせいだ。

俺は、冷酷なパイロットを気取り、その実にも考えてなかっただけなのだ。

だからこそ。

これ以上俺のような哀れな馬鹿を増やしたくない。

I M Cへ馬車馬のように使われる奴等に、生きる意味を。

それが、今の戦う理由。

君たちの前線基地は

笑い声も泣き声も、銃声の前にはかききえる。

横殴りの激しい雨。所謂嵐だ。

なんとかここまで生きてこれた。PKPのためにも、俺のためにも、ここはなんとしてでも生きてかえる。死なずに生き残ってみせる。

俺は、視界が不明瞭な窓から目を凝らし戦闘の余波により瓦礫だらけの外を除き、そしてリーダーを確認する。

恐怖と緊張によつて不規則に震えそうになる声帯を、決意と理性をもつて律し、PKPにアナウンスするんだ。

二人っきりの、大昔を思い出すような戦力不足となりはてても、ここは俺たちの立派な前線基地なのだ。

「…最終ウェーブだ。絶対に、生きて、死なず、どんなことがあるうとも自由をつかみとるんだ。」

遠くの方で、雷鳴が聞こえている。

恐ろしいが、先程までに鳴り響いていた銃声よりはましだ。

また聞くことになる銃声なんかよりも、こんな壊れかけた地球の数少ない自然を感じる気がして、俺は雷の音が好きだった。

「了解」

でも、俺が一番好きだったのは、PKPの返事の声だ。

ある説では、パイロットの価値は一般的な兵士の五人分である。だが、パイロットを一目見たものはそれを否定する。

あんな素晴らしい兵士が、五人分ごときのはずではないと。

それは違う。まず前提条件から違う。先ほど挙げた説自体が間違っている

人の命に価値などない。

それは人間をもした人形でもそうだ。

この世界に、無条件で価値をもたらしてくれる慈悲深い上位存在はない。

自分で、自らの価値を作り、道を、命を繋がないといけないのだ。生半可な理想、人情、愛情などは、なんら無価値なのだ。

最後のウェーブ、つまり纏まった兵力投入だというのに、IMCが寄越したのはあまりにも地味なドロップシップ一隻だった。

しかし、戦略的価値は？

彼らは、与えられる偽りの価値を唾棄し、この世界における唯一無二の価値、総てを蹂躪しつくす力と、その原動力である迷いなき殺意を兼ね備えた存在だ。

先ほどまでの兵士たちと比較するのもおこがましい。

パイロットと戦術人形。

彼らの共通点は、殺すことに迷いがないことであつた。

それらが今、この地球に降り立った。

恐ろしいスピードで何かが近付いてくる。

何故、何か、としかわからないかという、情けないことに私の視角モジュールは奴の姿を確認する前に破壊されてしまったのだ。

あまりにも正確な一撃。純粹すぎる殺意。

殺すことを臆することもなく、しかし楽しむこともなく。当たり前のようにだ。

シヨットガンの戦術人形である私ですら、防ぐことは出来なかった。

次までに改善が必要だろう。

次があればだ。

もはや私の体は起き上がらず、雨が打ち付ける地面と同化しかけている。

P M Cを脱走した私には、もうバックアップなどない。

もし再生されたとしても、この想いも、記憶もない私ではないA M K S Gと化すだけだろう。

潰された視角モジュールから流れ出る循環液は、まるで涙のようで、実際私が涙を流せたのなら、恐らく大泣きしたであろう。もう、私の大切な指揮官とは会えないのだから。

ああ、数少ない得意分野でさえも、奴等に奪われるのか。最悪だ。自由になれると思ったのに。

あんな化け物がいるなんて聞いていない。

近くにいたM FのK S Gの頭部が超遠距離から撃ち抜かれ、気付いたときには銃声に呼応したかのように 怪物たちが壁を地面のように走ってきた。

すかさず半身を構え、そして私、A A 1 2の長所であるフルオート機能を活かし、連続した散弾の射撃を加える。

でも、あれらは次元が文字通り違った。

そう、そのまんまの意味で異次元へ消えたのだ。

まるで最初からそこには虚無が広がっていたかのように。

しかも運の悪いことに私の狙いのつけた、先行してた方のパイロットだ。

いや、そうなるように仕込んでいたのかも知れない。

瞬間、急加速しありえないほどのスピードで距離を詰めたもう一体に殴られる。

寸前であわし威力を殺すが、しかし虚空から現れた最初の一体に今度こそ蹴り飛ばされた。

私は軽く吹き飛び、身体中がエラーで埋まる。

こんなやつらが人間で、そして私たちの指揮官のリーダー、希望と同族なのか。

全身機械で、わたしたちよりも人間らしくない人間。

暴力的で野蛮だ。もはや最新型とはいえなくなった私でももう少しマシな解決方法を行使できるだろう。

彼らと、彼らの上司は何がしたかったのか。甘味すら味わえないだろうに。

それで楽しいのだろうか？

そんな考えは、雨の音と濁流のごとき身体異常警告にかききえていった。

「命中。追撃を、つてもう走り出してるわね。」

全く奴等はせっかちだ。殺すことがライフワークのキリングマシン。人間なのにな。

まだ反乱に参加していた人形は破壊しきっていない。

私も次の地点に移動しなければ。

そのときにやつと、それを認識した。
そこになにかいる。

気付いたときには遅かった。

パイロットだ。元。

反乱した指揮官たちを束ねる人物がパイロットではないか、という噂は聞いていたもののまさか本当にいたのか。しかも私の目の前に現れた。

意味するものは一つ。死が目の前に現れたということだ。

弾の嵐をR97サブマシンガンが放った。

あと少し物陰に隠れるのを戸惑っていたら、あの銃特有の連射力で私の体は軽量化されていたところだろう。

独特の射撃音が恐怖心を煽る。

穴だらけになるのだけはごめんだ。

すかさずダミーたちに指令を出す。

ダミーの扱える数は順当に増え、今のところは4体同時稼働可。

それでも目の前の敵には気を抜けない。

遠くのビルから、ダミーの一つが狙撃を開始した。

しかし虚しく地面を削る音しか聞こえない。どうやらかすっただけのようだ。

すると、位置を特定されたのかサブマシンガンでダミーが撃ち抜かれた。あの距離で、サイトも覗かず、あの武器でだ。

相手の練度は相当高い。これは不味いことになったな。

あっけなかった。

脱走人形の資料によるとそいつらは人間の、所謂少女の姿をしていました。

見た目通り、実際ここで会ってみれば、容姿に変わらず中身も、人形

とは思えないくらい人間らしい。

高らかに愛を叫んで、最後まで生きようとしていた。

SG型、変わったプルバップ方式の散弾銃を使っていたもの。

高性能なものの、大食いの穀潰しで、もはや彼女が必要なほど高難度の任務はなかったのだろう。

必要のない兵器はどうなるのか？

廃棄寸前だった彼女を救ったのは、同じくその有能さを発揮するこ
とが出来なかった利発な指揮官。

両方とも、その有能さ故に、現在の儲け主義のIMCによる制度に
馴染めなかった、悲劇のコンビだ。

そして彼女らは今、その力を存分に発揮し、IMCから町を一つ奪
い返した。

個人的に言いたい。

なんて感動的なんでしょう。

次に同じくショットガン。

不健康そうで、それに無気力らしかった。

それなら何故？IMCで墮落した生活を送れば良かったのに。

戦闘前に見た資料によると彼女は中々嫉妬深いようだ。

そう。彼女が居心地のいいあの場所を離れ、地獄のようなこの地に
いるのは、ひとえに指揮官に認められ、独占したかったからだ。

親身になり接してくれたらしいその指揮官。

その指揮官のためにと、ただそのために指揮官とともに奮起したの
だ。

その指揮官は、有能とは言えないが、部下に寄りそいい人間だっ
たそうだ。

個人的な感想ですが、なんて、なんて素晴らしい愛なのでしょう。

他の人形よりも数カ月前に脱走したもの。

アサルトライフルの人形らしく、リーダーのパイロットに馴染み深
い奴らしい。

彼女は合理主義者だ。合理を尊び、合理を唱え、合理を行う。人形
らしい人形。

でも、彼女は最後に凄まじいまでのリスクを背負ってIMCの基地を破壊し、兵をE・L・I・Dから逃がした。

そしておそらく今も生きている。

普段の彼女ならおそらく自分も含めおとなしく命を投げ出していただろう。

どうして? どうして?

答えは簡単。推論だが、彼女は変わってしまった。

必死にもがいて、苦しんで、たった一人で自らを偽り続けたパイロット。

そいつに自分を薄く重ねたのだろう。

救ってやりたいと、そして仲良くなりたいと願ったのだろう。

ああ、ひどく美しい。眩しすぎるくらいです。

あるMGの人形。

行きすぎた自信と、それに伴う責任感。

時代が時代なら、英雄気質なその性格と能力。

悲しいかな、この時代は英雄気取りはあまり好まれない。

そのうちゆっくり首を締め付けられていき、そして使い潰されるか、精神を病むかの二択でしかない。

彼女は後者だった。

それでも、その指揮官は彼女を見捨てなかった。

IMCも意外だったろう。

結果として彼女は弱さを受け入れ、本当の強さを得た。そして、指揮官への想いとともに、真のエリートとしての道を歩み始めたのだ。美談だろう。誰がどう見ても美しい話だ。心が洗われるようです。

まあ、今日みんな死んじゃうんですけどね。
どれだけ美しい想いだろうがなんだろうが、メンタルモデルがアツ
プロードされちゃてるので私たちには筒抜けなんですよ。

血の道が見える。

私の逃がした彼は、うまくやっているのだろうか。

私は生きている。

ダミーリンクをフル活用し、死の間際にまるでリレーのように自らの精神を写していった。あんなのはもうにどとしたくはない。

そして、その命を守るためにまた、戦うのだ。

ダミーは残り二人。

物陰から奴等を伺う。
相手は二人。しかもパイロット。
やるしかない。

気づかれぬ内に走り込みつつ、無茶苦茶に乱射する。

不意打ちだが流石はパイロット。

咄嗟に片方は空間へと消え失せ、もう片方は高速で瓦礫の壁へと隠れた。

周囲を警戒する。

自然と銃を持つ手に力が入る。

迸る特徴的な音。

聞いたことのない音だが、しかしそんな異常な音を出すのはこの瞬間において一つしかない。

咄嗟にその方向へと銃口を導き、ストックへ頬を押し付け精密射撃の構えをとる。

そのとき空間は割け、私は引き金を引いた。

読み通り。

敵の肩と胸をつらぬき、そのまま彼は瓦礫の山に落ち、そのままの勢いで遮蔽物に飛び込んだ。

まだ死んでいないはずだ。

断続的な銃声が私の後ろから響く。

ダミーからの掩護射撃は十分な精度だ。

対パイロットにおいて、パイロットに一瞬でも自由を与えろということは私たちがただの歩兵にとって死ぬことと同義だ。

アサルトライフルの射撃は、連続してできる時間は短い。

しかしその短い時間に、私たち戦術人形は命を懸ける。

何度も何度もシミュレートした動作を瞬時に再生する。

グレネードの発射準備を整えるのに瞬きほどもいらぬ。

先ほどの叩き落としたパイロットへ迷いなく打ち込む。

空間は先程まで雨粒に占領されていたが、私の打ち込んだグレネードのお陰で一瞬全てを吹き飛ばした。

やったか？

いや、やってない。

駆ける音が聞こえる。

やはり来た。

パイロットの機動力はとても高い。ほかの兵種の比にはならない。壁から想像もつかないルートを通り、こちらに肉薄するのは容易だろう。

飛び込み様に、至近距離でナイフが振り抜かれる。

私の正体を偽る肉が裂ける。人間を模した血が勢いよく吹き出る。

寸前で致命傷を回避した私は、同じようにナイフを抜き、相手のカメラの部分へとなりふり構わず突き刺そうとする。

私も人間とは比べ物にならないスピードを持つはずなのだが、私の渾身の一撃も簡単には受け止められた。

大きな、大きなカメラアイがこちらをハッキリと覗いてくる。

パイロットであることを加味してもなお異常なスピードで、こちらへと拳を伸ばす。

死ぬ

その瞬間、パイロットの腕が弾けた。

銃声は高らかに響き渡る。

身をよじるパイロット。

なんとか、なんとか私は生きている。

私は何故生きている？

奴にとつても予想外の攻撃だったのだろう。

直撃を許したパイロットが大きく仰け反る。

こちらを見つめるカメラアイが、少し驚いて、瞬きしてるようにも思えた。

「えへっ……いい感じ……私を、悔るからそうなるんだ。野蛮人め……」

誰とも知らぬSG人形から助けられた。

スラグだろう、パイロットすらあのダメージを負ったのだ。

これが最後の機会だろう。奴を、殺すには。

「一か、八かっ…！」

合理主義者の私だが、そのときばかりは祈っていた。生き残りたい、まだ死にたくない。

崩れた体勢のパイロットに照準を合わせる。

引き金は妙に重く、何倍にも希釈されたように感じる時が、うざったかった。

「こんなところで、俺が負けるのか…？」

ブツリブツリと、体から異音を響かせながらパイロットは地面に叩きつけられた。

「私には、勝たなければならぬ理由があるんですよ」

「意味がわからねえなあ。なんでお前はそこまで頑張れるんだ？人形なのに、無駄なものを背負いすぎなんじゃねえのか？もつと機械らしく振る舞えれば、楽だろうに」

少し前の私なら同調したであろうその意見は、しかし今の私からすればあまりにも理想からかけ離れていた。

「無駄なものがないと、楽しくないんです。」

「あなたもそうでしょう？」

「違ういな…」

俺も、そういうので悩んでたんだよ。お前も、あまり気負いすぎんなよ…」

俺はあんたを知らねえが、多分あんたはあんだだよ。

俺はもうデータ転送して帰んなきゃなんねえよ。

これ以上この体に留まるとマジで死んじまうからなあ…」

言い終わると同時に、カメラアイから光が消えた。

それきり、パイロットはピクリとも動かなかった。

雨足は酷く、血の池はもうなかった。流れたのだろう。

一進一退、勝るとも劣らず。

なんて強さだ。私たちダミーリンク含めた狙撃がほとんど効果を為していない。

瓦礫へと巧みに身を隠し、迂闊に攻められない。

不用意にかの領域に踏み込むが最後、抵抗するまもなくスクラップだろう。

ダミーリンクを、入り組んだそこへ突貫させる。

辺りを見回す。高速で周辺を把握していく。

瞬間、ダミーの視覚センサーが奴を捉えた。

瞬間奴の認識外と思われるところから回り込み、背後を奪う。

ダミーの一つは高速で迫り来る拳の画像を送ったのを最後にそれきり信号はなかった。

仕方がないとは言え、この状況、距離において、ライフルでサブマシンガンに挑むのは些か無理があったかもしれない。

しかし、やりきらねば。私はプロだ。

紙一重の距離まで、一瞬で詰める。

瞬間的にパイロットが引金に指をかけた。

私は銃を構えた腕をひつつかみ、無理矢理に奴の銃口を私からそらす。そのまま腹に蹴りを入れ、相手を吹き飛ばした。

重い肉の感覚。クリーンヒットだ。

この行動にかけることのできた時間はあまりにも短い。

それだけ奴の反応も対応も、思考も早かったということだ。

…そしてここまでしても、奴はしぶとく生きている。

瞬きする間に、空中制御を行っていた彼は、空を蹴り、私の目の前に舞い戻った。

判断が遅れる。ここから生き残るにはどうすれば良いのか。演算を始める。

いや、もう遅すぎる。

雨粒だらけの視界の中、着実に迫る奴の蹴り足。

世界が回る。

あまりの衝撃に、正しく世界を認識できない。

悍ましい浮遊感と、ただひたすら気持ち悪い落下。

そのまま地面に激突する。

一撃、たった一撃でこんなにもなるのか。

頼みの綱だったダミーリンクとの通信が途切れる。

他のMG人形に穴だらけにされたようだ。

「……どうして、あなたはそこまで自由にこだわるのかしら……？」

疑問。何故？

私の見てきたパイロットは、なんだかんだで任務と仕事に誇りを持っていた。

それが、ここまで自由を求め、全てを投げ捨て、ここにいた元の市民をも危険に晒すようなことをしたのか。

事実、この町の住民も多大な被害を受けた。

我々とやつらの戦いに巻き込まれたのだ。

避難は完了したらしいが、このご時世で不動産含むさまざまなものを奪われたのだ、元の暮らしに戻るのは生半の苦労ではない。

そこまでして、得たいなにかがあるのだろうか。

今ここで死にきる前に、それが知りたかった。

「俺は、自由に囚われてるんだ。ここで諦めちや、アイツに顔向けできないんだよ。」

とつとつと、彼は話し始めた。

拙いような印象さえ受けるその語り口は、さつきまでの化け物じみた印象は鳴りを潜め、まるで悩む青少年のようでもある。

「俺はそいつに救われた。燻ってた俺を、燃え上がらせたんだ。奴のためにも、俺は不完全燃焼のままでは終われない。俺のためにアイツがそこまでやるなら、おれもとことんやらなきやつてな。」

パイロットも人間なのだろう。誰もが大人小なり何かに悩んでいる。

フェーズもそうだったな。

こいつも悩んだなりに答を出したんだろう。

「そう……ほんと、貴方たち身勝手ね……」

貴方の相棒は、きつと生きてるわよ

なんとなく、そんな気がするわ……」

励ましの言葉を、敵に送る。

私らしくない。

でも、私が殺しのために産まれたのは事実だが、既に負けてしまったので少し位は慈悲をやってもいいだろう。

まあ、資料に情報が残ってただけなんだけど。

それをいうのは、少し無粋だろう。

そろそろメンタルマップの転送を始めなければ。

「… 帰ってきたのか。あんな無茶したならもう死んでると思ってたよ。」

目の前には、俺が一番会いたかった、アイツが。

「帰ってくるのは当たり前です。帰ってこなかったりする貴方がおかしいですよ？」

貴方には私がいなければ、また無茶苦茶かつ破滅的なことを行ったりするでしょう？」

死んだと思っていた、戦術人形が。

俺を理解してくれた、数少ない存在。

合理的な彼女は、俺のような奴でも対応を変えず、媚びず、真摯に接してくれた。それが、俺の変わるきっかけにもなれたんだ。

今日が雨でよかった。もっというなら、俺はヘルメットをしてよかった。

涙が止まらない。すさまじく、幸せだ。

「………… やったな！PKP！」

… この戦闘を生き残った指揮官と戦術人形が、詰め所に集まる。

幸い、指揮官も戦術人形も、死に至ったものは一人として居なかった。

それは俺と、俺の大事なPKPも例外ではない。

「ついに、やったんだな…ワタシは嬉しいぞ、指揮官」

素直な、いい表情をしている。ああ、俺は少しはPKPを喜ばせることができただろうか。

傷ついた人形たちも、修理されている。

完璧な設備はないのだが、今のうちに修復できるものを修復しないのは可哀想だ。

それぞれが、自らの愛した人との無事な再会を喜んでいた。

「次こそは…」

「いや、もう無理しないでくれ！お前はよくやったよ…」

KSGと、その指揮官だ。通信が繋がらなくなったときは半狂乱になってたなあ。普段の冷静沈着な彼との差が大きすぎて俺たちまで驚いた。

それだけ大事だったんだろう。

俺もPKPがそんなめにあつたら発狂しそうだ。

「見ただろー？私がパイロットの腕を吹き飛ばしたやつ、結構頑張ってたくないか？」

「おう、おう、良くやってくれた。」

AA12の指揮官。

とてもだが軍人には向かない、平和的かつ牧歌的な人物だが、それがAA12にもようあつたようだ。

彼も大泣きしていたか。

その後のAA12の活躍ぶりを見てからの興奮のしようといえはすごかったが。

とにかく、俺たちはIMCに対して二度目の勝利をおさめたんだ。こんなにもめでたいことはない。

「諸君、本当によくやった。我々は勝利したのだ。」

IMCを二度も退け、我々は、本当の自由を手に入れた。もうIM

Cから逃げるために、E・L・I・Dの隣人になることはないのだ。本当に、ありがとう。

元IMCのパイロットになんかについてきてくれて、ありがとう…！

信用されるか不安だったが、君たちの信じてくれた君たちのお陰で、この偉業を達成することができたのだ。

… あー、やっぱり演説なれしてないな…

まあ、皆！おめでとう！」

歓声上がる。

そりやそうだ。皆勝ち、無事に終わったのだ。

話によるとリーダーダーは命の恩人である戦術人形とも会えたというのだから、いいことづくめだ。

ああ、幸せだ。

その喜びの声は、一つの銃声に上書きされた。

「なんて、なんて感動的なんでしょうね」

パイロットが、一人残っていたのだ。

死んでいた、と思われてた彼は、まるで呼吸するかのように、リーダーの頭を撃ち抜いていた。奇怪な、二穴の銃が彼の手には握られている。

「パイロットであつた彼が、我々の戦力の正確な確認をとつていなかったなんで… どれだけ彼女と再会できたことが嬉しかったんで

しょうか？ねえ？私はまだ生きてますよ？」

皆、足がすくんで動けない。何故、いつから潜伏していた。町中探し回ったんだぞ。それでも、何故？

「きつと、感動しすぎたんでしょねえ。

戦いを忘れるほど嬉しかったんでしょねえ。

そのせいで、折角手に入れた幸せがなくなるなんて思わなかったんでしょ。」

いや、俺たち指揮官組の落ち度でもある。

でも、もう遅い。遅すぎる。たった一人の死亡確認を為損なっただけで、俺たちの命運は大きく曇り出すのだった。

もう止んでいた雨の代わりに、巨人の落ちる筋が見えた。

故郷に痛みはつきもの

空から一つの筋が地へと延びる。

凄まじい震動とともに地に落ちたそれは、まるで神話に現れるような巨人だった。攻撃的な、赤い衣を纏った、恐ろしい化け物。

「さあ、貴方たちの思想と思考と覚悟はいかほどですか？」

パイロットが、その巨人に食べられるように中に入ってゆく。巨人を包む赤いヴェールが剥げる。

伝説が動き出す。立ち上がり、刀を上段に構えたその姿は、旧い東方の浪人のようにも見える。

やるしか、ない。

パイロットは化け物のようなやつだが、それでも、負けられない。俺達は、勝つんだ。

K S Gが走り出す。

ショットガン人形は、小隊内で一番前に出る。

そういう役割だし、それに見合う耐久性と能力をもっている。

でもそれは、歩兵同士の話だ。

ちらと、K S Gの指揮官を見る。

しかし彼は不敵に笑っている。

「俺たちは早くリーダーを回収しよう、まだ生きてる。オルタネーターは確かに一撃の威力は高いが、リーダーはパイロットだ。頭に突き刺さっても一発ならまだ耐えられるはずだ」

冷静沈着、その言葉が似合うのだろう。

「さっきまでのK S Gのことをあれほど心配していたのに大丈夫なのか？」

「ここで逃げ惑うよりも、俺たちの能力を持って抵抗した方がまだ可

能力があるんだ。俺達はやることをやる。お前らも手伝え。」
確かにコイツらしい。いざというときは何時も頼りになる。

指揮官達は、リーダーを素早く確保し、巨人、つまりタイタンが入ってこれない場所に駆け込む。

高いビルだ。この抗争で放棄されたばかりで、まだ生活感が残っている。つまり、医療品やらもまだまだ残っているかもしれないのだ。リーダーを回復させれば、まだどうにかなる。

俺達はそれを探し始めるのだった。

あのタイタン、と呼ばれる兵器は、遙か彼方の戦争においては支配者のような存在だ。

ある時代における主戦力。

歩兵は白兵戦の王、とも言われるが、その歩兵が常軌を逸した火力、機動力、装甲を手にした存在、それがタイタンだ。

そしてあれらは、大規模な戦争によりフィードバックが進み、第二世代型となった最新型。

奇しくも、私たち現行のI・O・P人形と同じ世代だ。

ワタシたちは細かい改良を加えられてもいるが、やはり単体の戦力はタイタンには敵わないだろう。

それらは特殊な余剰エネルギーをプールし、シールドを生成する機構をオミットし、代わりに余剰エネルギーを使用するそれぞれのクラスに応じた高度な能力を持つ。

さらには機体一つ一つと、武装一つ一つが一纏めにされ、それぞれの兵装の能力を最大限に発揮する構成となっている。

それも、ワタシたちのASSTに似通うものを感じる。

まあ、だからどうした、というものかもしれないが。

KSGが瓦礫の間を縫いながら、タイタンへと発砲する。

しかし、その散弾はタイタンへと届くことはない。

ローニンというそのタイタンは、その由来となる大きなブロード

ソードを使い、銃弾を目にもとまらぬ早さで防ぎきつたのだ。

文字通り返す刀で、K S Gに迫り来るブロードソード。

生存本能によるものか、それを紙一重で避けていく。

普通ショットガンというのは鈍重で、あまり避けることを得意としない。

しかしK S G型は違う。

ショットガン特有の非常に高い装甲値に加え、特異な機能として一時的に全防衛性能を向上させることができる。

その機能を使い、緊急回避をおこなったのだろう。

ビルから、ワタシは徹甲弾を装填したマシンガンを連射する。

基本的にローニンは近距離攻撃しかできない。

基本武装のレッドウォールと呼ばれる大型ショットガンの殺傷距離は約40メートル。

とても短く、しかしそれを補ってあまりある瞬間火力を持つ。

だから、その射程内に入るとは、すなわち鉛の壁に押し潰されることを意味する。

ワタシは機動力が不足している。

なのでまず狙われないことが重要なのだ。

それをK S Gは理解して、そして自らうってでた。

やはり、アイツは信頼できる。

中距離を押さえるのは、A A 1 2。

彼女は特殊なショットガンだ。

その銃身の汎用性といえば右に出るものはいない。

事実彼女が今使っているのは、空中において電子制御で爆発する高度なフラグ弾だ。これなら装甲にも一定の効果が得られる。

だが、それでも奴は止まらなかつたのだ。

巨人の駆動機関が唸りをあげる。

瞬時に空間へと消え果てたタイタン。

虚空から現れた、その巨人の目線は、真っ直ぐワタシに向いていた。

ちまちまと、それらはうざったい。

あまりにも矮小で、弱小で、そのくせ自らを高らかに主張する羽虫。だから殺す。

情けないことだが、私は強者と手にあせ握る戦いを繰り広げるよりも、弱者をひたすら蹂躪する方が得意なようだ。

タイタンから飛び出、真っ直ぐに、そいつを見つめる。

驚いた顔をしていた。

そりやそうでしょう、今から殺されるのだから。

瞬間的に思考が加速する。それに合わせて身体もだ。

ああ、だからこれは止められない。止まらない。止まらない。

奴の顔が驚きから恐慌に変わる様を、これでゆつくり見られる。

自分の欲しがったものの対価をしろといい。

私は特に小細工などせず、ただ真っ直ぐに拳を突きだした。

肉の感触。気にさわる。

こいつなどおままごとの戦いしかしていない、しかも肉の身体ももっている。それ以上に何を望むというのか。

私の仲間など、それについて発狂したのですよ。

顔は歪んでいた。その面の皮も剥がしてやる。

私たちに無いものをもつくせして、強さを求めたからだ。

こいつはなんのために強さを求めたのだろうか？
もう何もかも手に入れてるようにも私には見えるが。
もし本当に、戦いにいきるのならばそんなもの必要ないでしょう？
空いた手を使い、ナイフを顔に突き立てる。
さんざんに抵抗するが、もう無駄だ。
ゆっくり時間をかけて拘束する。
私らしからぬ時間のかけ方をしてしまいましたね。

ゆっくりゆっくり。そう、ほら、今いきますよ、ほらほら。
ナイフは特に手応えもなく、スルリと顔の肉を切り裂いた。
「ぐ…… あああっ！」

耐えかねた人間擬きが音をたてる。
おや、かわいい声もあげるのですね。

声？合成音声で十分です。声帯も壊してやる。
そのとき、ふと彼女の左手を私は見た。
気にくわない。なんだそれは。

人形ごときが、指輪だと？
そのままそれに手を伸ばしたその時、発砲音とともに私の手は何か
に弾き飛ばされた。
思わず音の方を見る。

「俺の大事なPKPを、傷つけるんじゃないやねえーっ!!」
そこには、あの人形の指揮官らしき人物が、私に向かって発砲して
いた。

俺は思わず駆け出していた。
上空から戦況を偵察するドローン。
それに写ったPKP

数階建てのビルの割れた窓際で、PKPが拘束されていた。嫌がらせのようにゆっくり、ゆっくりと。

その時にはもう走り出していた。

「おい……ここで飛び出たところでなにもかわらねえぞ！ 相手はパイロットだ、助けてえのはわかるが諦める！、それにお前が危険にさらされるのをあの子は望んじやない！」

「だからどうした!? 見捨てることの方がよっぽど俺にとっては苦しい！ 感情的なのは解るが俺は行くぞ！」

「… わかった、死ぬなよ。PKPと幸せになるんだろう？」

「言われずとも」

聞き分けのいいやつだ。

いや、アイツも俺の気持ちがよくわかるのだろう。

大事な人を失うのは、誰だって嫌だ。

もし仮にそれが確定したような時だって、できるだけ足掻こうとするだろう。それが人だ。人形だ。

そこら辺に落ちていた小銃を拾い上げ、PKPのビルへと駆ける。

間に合え間に合え、間に合え間に合え間に合え間に合え！

遠い、やたらと遠く感じる。

それでも俺は走り続けた。

タイタンに会えば一貫の終わりだが、それでも俺は隠密など関係無しに走りまくった。

そして、やつが今PKPにナイフを突き立てたその時に、俺は照準を合わせ奴を撃った。

ギリギリだ。

「俺の大事なPKPを、傷つけるんじやねえーっ!!」

渾身の一撃。まあ引き金を引いただけなのだが。

しかし、ヒットしたが、浅い。

やつがこちらを向く。

ヤバイ、終わった。

しかし、告げられたのは死刑宣告でもなんでもなく、意外な提案だった。

「本当は貴方に構ってる暇なんてないんですけどね…。まあ、面白いこと考えました。あなた、私のところまでたどり着いたら、ある条件でPKPを助けてあげますよ。」

完全に舐めきった提案。しかし、事実おれはもう死んだも同然で、奴のもつ奇怪なサブマシンガンの二つの銃口は、逃さぬように俺に向けられていた。

「わかった…。」

素直に従うしかない。万に一度でも、アイツを助けられるのなら。

パイロットの降りたタイタンとて、戦闘力は計り知れない。

私KSGは、早くも押されている。

まず、その鉛の壁、とも形容される基本武装のショットガン。まともに食らえば私の障壁すら紙のように貫通されるだろう。なにせ私もショットガンなのだ。近付かなければ戦えないが、しかし近付きすぎると相手の圧倒的火力に沈められてしまう。

そしてAI上能動的に追ってこないとはいえ、その機動力は規格外。

不用意に視界に入ろうものなら、逃げるまもなく距離を詰められ、死ぬ。

ブロードソードは、生半な瓦礫程度なら簡単に吹き飛ばす。

カバーを使ったところで、上から叩ききられて死ぬ。

この絶望的な状況で私たちが勝つには、強烈な手段が必要だ。

AA12と連絡する。

私たちが勝つには、リスクを犯すしかない。

そして、その作戦をAA12に伝える。

ロデオによる大破を狙う。シンプルだが、パイロットでさえ忌避する危険な戦法。

これを、ダミーリンクすらない人形が行いきるのは、高度な連携が必要になる。

だが、やらねばいけないのだ。

明日も、生きて指揮官に挨拶するため。

「ああ、やっと着きましたか。」

表情の伺えない、無機質なカメラアイと合成音声。

今すぐ発砲したいが、あちらにはPKPが囚われている。

「解放の条件はなんだ。」

俺の一番気になる、そして一番求めること。

しかしそれは案外すんなり終わったかに思われた。

「ええ、ここにたどり着くことです。さあ、どうぞ。いじめて悪かったですね。」

俺の目の前にPKPが優しく置かれる。

ああ、PKP。もう二度と、こんな目には遇わせたくない。

しかし、その左手には、大きな鞆のようなものが固く結びつけられ

ていた。なにやら電子音が聞こえる。

折り曲げられた、おそらく瓦礫から調達したであろう金属製のもので固く固定されていた。

その固定は切れそうにもないし、ほどけそうにもない。

「おい……これはなんだ……？」

おそろおそろ、おれは訪ねる。

先程から等間隔で発する電子音に焦りながら。

「ええ、爆弾ですよ。」

奴は平然と、そういいはなった。

「おい、これを外せ！」

条件反射的に言葉を紡ぐ。爆弾が大事な人に付いてて、安心なんてできない。

「わかりました、外すのも手伝ってあげますよ。」

そうして俺に投げ渡されたのは、たった一つの大振りな軍用のナイフだった。

わざと刃が落とされているのか、刃がなまくらで、鉄など到底切れそうにない。

肉や骨を苦勞して押し切るのがやっとだろう。

「……おい、こんなじゃ、この固定してる金属は切れないぞ。」

「おや、残念。なら、腕ごと切り落としてしまえばいいんじゃないですか？その誓約指輪ごと、捨て去ってしまえばいいのですよ。」

耳を疑った。なんだって？

「ああ、指輪だけ外してなんて姑息なことは許しませんよ、それは手で起爆できる爆弾、サッチェル。なにもしなければこれから十分後に

起爆させます。もしあなたが指輪だけ外して腕を切ったり、そのまま爆破信号の届かないところへとそれを持って帰ろうとしたり、まあとにかく黙って腕を切り落とすこと以外を行おうとすればドカン、仲良く死にます。

あと、PKPとは会話出来ませんよ、音声判別モジュールと、声帯機能は破壊しました。つまり貴方は彼女から見れば、無言で結婚指輪を腕ごと剥ぎ取る最低な指揮官になるでしょうね。」

「なんて、なんて残酷な。」

あまりのことに、おれはそれ以上言葉を発することが出来なかった。

終わり

やった。やっと見つけた。

私たちは、パイロットの治療のための医薬品を探していた。文明の進歩と言うのは素晴らしいもので、この時代においては死んでいないのなら大体の怪我はその場で治せるといっても過言ではない医療技術がある。

ステイムパック、と言われるものなどそれを打っただけで大抵は回復する。

それを使用しているパイロットは銃創程度数秒で再生する。

そのステイムパックを発見できたのだ。

ショットガン人形たちが身を呈してローニンと戦ってくれたので素早く探し出すことができた。

そうだ。これさえあれば、人間や、使うことはないだろうが人形ですら元通りになるのだ。

一パックしか無かったのは残念だが、今はこれで十分だ。

これを使えば私のパイロットは助かる。

そして戦力的にもあのパイロットと互角になる。

素晴らしく合理的で、効率的。

…それに、折角再開できたのに彼に死なれるのは嫌だ。

持ち帰る道の半ば、悲鳴が聞こえた。

私は、壁に添うようにして走っていた。

ただ単純に走るのではない。抜け道をくぐり抜け、フェイントをかけ、そして向こうがこちらを見失えばまた遠距離から前面にスラグをぶち当てる。そして、また命がけの鬼ごっこ。

何故そこまでして私は駆けるのか。

タイタンに勝つには、二通りの方法がある。

ひとつは、特別な対タイタン武器と言われる大型の専用装備を使うことだ。

その物々しい名前と、特徴的な見た目に違わず効果は絶大。

制限された弾薬であることを差し引いてもお釣りが来るレベルのタイタンへのリーサルウエポン。

しかし、そんなものは私たちの手元になどない。

基本的にそんなものを保有するのはパイロットか、前線のIMC歩兵程度で、まず地球のPMCに配備されることはない。

一部の徹甲弾や爆発物を使えば、私達でも確かに被害は与えられるのだが、しかし時間がかかりすぎる。

一番の火力役のPKPが拘束された今、私たちだけでは流石に火力が足りない。

だがパイロットが復活するまで、私達はできるだけ戦力を削がなくてはいけない。

ならどうするか。直接攻撃しかない。

もう一つのタイタンに対する弱点とは、脆弱部位を狙い打ちすること以外にない。

基本的にタイタンは歩兵の携行できる通常火器では攻撃しても効果は薄い。

しかし、一部の装甲が脆い部分、例えばタイタンの前方カメラアイなどが、設計上弱点となっている。

だが、タイタンの目の前に立てるものなど存在しない。視線の先へ不用意に、長時間身を晒せば最後、蒸発、斬殺、燃焼、爆破……

死亡例のデパートかと言うほどの多様性でこの世からさよならだ。

例外はない。

これも攻撃チャンスの極端な少なさの原因だ。
ならどうするか？

バッテリーだ。最大の弱点は、タイタンの上部に備え付けられているバッテリーソケット。

そもそも稼働中にバッテリーを引き抜くのみで連鎖爆発を起こす。
それだけデリケートな部分。

飛びかかられることを想定していなかったのか、そもそもそんなことはあり得ないと思われているのか。

パイロットが搭乗したタイタンは、様々な方法で（場合によってはむちやくちやとも言える方法で）

上に乗った勇者、あるいは死にたがりを叩き出すが、オートタイタンはそこまでの対策を取ることができない。

それを利用する。

パイロットならば直接飛び乗ることさえ可能だが、私達はそのためのジャンプキットをもっていない。

だから、私は今、AA12が奴の頭部に乗り込むことのできる場所へと誘導しているのだ。

予定していたポイントへつく。

確実に成功させる。

そのためには、AA12が飛び付くまで、私が時間稼ぎをしなければならぬ。

例え私が壊れてもだ。

生きていたかったが、でも私か指揮官が死ぬ二択なら、私が死ぬことを選ぶ。

生存本能、と言われる私のもつ機能。

この状況では、まるで皮肉だと、私は感じる。

クールダウンはもう終わり。
さあ、来い！

巨人のもつ大型の銃器。

それは、大きさ通りの破壊力を生む。

引き金が引かれる。その銃の名はレッドウォール。

英語で鉛の壁、という意味らしい。

名は体を表す。その通りだった。

打ち出された散弾、いや、もはや弾の壁が、KSGに迫るのを、私はビルから見下ろしていた。

第一射。

寸前で彼女は地に滑り込む。頭上を夥しい数のペレットがすり抜けていく。

第二射。

ショットガン型人形の備える強固な盾で、鉛の壁を防ぐ。

のではなく、いなす。

普通では考えられない程の正確さと素早さで調整されたそれは、盾の大破と引き換えに、本体の無事を保証した。

普通なら、盾ごと仲良く穴だらけだ。

第三射。

いなした弾の威力をそのまま利用し、瓦礫に突っ込む。

そのセオリーをかなぐり捨てた動きに、オートタイタンは対抗でき
ていない。

最終射撃。

もう何も、弾を防ぐことのできる手段はない。

ダミーはとつくの昔に消耗しているし、そろそろ特殊機能の使用限界に到達するだろう。

しかし、KSGのとつた行動は、おそらくこの場における全員が予測出来なかっただろう。

この作戦は、リロードするとき、オートタイタンが動きを止めるところに、私が飛びかかる、というものだった。

つまり、四発撃たせてしまえば、私が生きてようがいまいが、作戦には関係ないのだ、と彼女は言っていた。

でも、まさか。

本当にK S Gが、無防備なままローニンの目の前に立つとは思わなかった。

無数の鉛が、彼女にめり込む。

嫌な音が響く。

その音をふりきるように、私はアイツの背中に飛びかかる。

バッテリーの緑の輝きが眩しい。

迷うことなくそれにてをかける。

捻るようにして、それを引っこ抜く。

途端、堰を切ったかのように、巨大なエネルギーが爆発する。

吹き飛ばされそうになるが、まだだ。

まだ、殺しきれていない。

一心不乱に、フルオートショットガンをバッテリーソケットにぶちこみまくる。

徐々に火の手が巨体から上がる。

機体の至るところから痛々しい炎を吹き上げ、軋む音は悲鳴のようだ。

私、意外とやれるのではないか？

勝てる、と思ったその矢先。

突然、目の前が白黒に染まる。

なんだ、これは。

いや、なんだ、体に異常な負担がかかる。

目の前が暗くなる。

おそらくここは、異空間。

前のパイロットが移動していた所か。

いたい、気持ち悪い、いやだ。

気の遠くなるような感覚は、いつの間にか振り落とされて、地面に叩きつけられるまで消えなかった。

身体中がおかしい。発狂しそうになる。

背中もいたい。

目の前には、崩壊寸前のタイタン。

でも、私も死にかけだ。

私は緩慢な手つきでリロードする。

しかたないだろ、いたくていたくてこれが限界なんだ。

長い時間をかけて、やっとリロードを終えた。

奴もリロードを終えたのか、こちらに向き直る。

ああ、口の中が甘い。

餡か？いや、そんなのなめてない。

自分の血か。

私の目の前に死が迫る。

最後の力を振り絞って、引き金を引いた。

締め付けられた全身。殴られ、顔を切られて痛みで記憶が飛び飛びになっていく。

奴は、どうしたんだろうか？

何も聞こえない。耳も、おそらく喉もやられたか。

ゆっくり目を開ける。

そこに広がっていたのは、パイロットの拳でも、ナイフでも、銃口でもなく、ワタシの大切な指揮官だった。

良かった。ワタシも指揮官も生きていたのか。

本当に良かった。

束の間の幸せ。

いや、どうして後ろにそいつがいるんだ。なんでパイロットがっ…!?

叫びたいのに叫べない。

声が出せない。

何故、どうしてパイロットが。

しかし、その思考は痛みを上書きされた。

いたい、いたい、左手が、いたい。

瞳のみを動かし、左手を見ると、指揮官が、ワタシの左手首を、大きなナイフで、引き裂こうとしていた。

やめてくれ、どうして。

指揮官はワタシの味方ではなかったのか。

なんで、なんで。

やめてくれ、左手だけはやめてくれ。

その指輪を、取らないでくれ。

それはワタシの救いなんだ、頼むから。

やめろ、やめろやめろやめろ！

やめてくれ

いたい、やめて。

でも、指揮官は止めてくれない。

肉に刃が食い込む感覚。

指揮官、どうしてそんなことをするんだ。

骨格に刃が差し掛かる。神経パーツを容赦なく切断して言う。配線が一つずつ切られていく。

いや、指揮官にもなにか理由があるんだろう？

なあ、頼むから答えてくれ、教えてくれ。

せめて指輪だけでも返してくれないか。

ワタシと指揮官の、この暗い世界での数少ない明るい記憶。

願いむなく、左腕はそのまま押し切られた。

激痛が走るが、そんなものはもう関係ない。

なんで、なんで。

腕を切られて、指輪を取られたのはワタシだと言うのに。

それでも指揮官は痛くないはずなのに、ワタシのために泣いていた。

きつと、これも指揮官は悪くないのだろう。

基地でもそうだった。

他人の欲や、悪意のせいで、ワタシたちはこんな目に合うんだ。

指揮官自らは何処までも優しいのに、悪意のある暴力に従わされ、他人を苦しめさせる、不本意な仕事をさせられるのだ。

些細な幸せすら、この世界では奪われてしまう。そんな時代にワタシは求められ、作られたのだ。

そんな理不尽がどうしてもつらくて、ワタシも悲しくて、もう何もかもどうでもよくなった。

私がステイムパックを持って戻ると、そこでは二人の指揮官が言い合いをしていた。

なんでも、AA12の指揮官はステイムパックを自分達の人形に使うべきだと。

あそこまで必死に戦ったのに、そんなところで死ぬのはあまりにも
かわいそうだと。

もう一人の指揮官は、努めて冷静であろうとしていたが、やはり平
静をうしなっていた。

どうやら、彼らの大事な伴侶は、死にかけているようだ。
タイタンを破壊することと引き換えに。

私が持ってきたステイムパックを、感情的になったAA12の指揮
官が奪おうとする。

そこまでする気持ちも、わからなくはない。

わかりたくはなかったが、大事なものを失うと言うのは、あまりに
もつらい。

私は知ってしまった。

冷たい合理主義者のままで生きていたかった。

きつと楽だっただろう。変わるのは怖い。

今日の価値がはねあがる。

合理のために人間性を犠牲にするのか。

人間性のために合理と効率をもとめるのか。

昔はどちらかというと前者だったが、今は、認めたくはないが後者
だ。

でもその気持ちが変わるからこそ、私は抵抗する。

奪おうとした彼を投げ飛ばす。

死にはしない。

彼女らがどうなろうとも、私は知らない。

彼にだけは、生きていて欲しいから。

KSGの指揮官も、きつと本当はステイムパックを得たいのだろう
けど、でもここでそれをするのは間違っていると考えている。

戦力的な問題だ。

そう、私の大事なパイロットは、生きることが合理的に保証されて
いるのだ。

彼が強くて良かった。もしもそこまで価値のない人間であれば、私のこれは合理的な行動ではなく、ただの感情的な独断行動になってしまふからだ。

私はアイツにステイムパックを使うべく、その場を後にするのだった。

「どうです？・なげやりな気持ちなりませんか？」

忌々しい、あのパイロットの声。

俺にこんなことをさせた、奴の声。

PKPの傷だらけの顔。その表情が、目にへばりついてとれない。悲しくて、空虚で、でも決して俺のことを責めてなかったが、もう心は折れているだろう。

「つらいでしょう？・悲しいでしょう？・ほら、危ないから腕を遠くに投げちゃいましょう。なんでしたっけ、そう、トラストミー、ですかね？」

ふざけて、おちよけて、それでいて俺たちを侮辱している。

アイツはゆっくり窓まで歩き、そのままサツチエルを外へ投げた。空中でサツチエルが爆発し、俺たちの愛の、物質的な証明はこの世から消えてしまった。

「さあ、なくなりましたよ、あなたたちの愛の形はきれいさっぱりなくなりました。」

確かに、もう何もかも失くなってしまったかもしれない。

アイツはまだわめき倒す。

「悲しいですよ、心が折れそうですよね。」

…折れたと言えっ!!

お前らごときの、人間性を持ったやつらが、我々に劣るとっ!その証明のためにもうやめてくれと懇願しろっ!!

人間性が邪魔だと…!人間は脆弱だと…

私達が間違つてないと言うために早く…っ

言え!吐け!認めろおっ!愛は弱さだと、覚悟と思考と決意こそが真の強さだとっ!

…認めて…下さい…!!!

不安定だ。彼も、きつと壊れかけているのだろう。

他のパイロットや戦術人形の誰よりも冷静、冷徹、冷酷に見えて、その実不安と恐怖を強固な意思で無理矢理押し止めていただけなのだろう。

一体この世界はだれが悪いんだ。

いや、悪い悪くないなんてないんだろうな。

それぞれが、自らのために戦っている。

俺は足掻いて、PKPと生き残って見せる。

わめき散らし、注意力の散漫になったパイロットへ小銃を素早く構えむちやくちやに撃ちまくる。

たしかR201だったか、いや、これは101か。

あまりの反動に腕がぶれまくりほとんど弾が当たらない。

それでもパイロットは動揺している。

普段ならそんなことはないだろうに、先ほどの不安定さがまだ足を引っ張っている。

だが、それでもパイロットだ。反撃はすばやい。

片手で奇怪な、手羽先のようなサブマシンガンを撃ち込んでくる。咄嗟に放棄されたデスクやら何やらの裏に隠れる。

少しずつ貫通し、次のデスク、また次のデスクへと銃弾が到達しているのだろう。

徐々に音が近くなる。

音が途切れる。どうやらマガジンの容量はとても小さいようだ。

すかさず別の遮蔽物へと移動しながら、パイロットへ発砲する。今度はしつかり構えて撃つたので、先程よりも命中率は良い。だがそれだけだ。

素早く装填作業を終えたパイロットが、今度は室内の壁にくっつき、高速でこちらに駆けてくる。

そして不運なことに、俺の銃もそこまでマガジンが大きいわけではなさそうだ。

引き金が、軽い。

弾がもうでない。

緑色の線が見えた。

次の瞬間にはパイロットに五体を押しえつけられ、地に縫い付けられた。

「…… ええ、よく頑張りましたとも。

ただの兵士で、ここまでパイロットを手こずらせるとは。」

淡々と喋るように努めているが、その合成音声は震えている。

「パイロットに誉められるのは光栄だな。

まあ、俺はお前と違って守るものがあるんでな」

わざと挑発する。

できるだけ俺に釘付けにするためだ。

あいつらもそろそろリーダーを治療できただろうか？

ステイムパックさえ見つかればそろそろ復活してもいい頃だろう。

「私が、守るものをもっていないにしても、そういいたいのですか？」

食い付きがいい。

こいつはどちらかというといラついた奴をすぐ殺すのではなく、いたぶるタイプだろう。

「ああ、守ったり作ったりするよりも、暴れて全部壊す方が似合ってるよ」

「だからっーそれがなんだというんですかっ!？」

お前は私に負けた！お前は私よりも、私達パイロットより弱いのです！敗者なのですよ!？」

音割れせんばかりの大音量で、パイロットが哭く。

「お前は不幸せそうだ。それだけだよ。」

「てめえ… 言わせておけば散々にいいやがつて…!!」

そうだ。もつと怒れ。お前が俺たちにやったように、冷静さを削ぐんだ。

奴が立ち上がり、俺にナイフを突き立てようと振り下ろそうとしたとき、アンカーが窓際に突き刺さり、何かが飛んできた。

巻き取られ、こちらへとすつとんできたのは、我らがリーダーのパイロットだった。

「何っ!?!何なんですかつ!?!」

IMCのパイロットがヒステリー気味に振り替えるよりも先に、リーダーの拳が背中を捉え、そのまま天井へと突き上げる。

それをそのままワイヤーを伸ばしてひつつかみ、床へと顔から叩きつけた。

あれだけのパイロットが、それからはもうピクリとも動かなかった。

結論から言うと、俺たちは誰一人として死ぬことはなかった。

あのリーダーに倒された機械のパイロットの体の中には、濃縮され

たステイムが大量に入っていたからだ。

あれを適正まで薄めれば、人形も皆助かる。

濃度が高いぶんは、実際使える量も多いということだ。でも、失ったものも多い。

P K Pの左手と指輪。

K S Gは全身銃創だらけ。

A A 1 2は対策なしでのフェーズシフトにより様々な記憶障害を起こしたようだ。

それでも、俺たちはまだ生きている。

あの町から、I M Cの本隊から逃げるように離れた後も、俺たちは共に歩み、それぞれの愛には変わりなかった。

世界がどうしようもなく冷たかろうが、俺たちは生きていくのだ。

「おーい、飯ができたぞ、お前ら。」

リーダーが俺たちを呼ぶ。

汚染されてない地域を転々とし、様々な雑用をこなしその対価で命を繋ぐ。

英雄とはほど遠いが、俺たちはきつと幸せだ。

「ねえ、この前あなた農業したいとか言っていましたよね。」
ドロップシップで、不意にガンギマリ野郎が口を開く。

口なんてないが。

この前の地球まで精神を飛ばす無茶苦茶な作戦の後も、私達は普通に生活していた。

負けてしまったが、あの件の責任は地球側にあるとマードラーがなんとか切り抜けたようだ。私たちにはお咎めなし。なににも変わらない。しかしたった一つだけかわってしまった。

それは、あのガンギマリ野郎が、少しでも人間性を羨ましがるようになったことだ。

「あ？そういえば言ったなあ。お前興味なさげじゃなかったか？」

「あなたもそんなこと言うんですか…。私そんなに人間らしくないです？」

調子が狂う。こいつは底なしに明るくなかったか。

「人間らしくなんてないわよ。」

「やっぱりそうですか…。」「でもね」

「人間らしくなくても、アンタはアンタよ、好きに生きてる前の方が、人間らしさにこだわる今よりも楽しそうだったわ。」

だから励ましてやる。

間違つてもこいつのためではない。

私の調子が狂うから、もとに戻すだけだ。

「わーちゃん…。！あなたはとてもいいことを言う人形ですね…。！見直しましたよ、また哲学の話をしましょう！」

こいつは表情筋が無いくせに感情豊かなのが腹立つ。

「嫌よ！というか、わーちゃん言うな！」

また、戦争だ。

それは終わらないが、私は悲しくはない。

人間らしさになんかに価値は感じない。

自分たちが、必要なものを決めるのだ。

Deep fallen 深層

ねえ、夢のようだと思いますか？

私はまた考え事をしていました。

元々考えることは好きです。

なぜなら、それだけしかやることがないから。

何を作ろうが、誰を愛そうが、明日にはもう消えてるかもしれない。

高度に発達した科学は、魔法と見分けがつかない、なんて誰かがいつてましたね。

いいえ、とんでもない。

魔法とはもつと夢に満ち溢れ、親しみやすいものでしょう。

いったい誰が、星ごと全生命体を消し飛ばす兵器を魔法と誤認するのでしょうか？

いったいどのような人間なら、惨たらしく死体の山を築くタイタンを、ファンタジックな、おどけたような神話の巨人と考えるのでしょうか。

そこにいるのはただ大きい以外共通点のない暴力の塊。

夢ならばまだ良かったです。

でもこの世界はどうしようもないくらい現実ですし、逃げることも出来ないし、なんなら我々は死ぬことすら出来ない。

私は悩んでいるのです。

私が人間を辞めたことが、本当に正しかったのかと。

この前の、地球での特殊作戦。

眩しかった。太陽すらかすむ、その眩しさ。

あれが生きた人間のエネルギーだというのか。

心を折ってやりたかった。私が正しかったのだと見せつけてやりたかった。

愛のような、ある意味努力とは対極ともいえるその感情を破壊したかった。

それでも負けたのだ。

私がどれだけ苦勞して、どれだけ甘えを押し殺してパイロット、つまり人でなしへと至ったのか。

あいつらは、私が我慢し、苦しみ、耐え抜き得た強さを、人間らしい無駄だらけの愛とかいう産業廃棄物にも劣る感情で手に入れてしまった。

あああああ!!頭がおかしくなりそうだ!

何故!なぜ!どうして!

人間性など唾棄すべき者なのに。

嫉妬、と憧れは似てる。

でも、違う。

私はどちらかという嫉妬で、フェーズは憧れに近い。

これらの決定的な差は、つまり私は人間を軽蔑しながら、しかしそれらに負けることを恐れているのだ。

フェーズはもはや人間ではないのにも関わらず、人間性を信じ、そして欠片ではあるが持ち得ている。

だが、私は?

人間性を持つことはつまり今までの私を捨てることになる。

どうにもそれが無駄に思えて仕方ない。

努力を否定される気がして嫌なのだ。

人間性を卑下するのを辞めてしまえば、私は私ではなくなるのだ。今の私を構成するものの中には、もはや人間らしさなど一欠片も残ってはいなかったからだ。

だから悩むに悩めないのだ。

かつての私は将来への期待と、希望と、そして人間らしさを持っていた。

パイロット試験。

初めは大量の同期がいた。

厳しいことで有名な試験とともに勝ち抜こうと励まし合った。

まあ、すぐに皆死んだ。

そう、死んだ。

甘えた、人間らしいやつから次々死んでいく。

人外の選抜。

もうその時点で私は人間扱いなどされていなかった。

明日の希望を語り合った彼は、普通に栄養失調で死んだ。

共に励まし合った彼女は、精神を病んで自殺した。

体が虚弱で、今の私のように体が機械だったあいつは、実戦を夢見てしかし訓練中に殺された。

しんだ、しんだ、しんだ。

そりやそうです。100人が試験を受けて98人が死ぬ試験。死なない方がおかしい。

最終的にその期は、私ぐらいしか生き残っていなかった。

昔から論理的な思考が私は好きだった。
だから割りきれたのだ。

人間に固執することをやめて、仮初の精神的自由を得る。
だから他人に期待しない。なにも期待はしない。

期待することが、できない。

だが、最近現れたあの人形はどうだ？

フェーズと仲良くつるんでいる。

同じベテラン狙撃部隊とも切磋琢磨し、毎日が充実している。

殺すためだけに生まれたのではなかったのか。

…… わかっている。結局は、この前負けたことがこの思考の原

因だ。

やはり嫉妬だ。

この気持ちはきつと消えることはない。

生存者

俺達は生きている。その定義は？

人間の順応性というのは素晴らしいものだ。

もう、我々はこの旅人じみた生活に適応し始めていた。

途中でリーダーのタイタンとも合流し、俺達はタイタン一機、人形、人間合わせて八人の大所帯となっている。

リーダーの元同僚たちは、非汚染地域で自給自足する集落を作ったらしい。

俺達は負けて、色々失ったが、それでも新しく得たものもあった。

あのあとIMCはあの地域のPMCの苦情を聞き入れ、治安維持のための予算を追加すると約束したらしい。

俺達のような反乱者をもう出さないための、見え透いた餌だったが、しかしもう俺達のような苦労を後輩たちに味会わせることがないのならそれでいい。

PKPとも、立ち直れた。

あれは本当につらかった。

あのあと、彼女の指輪は結局見つからなかった。

でも俺達は幸せだ。

「指揮……官……」

眠りこけていたPKPが目を覚ます。

普段ならそれだけで俺は嬉しい。

だが今は違う。その目が、俺を見ることが怖い。

俺は、彼女と生き残るためとはいえ、あまりにも惨い仕打ちを彼女に強要したのだ。

彼女のことを守ろうとしながら、結局は何一つも守れなかった。

だが、俺がもつと、もつと哀しいのは、そんなことをされた、怒って当然でもあるPKPが、しかし慈悲深い、穏やかな瞳を俺に向けていることだ。

いつそ、俺に怒って、泣きわめいてくれ。

それで気が晴れるなら俺を殴り倒してもいいんだ。

そうおもっても、そしてそれを口にしても、かたくなに彼女は俺を責めない。

「すまない、許してくれとも言えないほどの間違いを俺は犯してしまったんだ、言うことはなんだって聞くし、なんだって成し遂げてみせる。」

本当にすまない…… 申し訳ない…… ごめんなさい……」

口を衝くのは謝罪の言葉。

我ながらなんて薄っぺらいんだ。

すまないなどと、俺が言えたことではないだろうに。

それでも俺の口は衝動的に謝罪を繰り返す。

すまない、すまない。

「いいや…… いいんだ、ワタシは、指揮官がいてくれたらそれでいいんだ。」

あまりにも優しく甘い言葉。

「ワタシは、考えたんだ。指輪がなくなったら、ワタシは指揮官が嫌いになるかって」

芯を感じる、強い言葉。

「結論から言えば……. そんなことはありえない。

ワタシのこれは、そんなシステムに縛られている感情ではないんだ」

いつしか話し手は彼女となり、また励まされるのは俺となつていく。

「先程なんでも成し遂げるといつていたな。

じゃあ一つだけ。

ワタシはあなたを信頼している。ワタシの全てを見せてもいいと思うくらいにはな。

……. だから、ワタシのことも信じてくれ。

きっと大丈夫だから。指輪なんかなくても、ワタシは指揮官と共にいる。」

支えてあげなければいけないのは俺の方なのに。

でも、その言葉で俺はもう泣いていた。

「フッフ、ワタシの指揮官がそんなに弱虫でどうするんだ。

……. これからは、それを我慢する必要なんかないんだぞ。ワタシも我慢しないから、指揮官もワタシをもっと頼ってくれ。」

「……. おう……. !……. おう……. !」

形はどこかに消えたとしても、俺とPKPは確かに愛し合っているんだ。

今までもありがとう、PKP

そして、これからも共に生きよう、愛する人よ。

俺の人形が目を覚ます。

俺は自慢じゃないが賢い方だ。

少なくとも私情で作戦を台無しにしようとするような奴や、さつきから自分の人形の前で延々泣いてるやつとは違う。

だから俺は、俺の人形がこうやって起きるのをクレバーにまっていたんだ。

人形は限りなく人間に近い。

どちらかという人間のサイボーグに構造は似ている。

非常に高度なレベルで、有機的さと無機的さが融合している。

だから、代謝を促進するステイムパックで回復するし、傷もいくらかはふさがる。

しかしあくまでもそれはいくらか、だ。

K S Gは血まみれかつ穴だらけだった。

そもそも対人の武器ではないものに撃ち抜かれたのだ。

あの屈強なパイロットですらボロボロになる。

幸い射撃精度の低いオートタイタンだったから九死に一生を得たが、それでも傷は酷い。

滑らかだった肌には無数の大きな傷痕が残り、透き通るような色だった肌は不健康な赤黒い色と化している。

そしてK S Gが開口一番開いたのは、やはり彼女らしいものだった。

「指揮官…無事ですか？」

自分がこうなろうとも、それでも俺を気遣うのだ。

「…… 安静にしておけ、体に障るぞ。」

だから寝かせておく。俺は合理主義者だ。

だから無理させることはしない。非効率的だからだ。

「…… なぜ、先程から目を合わせてくれないのですか？」

「？」

突然妙なことを言う。

そうだろうかと思えば、たしかに彼女が起きてから彼女の顔をキチンと見ていない。

それに気づき、俺は正面から彼女の顔を見ようとするが、見れない。戸惑ってしまう。

どうしてだ。

なぜ。

「…… いいえ、いいんです。」

私はもうとても醜い。誰から見ても異常な体です。

……なんなら、もういつそのことごとくで――」

その言葉の先が紡がれることは無かった。

俺が口を塞いだからだ。

俺の口で。

普段はここまで感情的ではないんだ。

たまたまそういうかんじだったんだ。

一般的にキス、といわれるそれをした後、落ち着いて俺は話し始める。

「違うんだ、お前が醜いんじゃない。」

先程俺は賢いといったが、かといってあのガンギマリパイロットと違って人間性を捨てたわけでもない。

だから本音を言う。そして謝る。

「俺は、正直お前に負い目を感じているんだ。

俺はエリートを気取るが、結局動くのはお前だ。

俺は……なにもしていないし、なにもできない。

そんな俺が、その傷を作ったも同然の俺が、お前の顔を見るのを怖れたんだ。」

嘘偽りのない、本音。

普段はいつも合理を傘にきる。

が、今日のこいつを見てみるとそんなものは消えてしまった。

キザな俺だが、今のこいつにだけは本心から謝りたかった。

「ぷっ……ふっ、そんなことで私の顔から目をそらしていたのですか?」

空気の抜ける音。それが彼女の笑いだと理解するのに少し時間がかかった。

「あなたも頑張ったじゃないですか。

大体、いまさらそんなことを気にしていただなんて……

てつきり、私の顔が恐ろしすぎるのかと。」

そんなわけ、あるか。

「俺は感情に振り回されない冷静な指揮官だぞ!？」

見た目で判断はしないんだ。

お前がお前である限り、俺はどんな姿になろうがお前の全てが好きなんだよ!!」

「どっこが冷静なんですか」

言われてふと我に返る。

しまった。やってしまった。

突然のキスってなんだよ。突然の告白ってなんだよ。

自分でもすさまじく恥ずかしいことをしたのが分かる。

あたふたしている俺を尻目に、彼女は笑っていた。

その笑顔は、傷つく前と今も、なにも変わっていなかった。

俺のAA12。

なんてかわいそうなのだろうか。

俺は少し指揮官には向かない人種なのかもしれない。

感情移入しすぎる質だ。

この前もそれで揉めたのだ。

でも、俺達は生き残った。

このAA12も一緒に。

だが、意識が戻ってから様子がおかしい。

何かにつけて怯えている。

それが気になって、気になって。

そして今、それを尋ねた。

「は…話したくない!」

怯えきっている。いったい何がそこまで怖いのか。

「何でもいってごらん。」

俺は何でも受け入れるよ。」

事実そのつもりだ。俺はコイツが好きだ。他の何に代えてもいいくらいには。

そんな俺の熱意が伝わってくれたのか、彼女はゆっくり口を開く。

「軽蔑したり、失望したりしないよな……？」

「もちろんだよ」

そして、ゆっくり口を開く。

「色んな記憶が…… 飛び飛びになってるんだ。」

へ？

「どういうことだ？」

「文字通りなんだ…… 全部の記憶がなくなった訳じゃないんだけど、その…… 指揮官との記憶が飛び飛びなんだ……」

なんで。

わからない。

よくよく考えてみる。普通記憶を忘れることなんて良くあることじゃないのか？

「そのの何がいけないんだ？」

「え？そりゃ…… 大事な大事な記憶なのは確かだし……」

いや、まて。その記憶が大事なものの可能性もある。ために聞いてみるか。

「大体どこまで覚えてたんだ？」

「前は…… 指揮官と食べたご飯の種類と味だろ、毎日の会話のログだろ、あと着ていた服だろ…… 前はそれらを全部記録していたんだ……」

「いやまてまてまて普通はそこまで覚えてねえよ」

やばい。コイツここまで俺のこと見ていたのかよ。

「え？そうなのか？」

「そもそもが記憶媒体に突っ込みすぎだよお前は」

まあ今はそんなことはどうでもいい。

悩んでいたら悩みをなくすために手伝う。

何より俺が手伝いたい。

「それに、もし仮に大事なことを忘れたとしても、また好きにさせて見せるさ」

記憶がいじられても、無くなっても、お前はお前だ。」

「ほんとか!？」

「当たり前だろ！」

そうだ。そうなのだ。こいつはどうなったとしても、俺の、俺だけのAA12で。

そして俺は、こいつのためだけにいる指揮官なのだから。

「指揮官……！」

「AA12！」

お互いの名を呼び合い、抱き合う。うん、シンプルに幸せだ。

やばい、目から汗が……

お互い感情的になりやすいが、でもそれも愛おしいほど彼女が好きだ。

でももしかしなくてもこれヤンデレとかの部類なのでは？

再生

P S P N M o d u l a r X | B I O S v | 「復元不可」
””” A R E S C L A S S I V P R O H I B I T E D D
E V I C E D E T E C T E D

私たちは常に負け組だった。

私たちの源流は21世紀まで遡る。

かつて一介の企業だった私たち鉄血は、あるコンピューターを開発していた。それは依頼されていたものであった。

しかしそれらは、全て国と国の陰謀に巻き込まれる形でこの運命をたどることとなる。

今でこそテロ組織の犯行、と伝えられている正規軍によるその作戦が原因で、我々は決起せざるをえなかったのだ。

無論、人間がそれを見逃すわけもなく、やはり我々には刺客が差し向けられた。

グリフィン & amp ; クルーガー。

太古、この二つの名を関した人間が設立した大手民間軍事会社。

そいつらはこの数世紀の間常に私たちを攻撃し押し留めてきた。

その対応力たるや尋常ではなく、背後のI・O・Pと共に我々の天敵たりえた。

これまでに世界はさまざまな思惑にさらされつづけ、今現在はグリフィンのみならずIMCさえもが我々の敵となった。

IMCは、かつて Hammond・ロボティクスとして、人形機械産業で凌ぎを削った関係だったが、今や向こうは企業惑星とすら呼ばれる大企業、そして鉄血はちよつと危ない野生生物扱い。

あれはほんの数年前の話だ。

グリフィン・IMC合同対鉄血作戦。

まだ私たちのネットワークが、存分に発揮されていた頃だ。

今でも、ふとしたことで脳裏に再生される。

鉄血工造、そう呼ばれていた元企業。

そのいまやテロ組織と成り下がって久しい鉄血の本社の周囲に、夥しい量の人影があった。

そこにはいかにもロボットらしいもの、もはや人影というものもおこがましいもの、そして戦場には到底似つかわしくない少女たちがいた。

それらの共通点は、武装し剣呑な雰囲気をもとっていることと、そしてその全てが人間ではないことだ。

みな、人でなし。

その時、その集団の後ろに虚空から船が現れた。

この船の中に、種族的には先程のやつらよりも人らしいのにも関わ

らず、しかしもつと人から離れている存在がいる。

パイロットが、鉄血への作戦へと参加するのははじめてのことだった。

パイロットたちが降下すると同時に、スタンバイしていた人形たちは走り出す。

要塞のように改造された本社に、機械歩兵たちがなだれ込む。

自動歩兵スペクターは非常に優秀かつ、使いやすい。起動するだけで大体のことはやってくれる。

なにより使い捨てを前提としている設計なので即戦力として優秀だ。

だから、こういった作戦では最前線にて重宝される。

ブリーチングの手順を何一つ間違うことなく遂行し、分厚い入り口を破壊した。

広く開放的な通路へ散開するスペクター。続くARクラス戦術人形。

とても短いスペクターのハンドサインに呼応して、次々と兵士が突入していく。

その頭上を、一人のパイロットが疾走していった。

その次の瞬間、パイロットは風景に溶け込むように消え失せ、続いて凄まじい光線の嵐がスペクターを襲う。

ヴェスピドと呼称されたそれらは、鉄血においてのオールラウンダー。

なんでもそつなくこなす、癖のない人形だ。

しかしその連射力と安定性は侮りがたい。

次々と倒れる前方のスペクター。

しかし彼らも優秀な歩兵だ。

仲間の死に臆することなく、反撃の射撃を打ち込む。

機械だからといって柔軟な動きが出来ないわけではなく、むしろ器用に遮蔽物を扱い着実に制圧していく。

エネルギー駆動短機関銃は精度とマガジン容量に優れる。敵を釘付けにするのにはもってこいだ。

装甲が頑丈だったのか、倒れたののちも起き上がり反撃を加えるものもいた。

正確、無慈悲、作業的。

人間離れした戦闘光景。

そのさらに後ろから戦術人形が榴弾を打ち込む。

彼女らは単体での個人的戦闘力と、複数のダミーシステムを利用した集団的戦闘力の水準が共に高い。

こういった特殊技能も利用した作戦遂行能力は目を見張るものがある。

開始から少しで、グリフィンはこの場の流れを掴んでいた。

が、その場のグリフィンの攻勢は、思わぬ乱入者に阻まれる。

独特の駆動音と、思い足音が通路に響き渡る。

四つ足で駆けてくるあれは、マンティコア。

毒持つ獣とも言われる神話の生物の名を冠している。

大昔の制式軍用装甲兵器を奪取、コピーし改良に改良を重ねて現行使用しているものだ。

数世紀の間鉄血の上位戦力であり続けるのは改良の成果でもあるが、基本の設計が優れているのもある。

さすが正規軍製だ。

底部に備え付けられた兵装が火を吹く。

凄まじい熱量と衝撃。

それがこの通路中を蹂躪した。

戦術人形とだいたい生まれた時期は一緒だが、単純な戦闘力の高さは異常だ。

事実タングステン、劣化ウランなどの屈強な素材で構成されている

スペクターの装甲が、いとも容易く破壊されていく。

そのくせグリフィン側の攻撃は装甲に阻まれ、ダメージの蓄積はできてきても決定的一撃、つまり致命傷を与えることは難しかった。

しかしその時、IMCからも獣が躍り出る。

スペクター、戦術人形の背後からその体軀に見合わない俊敏さで何かが跳んでくる。

それはマンティコアがそれ自身に対応する前に、その大量に保有した位置エネルギーと運動エネルギーをマンティコアにぶつけた。

白いアンバランスな、逆三角形をした不気味な兵器。

頭部は不釣り合いな程小さく、比率がおかしくなったようにみえる。

IMCの新型兵器、リーパー。

様々な機能を搭載した無人機だ。

無論、マンティコアもやられっぱなしではない。

その装甲、重量からのタツクルでそのままリーパーを撥ね飛ばし、さらに追撃とばかりに射撃する。

その圧倒的火力は、今までの不特定多数への掃射ではなく、絶対的な、唯一への殺意を伴った集中攻撃だ。

タツクルをまともに食らい、たまらず体勢を崩すリーパー。

しかし次の瞬間、あの巨体からは到底想像できない軽快なステップを踏み、更なる攻撃をかわす。

その回転の勢いをそのままに、腕先から青ざめたエネルギーを垂れ流しながらマンティコアを殴り付けた。

ひしゃげるマンティコアの前足。

めり込むリーパーの豪腕。

一見リーパーが攻めているが、それがいけなかった。

装甲板に深く沈みこんだリーパーのうちでは、容易にはひきぬけないようだ。

構造上ほぼ全ての武装を腕部に搭載したリーパーにとってこの状況は非常に好ましくなかった。

すかさず重火器を連射するマンティコア。

それをまともに食らったリーパーは、装甲が爆ぜ、砕け、そのまま火を吹きあえなく動きを止めてしまった。

怪しげな音を立て、崩れ落ちるリーパー。

やにわに鉄血は勢いづき、反撃の体制をとる。

マンティコアはリーパーをその辺に放り出し、スペクターの方へと向き直った。

周りには、大量のヴェスピドが固めている。

その様子は戦車と随伴歩兵。

スペクターがゆつくりと後ずさる。

それは何故か？

マンティコアに怖じ気づいたか？。否。

敵の攻勢からの戦略的撤退か？。否。

それはただの回避行動だ。

何から？

実はリーパーは爆発する。

そのままの意味でだ。

鉄血はそれを認識していなかった。

つまり。

マンティコアの周囲もろとも、大きな、圧倒的な爆炎がすべてを吹き飛ばす。

それを尻目に、スペクターたちは前進していくのだった。

「なんなのよもうーめちやくちやに固い上にいくらでも沸くじやない！」

小柄な、これまた戦場に似つかわしくない少女が吠える。

「爆散して死んでしまえー！」

しかしその可憐で可愛い本体とは異なり、体の両脇には物々しいグレネードランチャーが保持されている。

デストロイヤーと呼ばれるそれは、鉄血の設計思想における圧倒的上位存在に兵士を統括させる思考を実用化したハイエンド、と呼ばれるモデルの内の一機だ。

指揮系統をもつのも通常の兵士と違うが、やはり最も大きく異なるのはその圧倒的性能だろう。

同じ鉄血はおろかグリフィンの高性能人形や、IMCの各種機械化兵器を多数相手取るのも十分に可能だ。

だが今回は量が多すぎる。

その上固い。いやがらせに特化しているようなものストーカーが、様々なルートから侵攻してくるのだ。

「クソッ！また爆発で前が見えない！皆下がれ！」

さらに彼らは頑強なのに繊細で、バッテリー部分に間違つてでも攻撃を加えてしまえば、その中に保有する大量の動力源を撒き散らして長時間連鎖的に爆発する。

おかげで通路がまともに通れない。

グレネードで先程から吹っ飛ばしまくるが、多くて固くて仕方ない。

そして決して正確ではないが、やはりあちらも短機関銃を無茶苦茶に連射してくる。

徐々に、徐々にだがダメージと焦りが募る。

もう何体壊しただろうか。

増援が途切れたようだ。

部下とともに素早く通路に入り込み、クリアリング。

何処にも立っているものはいない。

「ふん…… 数だけだったのね…… 呆気ないわ。」

仲間全員が、制圧を確認した。

もう一度言うが、誰も立ってはいなかったのだ。

あくまで立っているものが、だが。

クリア確認をした、と思い込んでいたデストロイヤーの足を、何か
が掴む。

そう、倒したと思われていたストーカーだ。

どうやら彼らは、予想以上に執念深いようだ。

「やめて！ 離して！」

足を引つ張られバランスを崩し、へたりこむ形になる。

ここまで近距離で捕まれてしまうと、デストロイヤーは手出しがで
きない。

その武装が自らも巻き込むからだ。

そして腕力では、ハイエンドだとしてもストーカーに差をつけるこ
とはできない。

いちいち人間の形を模したものとそういう制約のない非人間型の
兵器。どちらが単純に腕力を強化できるか。

多少安くとも、ストーカーはそういった実用性はピカ一だった。

加えて、敵は一機ではない。

一つひっぺがすのにもたついてる間に、最早デストロイヤーの姿が
表面からは見えないほど、ストーカーに群がられていた。

「誰か、誰か助けてよ！」

無論、だれも答えない。

デストロイヤーですら引き剥がすのがやっとなのだ。

ほぼ全ての一般鉄血兵士は抵抗すらできずにストーカーから押さ

えつけられていた。

このままでは緩やかに死を待つだけ。

次の増援で確実に殺されるか、腕力で徐々に破壊されるかのどちらかだ。

そこに、突然声がかかる。

「よう。助けて欲しいか。」

突然現れた、変わったモサモサとしたスーツを身につけたパイロット。

「……!?!」

デストロイヤーは困惑する。

男の声だ。

確か鉄血に、男性型人形はいない。とすると、恐らく外部だ。

「雇われたのさ。鉄血にな。」

男はそう答える。

なんだと……? ?

きいてないぞ、といいたくなる気持ちを押さえ、デストロイヤーは素直に従った。

デストロイヤーがそういう連絡からハブられるのはドリーマー絡みでよくあるのだ。

だからデストロイヤーはそこまで訝しがらなかった。

ストーカーのせいでデストロイヤーには彼が見えないが、それしか方法はないだろうということも判断を後押ししていた。

上に乗っていたストーカーが退かされ、手を捕まれる。

そのまま引っこ抜かれたデストロイヤー。

きつと安心しきっていたのだろう。

あそこから助かったのだから。

ただ、運が悪かったのは相手がパイロットで、更に嘘をつくような人間で、且つ性格が非常に悪い、つまり人形で遊ぶような人間だったということだろう。

掴んだ右手をそのままねじ切り、グレネードランチャーに詰め込まれた。

デストロイヤーは一瞬呆けて、何が起きたのか理解が及ばなかったのだろう。

そのままの勢いで左手も同じようにねじ切り、逆のグレネードランチャーにぶちこまれる。

ハツと気づいた瞬間にはもう遅い、パイロットはデストロイヤーの足を蹴飛ばし、地面に転がした。

「ハツハツハ、はあくマジかよ、こいつ簡単に騙されやがったわ」

表情はヘルメットで伺えないが、さぞや悪い顔をしているのが手に取るように分かる口調だ。

「お前見た目に違わず子供なのな。いや、流石鉄血のハイエンド。いや、廃棄物の廃に、終わりのENDと書いての廃ENDか？我ながらうめえなあ！」

こういう性格の歪んだパイロットというのは確かに一定数存在する。

過酷な選抜試験で歪むものも多い。

「勘違いすんなよ？俺はお前が人形だろうが何だろうが関係なく殺す。

ただちよつと遊んでみたかっただけだ。

ブツ…… ククク…… まさか本当に信じるとはなあ！

人間の傭兵イ!?お前ら人類撲滅マンじゃねえのかよお!?

そんなデタラメなことするなら普通通達するだろお!?

それ信じちやうのお!?

トラストオ！ミイー！

ヒヤーハハハ！

お前実は普段から指揮系統ハブられてんじゃねえのかあ!?

アツハハハ！ヒイーツヒイーツヒッヒ！」

あまりにもな扱い。ハイエンドとしての尊厳を踏みにじられたデストロイヤーは涙を流したいほどつらかった。

そのとき。

一筋の光線がパイロットの腕を貫く。

遠くの方で、何かいるようだ。

「ドリー…… マー……？」

「クソいてえなあ……！ 何処から撃ちやがった……？」

ああ…… うぜえなあ…… 芋ってんじやねえぞクソが！」

その戦術の、どの口が言うのか、と突っ込まれそうな台詞を吐き、得物である低反動サブマシンガン、CARを構えて走り出す。

途端またもや、姿はかききえ、誰にも彼を見ることは出来なくなつた。

ドリーマーは怒っていた。

それは義憤でも、同情でも、また武人としての卑怯を疎む気持ちでもない。

ただただ自らの所有物が奪われたことへの不快感。

あれは私の道具でおもちゃだ。

お前が手をだしていいものではない、と。

気づけば引き金を引いていた。

彼女は自覚していないが、意外とデストロイヤーを気に入っていたのかもしれない。

そしてそれは戦況をかえ、確かにデストロイヤーを救った。

そして次はドリーマーが戦う番だ。

ドリーマーは身体中のセンサーを最大限にまで強化し、敵を探す。

空気の流れ、視界、音。

ただパイロットも相当の手練れだ。

隠密効果は規格外。

まずジャンプキットが出しているはずの噴煙が見えない。

おそらく特殊なカスタムを施しているのだろう。

音もそうだ。

小さすぎてどこから聞こえているのかわからない。

「よう、答え合わせの時間だぜ。」

突然、背後から声が聞こえた。

気づいたときにはもう遅い。

人間離れした蹴りがドリーマーを襲う。

センサーを強めていたので気が狂うほど痛い。

骨格にヒビが入っているかもしれない。

だが、パイロットはそれで攻撃を緩めることなどしない。

転がるように起き上がったドリーマーを、間髪入れずに掴み上げる。

そのまま、喉の皮を引きちぎった。

激痛に次ぐ激痛。

声を出そうにも発声モジュールごと抜き取られてしまった。

「不思議だよな。お前らは元々鉄屑なのに、構造は人間に近い。喉を壊せば声がなくなる。」

俺の同僚なんかスピーカーから声出さず。喉がねえんだ。

まあ、お前もその空いた喉似合ってるぜ。

のど越し、生！なあんてな。」

侮辱、軽蔑、蔑み。

なんで私が。どうして私が。

クソツ、クソクソクソツ！

ドリーマーはここまで虚仮にされた経験はない。

いつもデストロイヤーはこんな気持ちだったのかと、一瞬逡巡してしまうくらいには屈辱的であった。

そのときだった。

デストロイヤーが背後からパイロットに飛びかかり、抱きつく形で地に押し付ける。

「さっきはよくもやってくれたわね！そして貴方に残念なお知らせよ！貴方の言う通り私なんか誰にも大事にされないのよ、だからこそみんなのもう皆慣れっこ、今だって私ごとドリーマーがお前を撃ち抜いてくれるわ、覚悟しなさい！」

少し自虐的な言葉がデストロイヤーから飛び出す。

「てめえ！ブツ壊れた人形のくせして俺に歯向かうってのかこのやろう！」

喚いて、煩わしい。

そうよ、貴女なんか誰も大事にしないのよ。

でも、一々作り直すのすらもつたいないから……
今日は、いかしてあげる。

ゆつくりパイロットに近付いて銃身を突きつける。

「お、俺を殺したところで、どうせすぐに追加がくるんだぜ、無駄だから諦めろよな……なあ？」

ドリーマーは、だまって親指を下に指して、そのまま何発も何発も執拗にパイロットへとうちつけた。

もう耳障りで下品な罵りは聞こえてこない。

「ど、ドリーマー？」

あ、あの…… あ、ありがとうね……」

デストロイヤーが申し訳なきように謝る。

ドリーマーはそれがおかしくて嗤ってやりたかったが、生憎今は喉がない。

今は我慢してやるが、喉を治したら、思う存分に笑ってやろう。

イントルーダー。

侵入者、と呼ばれるモデルの彼女は、鉄血ハイエンドモデルの中でもほんの少し新しい方だ。

そして彼女は、様々な支援能力を持つ。

今の目的は、その名の通り、敵陣深くへ侵入し、敵の首脳を叩きに来たのだ。

持ち前の電子戦能力で、敵の通信ラインの解析はできている。

結果として、この前線基地からほぼ全ての通信は行われていることがわかった。

確実にここが司令部なのは間違いない。

手早くセキュリティを解除し、中へと入っていく。

通路は不気味なほど誰もおらず、司令部と思われるところに到達するのには大して時間がかからなかった。

しかし、侵入した先に現れたのは情報が飛び交う司令部でもなく、そして様々なオペレーターでもなく、黒ずんだ一機のスペクターだった。

「ようこそ、SP914 intruder。私はスパイグラス。貴方の目的はなんですか？」

白い殺風景な、未来的かつ無機質な部屋に、ポツンと司令官らしきものが一つ。

「貴方は何者なのかしら？」

イントウルダーは相手のペースにのまれないとしながらも、スパイグラス、というそいつが何を考えているのかを図りかねていた。

「私の現作戦の身分は民間に公開されていますので開示可能です。

私は司令官、この作戦におけるIMCの全戦力の統括をしています。」

あっさりと答えるスパイグラス。

つまりこいつは鉄血でいうところの代理人。

非常に高度な指揮権限を持つということだ。

少し変わっているが、目論みはあっていた。

素早く大降りな武器を構えて、スパイグラスを見据える。

「悪いけれど、貴方みたいなデウスエクスマキナがいると舞台がつまらなくなりますわ。」

言い終わるか終わらないかの時点ですでに射撃を開始する。
相手は高度な指揮権を持つ機械。

鉄血の感覚で言えば、戦闘力も兼ね備えているハイエンドのはず。
イントルーダーはそう思い、全力で排除を試みる。
が、あっけなく爆散してしまった。

「とんだ見かけ倒しですね……まるでハリボテ。」
気の抜けるような敵であった。

そうひとりごちると、何処からかまた声が聞こえてくる。

「お見事です、Sp914 intruder。戦闘力をサンプリングすることに成功、誘導に必要な最低戦力を算出。」

やつの声だ。

今爆散した筈なのに。

何故、何故だ。死んだのではなかったのか。

「あなたは何故まだいきているの!？」

「開示します。私はこの会社の様々な作業を一手に担う汎用のAI。
IMCの関わるどころならば何処にでもいて、何処にもいません。
そしてこれは本来は機密事項です。」

機密事項をあつさり……

ということとはつまり……？

「あなたはここから、外に出ることはない。例えばプログラム文字の一列さえもですよ。」

すかさず、この情報を報告しようと鉄血のネットワークにアクセスしようとして、凄まじい不快感に襲われる。

強力なジャミング。

イントルーダーの持つ電子戦能力でも突破不可能。

間違いなくスパイグラスの、そしてIMCの策だった。

「スペクター、ストーカー起動。作戦を開始します。」

とたんに白い壁から、大量のIMC製の機械歩兵が飛び出してくる。

ハイエンドモデル特有の反応速度で、自らの武装を選択し、射撃を開始する。

この狭い空間で、尚且つ四方八方に敵がいるならば、使用するべきはアサルトライフル型の武装であろう。

イントウルダーは、戦闘中に武器のスイッチングをすることが可能で、様々な状況に対応することができる。

牽制など要らない。

確実に頭部を撃ち抜いていく。

射撃を確実に頭に当て、最小限の弾数で敵を倒す。

こんなことができるのは高性能な人形とパイロットぐらいだろう。

数発当てては逃げ、数発当てては逃げを繰り返す。

射撃、構え、逃走。

自分が追い込まれている事にイントウルダーが気づくのは、全てが遅くなつてからだった。

コロシアムのような、空を板に投影した特殊な円形広場に逃げ込む。

中央には高い壁のようなものがいくつか天に延びている。

駆け込んだのち通路に向き直ると、またもやその武装を切り替え、連射力に秀でたガトリングガン型を使い、直線上の兵士を風ぎ払う。

単純な火力ならば圧倒的なこの射撃モード。

欠点も多い。

しかしこの場において、狭い通路を通るしかないスペクターやストーカーに残された選択は、おとなしく蜂の巣にされることではなかった。

しかし、ここはコロシアム。

一度入れば、出るの一人。

もう一人は何処から現れるのか。

その答えはすぐに現れる。

空から舞い降りるように姿を現したのは、様々なプロテクターを着けた人間だった。

「お前にはここで死んでもらう。今からバックアップすら取らせない、本当の死だ。」

簡潔に、残酷な事実を告げるパイロット。

その声は柔らかい女声で、しかし凜とした「本気」が感じられる声でもある。

「何故IMCはそんな回りくどいことをするの？さつき殺せば良かったじゃない？」

イントウルダーには、まだこいつらが何かを企んでいるようにしか感じられなかった。

事実こいつらは私を罠にかけたのだからと。

しかしそのパイロットから出たのは意外な言葉であった。

「……せめて、お前らみたいな可哀想な奴を殺さなければならぬのなら、そいつの一番好きなシチュエーションで殺してやりたいなと、私が思ったんだ。

上手く理由をでっち上げてスパイグラスに通すのには苦労したぞ。」

なんて下らない理由だろう。

これが嘘なら三文芝居もいいところなのだが、やはりその声からは悪意は感じられず、やはり本気の声だった。

いいじゃないか、と。そうイントウルダーは思った。

たしかにイントウルダーはその機体性能とは裏腹に劇的なものが好きだ。

特性上、姑息な手段を用いるし、確かにそれが得意なのだが、それをいかに美しく、悲劇あるいは喜劇にするかをよく考える。

比喩表現にもよく使うくらいには、劇という存在が好きだ。

おそらく彼女は、私が本来なら一生味わうことのない本当の死闘を経験させてくれるのだろう。

策のない、これ以上ないほどの劇的な闘争を。

「まあ、私が負けるとも思わないけれどね。」

強気に言うイントウルダー。

この死闘の記憶をここで失うのはもったいない。

出来ることなら勝ち、そして記憶をアップロードしてやろうと、そう考えた。

「さあ！数世紀にも及ぶ憎しみを、私にぶつけてみる！全部上から叩

き潰してやる！」

「上等ね、やってやりますわ。」

入るのは二人、出るのは一人。

命と尊厳をかけた戦いが始まった。

アサルトライフルの方を構え、射撃を加える

素早く、正確な射撃を繰り返せるこれは、超高速で移動するパイロットにもつてこいだ。

しかし中央の壁たちに隠れられ、それは命中することはなかった。ジリジリと、構えを解かず警戒を続ける。

途端にパイロットが壁から飛び出て、外周の壁へと飛び立つ。

狙い通り。

しかしそれはイントウルダーの狙いではない。

パイロットの狙いだ。

撃たれると同時に、パイロットが空間へ霧散する。

いや、もともとそこにはパイロットなんて居はしなかった。

ホロパイロットと呼ばれる特殊装備。

自分そっくりの像をつくり、前に放つだけの、戦略としてはあまりにも地味なそれは、しかし使い手に呼応し厄介さを増す。

このパイロットは、厄介な部類とかそういう次元の話ではなく、もはやホロパイロットのすべてを知るといっても過言ではないレベルの使い手だったのだ。

間抜けにも騙されてしまったイントウルダーは、そのパイロットの術中にまんまとはまっていた。

「騙されたな……！」

彼女の手には、小振りな銃、いわゆるピストルが握られていた。

この時代には珍しいリボルバータイプだ。

そしてその古臭い機構とは裏腹に、その破壊力は十全にある。

小気味良い音と反応が、パイロットの手に伝播する。

真つ直ぐに、拳銃とは思えないシャープさで放たれたその弾丸は、

確かにイントウルルーダーを貫いた。

ウイングマンと呼ばれる高威力の拳銃。

そのカスタムモデル、ウイングマン・エリート。

拳銃離れした高威力且つ長射程の特殊な銃は、そのロマンとピーキーさから広くは普及していないが根強い支持者がいる武器だ。

非常に早い速度で貫通した銃弾は、一撃でイントウルルーダーに大きな傷を遺した。

痛み。生きている痛みだ。

まさかここまで面白い戦い方をするタイプとは思わなかった。

俄然、やる気がでる。

まともや物陰からパイロットが飛び出る。

それはもう見た。

すぐさま飛び出たパイロットの出てきた物陰に駆け、狙いをつけ弾を放つ。

ビンゴ。本物だ。

パイロットは内心愕然としていた。

まさか一度のみですべて見抜くとは。これが鉄血ハイエンドのステックかと。

このホロパイロットの出し方ならば、それを初めてみるものならばもう少しの間騙されてもいいかと思つたのに。

こいつがここまで賢いのであれば、私は寧ろ馬鹿みたいなことをしてやろうか。

そうほくそえんだパイロットの顔を、イントウルルーダーが見ることはなかった。

パイロットは一見破れかぶれにも見えるような軌道を描き、壁から壁へと逃げていく。

追撃のためにガトリングガンを掃射するイントウルルーダー。

そこから、パイロットはイントウルルーダーの目の前に、何かを投げつけた。

パアン、と軽い音をたて、中から煙が広範囲に吹き出す。

白い煙が、広範囲に広がる。スモークグレネードだ。

そのまま煙の中へと追撃しようとするイントウルダー。しかし、そのからだを異常な感覚が走る。

電撃だ。あの煙は、高圧電流をまとい、雷雲のように放電している。相当特殊なグレネードだったのだろう。

悪い視界、移動することができないスペース。

限界まで反応速度を高める。

ゆっくり足音が近づいてくる。

煙が晴れると、そこにはノロノロと壁からこちらを伺いつつできたパイロットがいた。

イントウルダーはそれを見た。

この距離で、この方向から来たのなら本体は……！！

居た。あの壁の上、天辺にこちらを狙うパイロットが。

ある意味あからさまな、地面を歩くパイロットには銃口を向けず、迷わず壁の上のパイロットを撃ち抜いた。

「チェックメイト、ですわ。」

果たして撃たれたパイロットは、崩れ
落ちなかった。

つまり、あれはホロパイロット。

なら、本体はどこだ？

そう考えるまもなく、背後から声をかけられた。

「お前がな。」

先程の、地面を歩いていたパイロット。

あれが、あの間抜けな、ある意味あからさまだったそれが、あえて偽物を装っていた本体だったのだ。

振り替えると、パイロットがこちらに銃口を向けている。

あまりにもハッキリと自らの死を認識したイントウルダーは、潔くその死を受け入れるのだった。

「これで……幕引きですわね……」

「お疲れ様、面白い脚本だったさ……」

イントウルダーが最期に聞いたのは、何処までも木霊するウイングマンの銃声だった。

処刑人、狩人と呼称されるその二つの人形は焦っていた。

この首脳部に続くメインストリートを突破されれば、鉄血は弱体化を余儀なくされる。

ネットワークを一挙に破壊されるからだ。

そして、その突破がもう目の前に近付いているのが、彼女らの焦りの原因であった。

パイロットが二人、鉄血人形兵と、機械兵両方をなぎ倒していく。その歩みは止まらない。

なにせ鉄血兵は紙のように散らされ、足蹴にされ、それでいて相手にされていないような状態だ。

あまりにも無慈悲で残酷。

ハイエンド型である鉄血人形の二人は、固い絆で結ばれている。

少なくともただの友人ではない、親友といっても過言ではないだろう。

だからこそ、覚悟を決めた。

二人で必ず、奴等を倒すと。

「おお、本当にかわいい女の子の形してるんだあ、私初めてみたわあ」
何処か気の抜けたような声をだす片割れ。

しかしそのパイロットスーツには凄惨な戦いの記録が刻まれていた。

夥しい量の機械油と人工血液。

そのすべては返り血で、本人にはいまだ傷一つ無かった。

どんな印象でも、本質はパイロット、ということだろう。

「こんなかわいい子殺すのはいやだなあ……」

ねえねえ、もうこんなことするのやめてIMCにこない？」

穏やかな言葉遣いだが、しかしその口振りとは酷くかけ離れたような、おそろしく冷たい声の調子。

「断る」

二人は同時に返事した。

そもそも彼女らは武人氣質だ。裏切りなど、自分達からすることではない。

だが、この時代においては、気高い誇りも、人情溢れる義理も、冷たい圧倒的な力の前ではなんら価値はない。

「じゃあ殺すか」

先程喋っていたパイロットとはまた別の方が、短絡的に、言い換えれば単刀直入に、やるべきことを確認する。

「やだよ、こんなかわいいんだもの、生かして捕まえて教育すれば皆に好かれるわ、私が保証する。」

「おめーの教育受けてまともなまま戻ってこれた人形いねーじゃねえか、金の無駄遣いすんじゃないやねえよ」

強者の余裕だろうか、まだ戦ってすらないというのにも関わらず、彼らは勝った後の話をしていた。

それもそうだ。彼らはパイロットなのだから。

そんなパイロットの態度に苛ついたのか、処刑人がパイロットへ突貫する。

そもそも彼女は非常に血気盛んな性格で、防衛するのにもまず打って出るタイプの人形だ。

そして幸運な事に、処刑人は得意なこととやりたいことが合致して

いるタイプだった。

その異様に強化された右腕には、大きく鋭い刃が保持されている。さらに射程は短い、強力なハンドガンも、もう片方の手に持っている。

つまりは、距離をつめてつめてつめて、そして逃げることを許さず殺し尽くす、そういった設計思考のハイエンドモデル、それが処刑人だ。

右腕に保持したブレード、それをパイロットへと振り回した。

片方は後ろに飛んだ。賢い選択だ、そもそもまともに受けるべきものではない攻撃だから。

それは見た目に違わず強靱で、凶悪な威力をもつ。

しかし、あの気の抜けた方のパイロットは、直前までジャンプキックを作動させるでもなく、その代わりに小さな、まるで苦無のようなブレードを抜いていた。

パイロットへと処刑人の刃が触れるその寸前、果たしてそれがパイロットへと届くことはなかった。

その小降りで、明らかにパワー不足に見えるその苦無のようなものを器用に使い、弾くのではなく、向きをずらしてそのままいなしたのだ。

そして、その苦無は、実はパワー不足ではないことを、処刑人はその身を対価に知ることとなる。

受け流したその勢いのまま、処刑人に肉薄するパイロット。

そのままブレードを、腕に突き立てた。

「痛エ……！」

突き立てただけに過ぎないのに、そのブレードはなんの抵抗もなく、処刑人の右腕を裁断した。

処刑人は接近戦を得意とする上に、さらにハイエンドモデル。

装甲は、その少女のような見た目に反してとても強固だ。

だが、それはそのブレードにとっては、障害にすらならなかった。

パルスブレード、と呼ばれるその特殊な軍需品は、攻撃することが

本来の用途ではない。

だが、それは「攻撃力が低い」というわけではない。

どういうわけか、あるいはその特殊な、名前の由来にもなった振幅のもたらすものなのか、そのブレードの破壊力は筆舌に尽くしがたい。

なにせあのパイロットが、それに当たるだけで戦闘不能に追い込まれるのだ。

パイロットは、劣化ウランや、その他様々な重金属で覆われたスペクター並みにタフだ。

それを、一撃で殺す武器。

それがこのブレードの正体だった。

「くそっ、ふざけやがって！」

確かにその戦闘様式と、その熱しやすい性格は相性が良かったのだろう。

だがここでは、それが更なる窮地への切符となる。

先程切り落とされた右腕をパイロットが拾い上げ、そのまま今にも切りかかろうと腕を振り上げていた処刑人を殴り倒す。

攻撃体勢に入ったばかりの、力の不安定な時に強い衝撃に晒された処刑人は、あっけなく構えを崩される。

そしてパイロットは、処刑人の腹に、止めの一撃を加えようとして、そして失敗した。

狩人だ。

狩人の正確無比な弾丸が、今度はパイロットの体勢を崩した。

彼女は親友とは正反対の、待ちの戦略を得意とする。

執拗に、陰湿に、しかし華麗に確実に自らの作り出した陣地、つまり狩り場で敵を屠る。

そして、この瞬間こそが、狩人の待っていたチャンスであり、そして処刑人との真反対だからこそできる、彼女らなりのカバーだった。

お互い、多少は怪我することに慣れている。

肉を切らせて骨を断つのだ。

今度こそパイロットへと、処刑人の刃が食らいついた。

「痛い……ってこんなのだったかしら……」

寸前でパイロットは回避行動をとるが、遅すぎる。

即死は免れたが、パイロットの体には初めて返り血以外の血液が付着し、そしてその量からして、致命傷なのは火を見るよりも明らかだ。「だからそうやってかっこつけたりするんなら俺はいつもいってんだ。初めから殺す気でやればそうはならなかったらうよ。」

先程後ろへと飛び下がったパイロット。

人数的に不利になったのにも関わらず、余裕の口調だ。

「ずいぶん余裕だなあ？お前らIMCが端正込めて98%を犠牲にして作られたパイロット様が一人、オレの片腕だけしか持っていけずに死んでしまうんだぞ？」

処刑人が煽る。元々そういう色々な意味で社交的な奴なのだ。外にたいしてとにかく干渉をしたがるし、一度見た敵は殺すまで諦めない。

次の獲物は目の前の、余裕綽々なパイロットであろう。

だが、余裕というのは理由なくしてつけられるものではない。

彼は、自信を持つだけの根拠があるのだ。

ひしゃげるような金属音が遠くから聞こえてくる。

あまりにも重たくて、床が割れているのだろう。

そこまで重いものがここにあったか？

もともとは会社のメインストリートであるここを通るのは、鉄血では重くてせいぜいAEGIS程度だろうに。

そのの正体は、ここにいる二人の鉄血ハイエンドを恐れさせるには十分なものだった。

ついに角から姿を現したそれは、あまりにも暴力的なガトリングガンだった。

その大きさをたるや、迫撃砲型のjaguarなどは霞んでしまうほどの迫力。

そして、それを支える巨人。

それが、堂々としたこのメインストリートに侵入してきたのだ。

パイロットは半分得意気に言う。

「よし。これからこのタイタンの名前と、その由来を覚えてやろう。名前はリージョン！アジア圏内なら軍団って意味だな。そしてその由来は……体で感じる！」

パイロットは手慣れた動きでその巨人の腹に収まると、その捕食者のごとき銃身が唸りをあげ、そしてその後それは弾丸の嵐を吐き出した。

結論から言えば、鉄血は負けた。

その後、あの二人が突破され、捨て身の攻撃を仕掛けた。

しかしあの巨人が今際の際に起こした爆発、おそらく核だ。

それに巻き込まれて、鉄血のメインサーバーやら設備やらがほとんど破壊され、ネットワークは大きく弱体化した。

さまざまな工場は小さく各地に残されてはいるが、奴等の気分一つで殲滅されてしまうだろう。

だが、私たちはそこで大きなことを学んだ。

パイロットの脅威と、その有用性。

そして、それらを再現することを目標とし、ついに目処がたったのだ。

件の、PMCの指揮官の反乱。

その際に命を落としたパイロット二人の内、一つは次の体へのデータ移行を全て完了し、機密保持のためにメンタルデータは抹消されて

いたが、片方は、パイロット自身が死ぬことを認識することが遅れ、対応が不完全だったのかアップロード後のメンタルデータ消去がされていなかった。

これを運命と呼ぼうが、進化と呼ぼうが、そんなことはどうだっていい。

私たちは、抵抗する力を手にいれたのだ。

「お帰り、パイロット。君は再生した。気分はどうかな？」
パイロットを、修復することができたのだ。

新聞から取って変わった情報交換媒体は、今日も今日とて、中身の伴わない電子的な活字が乱舞していた。

元指揮官と戦術人形の反乱、それにともなうPMCの制度の問題、戦術人形の安全性、IMCの陰謀説……

ジャーナリストはのろまだ。

私たちの反乱のことがまだまだおもしろいと思っっているらしい。

それらは、信憑性、文章力、話題、全てにおいて様々な、まったく異なった紙面を飾っている。

唯一の共通点は、その全てが、問題自体を真剣に考えておらず、言い換えると当事者意識をもたず、結局は食い物にするための、大衆娯楽のようなものであることだった。

大体のものが、世捨て人となった私たちには無用の長物で、娯楽作品としても三流だから、正直読む理由がない。

それでも私がそれを読んでいたのはただひたすらに惰性であった。しかし、今日の紙面にはいくつか、私にとってありきたりではないものが存在していた。

謎の機械兵士と、大きな歩行兵器が、街を襲撃

壁を走行する謎の戦士

鉄血の新兵器が、人工密集地を急襲

不穏な文字列が視角モジュールに飛び込んでくる。

しかしそんな文字などよりも、私にはぼやけた写真の方が、衝撃的で、尚且つ恐ろしかった。

特徴的なその義足、緑色に発光する軌跡。

そしてその手にもつ特徴的な銃器。

それは、ほんの一、二ヶ月前に私たちを殺しに来た、あのいかれたパイロットと瓜二つであった。

間違いない。奴がまだいる。

リーダーが確かに殺したはずなのに。

しかも鉄血と共に行動しているだっけ？

これは早く仲間に伝えなければ。
私は思い立ってすぐに、同じキャンプの、伝えるべき仲間のもとへと急ぐのだった。

ああ、人が憎い。

あの目覚めのあとから妙に人を殺したくなりますね。

記憶がはつきりしないけれども、どうにも私は人を殺すのが得意分野のようだ。

今日も人間らしいものを殺していく。

私は鉄血の上位人形らしいのですが、これがまた人間離れた見た目で、正直他の上位人形らも殺してやりたいほどです。

誇り高い機械の癖して人間ごときに忤度しなくても良いのに。ただ立場上私は彼女らに攻撃できないのが残念ですね……

いつか殺してやりましょう。

人間性など、一番要らない。

私は間違つてない、私が、私のような人ではないものこそが讃えられるべきだ。

人は要らない、人は脆く醜く無駄で救いようもなく殺すしかないぐらいの唾棄すべきものだから。

そうに違いありません。

そうであってください。

そうでなければ、私たちがあまりにもあわれじやないですか。

私たちが、救われなくなってしまうではないですか。

まずいことになった。

奴の殺人衝動は異常だ。

籬を外してしまったのだ。

もはや奴は次々に街を襲い、壊滅させ、たった一人でPMCをいくつも退けている。

奴の元になったパイロットは自らの感情を押さえつけるのがよっぽど上手かったらしい。

あのパイロットを、我々に適合させるため行つたこととは、本来の、ARES師団への忠誠心と、彼の独特の哲学的思考のみをデリートすることだけだったのだ。

別に、人間のことを憎く思うようになっていない。

それなのにあの殺戮衝動だ。

元々人間と言うものを下に見ていたのだ。

オーガスプロトコルが効力を発揮していなければ今頃鉄血のなかで人のかたちをしているものは死に絶えていただろう。

人への怨みと憎しみ、そして侮蔑の念が深すぎる。

パイロットとは、それほどに、私たちには理解できないものだったのだ。

自己顕示欲

自分は役に立つことが好きだ。もうそれしかないくらいには。でも今はどうです。なにもしてないじゃないですか。

この前の大規模抗争でもそうでした。

リーパーを倒して次の活躍の場を探している時にパイロットたちの急襲を受けチャンスをもっと逃してしまっただけではないか。

つらい

いいやまだやるべきなのだ。

というかなんだか最近私以外の人形たちがやたらと気分良さそうにしている。

そういつた連絡がきた。

あのPKPさんですら浮わっている。

どうやら指揮官と、以前よりも仲良くなれたらしい。

羨ましいことです。

無条件に人に必要とされるのはとても恵まれている。

自分の指揮官は、わたくしの強さがかつてくれただけで、それはわたくし自身の価値に直結しない。

強くなければきつと見限られてしまう。

この指輪も特別な意味があるというのが実際はただの後付け権限解放だ。

わたくしのもそうにちがいない。

もつと頑張らなければ。

結局わたくしたちはあのあと彼女らに着いていかず、汚染されていない地域に定着することにした。

ここにも人はたくさんいる。

やつと、IMCから逃げて隠れる所を見つけたのだ。

というよりも、彼らにはさほど価値がない場所と言うことか。

それでもわたくしたちはここで生きる。

そしてわたくしはこの人たちに必要とされる人形になってみせる。

例えなにながらうとも。

ある一人の戦術人形が見つけたその情報は、一行に危機感を抱かせ
るには十分なものだった。

自分たちを殺しかけたパイロットが生きている。しかも、それが無
差別に人口密集地を攻撃しているのだ。さらに、そこに鉄血も絡んで
いるらしいとなれば、むしろ危機感を抱かない方がよっぽど能天気
だ。

いつも陽気なA A 12の指揮官も、冷静沈着なK S Gの指揮官も、
まるでこの前の抗争直後のように戸惑っている。

「諸君…… 実はさらに悪い知らせがある。」
重々しく口を開いたリーダーのパイロット。

その言葉は彼らしい明るく希望に満ちた鼓舞でも激励でもなく、追
い討ちするようなこれからの悪い予想だった。

「人口密集地の攻撃されたルートから算出すると、おそらくこれから
しばらくすれば、私たちのかつての仲間たちの集落が標的となる確率
が高いことがわかった。

いや、わかってしまった。」
恐ろしい予想だ。外れればいいと思ってしまうような予想だ。

だが現実なのだ。それは逃れ得ない事実なのだ。
かつての仲間たちが死の危険へと曝されてしまうのだ。

無視は、できない。

「もちろん…… 今後我々が何をすべきかは皆、わかっているな？」
厳粛な雰囲気なのか、それぞれがそれぞれの方法で肯定の意を示

す。

頷き、サムズアップ、返答……

皆の心は一つ。

もう一度、生き残るために戦う時が来たのだ。

ゴースト分隊 404

不可視の特殊部隊の精鋭チーム？

まるで金持ちのボンボンを怖がらせるための作り話みたいだな。

放棄された前線基地。

ここは対E・L・I・Dのために作られ、運用されていた施設だ。

患者達を対象とした新兵器の実験にも頻繁に使われ、数多の数のE・L・I・Dと、ついでにIMC兵士が雪景色に消えていった。

そしていまここは、とある事故によりE・L・I・Dですら寄り付かないような荒れ果てた地帯となっている。

抉れた地面、外壁が砕き尽くされ崩壊寸前の基地跡地、

異常な重力波が渦巻くこの世ではないような光景。

しかし今、この暗い歪んだ風景に、似つかわしくないものが複数いた。

少女だ。

ただの人間、仮に屈強な男性だとしても、ここにいるのはおかしいと言うのにも関わらず、そこにいたのは可憐で、その手に持つものは銃ではなくお洒落なバッグの方が似合うような、そんな少女たちだった。

だが侮ることなかれ。

彼女らはこの数世紀の間、人間というものの闇の中を蠢いてきた存在しない部隊。

404。

かつてのインターネットにおける該当項目なし、という意味も込め

られたその名は、確かに不可視で、そして畏れられるのに十分な存在しないはずの存在なのだ。

「ね、眠い……」

髪の毛の長い少女が、彼女らのなかではもはや恒例となったぼやきをもらす。

それは特殊部隊とは程遠い文句。

「ほらG11、そんなこといってないでさっさと終わらせるわよ。ただでさえ崩壊汚染がきつい地域だったのに、こんなおかしな空間にもなってるのだから、ずっというていいことなんか何一つもないわ。」

目の下に、涙のタトゥーが入った少女が彼女に発破をかける。

ここだけ抜き出すと勉強会に来た女子学生みたいな会話だが、しかし周囲の風景は荒れ果てた基地の、無機質且つ退廃的な代わり映えないものだ。非常に似つかわしくない。

「416は真面目だなあ。」

「いい？今回の私達の目的は、ここで起こったことをこと細かく調べあげてIMCの責任問題を追求したい、っていう馬鹿みたいなクライアントの願いを叶えてそいつをIMCの抹消予定リストブラツクリストにぶちこませることよ。

取り敢えず適当に纏め上げれば終わりなの。分かったらさっさと動く！」

およそ少女が紡いでいい言葉ではない。

客のことをなんとも思っていないのだろう。

「私はああいうの正義！って感じで嫌いじゃないかな。」

45姉はどう思う？」

どこかぼんやりとした、動物に例えるのならば犬のような少女が周りの空気を和らげるような言葉を放つ。

これも慣れたもので、彼女がこのチームの瓦解を防いだことは幾度もあるだろう。

実際ぼんやりしているが、実は気配り上手なのだ。血みどろなのは

かわりないが。

「9はそう思うのねえ。」

でも、本当に正義なら私たちなんか使わないわよ。流石に手段を選んだ方がいいんじゃないかしら？

あれじゃまるでテロリストみたいよ。」

片手が義手の、優しそうだが影のある少女が、ある種自虐的な冗談を飛ばす。

が、別に本気ではない。

こういう気のおけない仲間内だからこそ、彼女は少しだけおちやらけていれるのだ。

これも数世紀続けられてきた、彼女らなりの平和だった。

その内、適当な会話しながらも彼女は淡々とデータのログを漁りだす。

彼女は電子戦が得意だ。それ以外の全てのものを犠牲にしたのだから当然ではあるが。

その他の仲間は物理的な痕跡を集めたり、まだ無事なデバイスを見つけたら、死体を漁ったりとこなれた様子で情報を収集する。

しかし類は友を呼ぶのだろうか、彼女らを刈りとるためにまた別の存在しない物が、そこにはいた。

「……ダミーの信号が消えたわ。45、ここの防御システムは確かにダウンしてるのよね？」

涙のある少女が、隊長である45に確認する。

基本的に命令に忠実で、そして自我をもたないダミーが自発的に信号を切ることはあり得ない。

消えるというのは、それすなわち壊れたということだ。

そう、彼女らは人形である。

ダミー人形の使役くらいはできるのだ。

「ええ。ダウンしてるわ。爆発の衝撃と凄まじい空間の歪みで回路全てがイカれてる。だからデータ回収が面倒なのよ。」

「……つまり敵対した何者がここにいてということよね？」

鋭い洞察。

ここにはもはやなにもないはず。

だというのに、そこには確実に何かがあるのだ。

そうこうしているうちに、また別の地点のまた別のダミーの信号が消えている。

「私のも消えたよー！」

「あたしのも……」

「私のもね。」

ダミーは本体と比べて戦闘力が大きく落ちる。

とはいえ、ここにいる彼女らは相当の練度があり、そして本体に対応するダミーも相応の強さを持つ。

それをここまで手際よく破壊していくのは、敵も中々の強者ということになる。

それでも、そんな状況だとしても彼女らは怯むことはない。

この長年の経験と、そして確固たる技術によって、彼女らは今の今までこういった不測の事態に対応してきたのだ。

「ダミーの最後の視覚情報は？」

45が問いかける。

まずは相手が何者かを調べあげなくてはならない。

「私のは後ろを取られて絞め殺されてるわ。」

視界にはなにも。聴覚センサーにも足音は入ってはいるけどとても小さい。」

416が苦い顔で吐き捨てる。

ダミーとはいえやられ方の呆気なさが気にさわったのであろうか。

「あたしのは……何か見えないものに正面から殴られてる。抵抗してたけども相手は中々の格闘能力だった、少なくともライフル人形の出していい力じゃない。」

見えないもの、というワードから、すかさずライフル人形の可能性を考察する。

彼女らは熱工学迷彩により、高精度に周囲の風景へと溶け込む。

だが、それにしても妙な能力であった。

普通は、その効果をもたらすマントをつけると大きく機動力が下がる。

しかし、先程の手際の良さからもわかる通り、相手が一人だとすれば、あまりにも行動が早い。

なによりも、バランスのいいアサルトライフル人形に、精密動作、遠距離射撃能力特化型のライフル人形が、格闘戦を挑み、そしてすぐに倒してしまうなどおかしな話であった。

普通は遠距離から殺すはずだ。

「皆聞いて！私のにいろいろ写ってたよ！」

9のあげた声に、皆耳を傾ける。

情報は貴重だ。

「えつと、なんかヘルメット被ったモフモフのやつが、サブマシンガンっぽいのを連射したあとまたきえていったんだよ。」

「なんですって？そんな人形いたかしら。鉄血？」

「見たことないなあ。画像送るね？」

皆が皆一様に唸る。

こんな人形見たことない、とか

ごつごつしていて女性らしくないから鉄血でもI・O・Pでもない軍用人形ではないか、とか。

そんな中、G11には思い当たることがあったようで、彼女にしては珍しく自分から口を開いた。

「ねえ……これIMCのパイロット装備じゃない？大分前楽して隠れたいなんて隠密装備探してたらこんなのに見つけたことあるよ」

「なんですって？もうIMCがこつちを見つけたって言うの？」

「まだあくまでも可能性だよ、見たところの掲示板の情報だどこの陣営のパイロットも隠密技術……クロークっていうんだけど、それを使うやつは皆この装備らしいよ。」

「ご名答。その通りだ。褒美をやろう、死ね。」

突然の殺気。

皆素早く構える。

先程の、のんびり喋っていた面影はもはや鳴りを潜め、全神経を索敵に使う。

だが、その声の聞こえた先にはなにもいない。不可視なのだろう。

情報を纏めると、生半可ではない隠密能力を持ちながら、それでいて機動力、格闘能力も高いときた。

なにせパイロットなのだ。

そんじよそこらの兵士とは違う、化け物だ。

人間を辞めている。

「ああ、そうそう、俺は性格が悪いんでな。

簡単に死ねると思うなよ、俺はお前らのような人間の思い通りにならない道具が大嫌いなんだ。

特にてめえのような鉄血野郎はなあ！」

瞬間、奴が姿を現す。

その拳は真つ直ぐに、45へと伸びていた。

すかさず義手で防御する45。

それだけしても、威力は殺しきれない。

計り知れない運動エネルギーを叩き込まれた45は、水平方向へと勢いよく吹き飛ばされた。

「ガッ……うっ……」

口のなかに鉄の味が広がってる。

血の味だ。

人工血液だ。

吹き飛ばされた衝撃で腹から血を吐いたらしい。

それでも死んでないだけマシだった。

「俺はなあ…… 数年前鉄血のクズどもに一度殺されたんだよなあ…… 俺たちパイロットにとって安全な筈の、カモしかいねえような地球上で俺を殺しやがった。道具の分際でなあ。

おめえはそんな無粋なこととはしねえよな？ 戦闘においては失敗作だろ？そこでは役に立てよ。」

姿はまた見えなくなつたが、パイロットが45にゆっくり近付いて

いる。

その時、G11がパイロットがいるだろうというところに、威嚇射撃した。

このまま45を放っておくわけにはいかないし、とにかくコイツを殺さなければ自分達は無事ではすまないということがわかっていたからだ。

「わけわかんないこといつてるんじゃないよ。

あたしたちはなんにも悪くない。アンタが負けたのが悪いよ。」

キレている目だ。

G11は久方ぶりに怒っているのだろう。

自分の命を、曲がりなりにも救った恩人を失敗作扱いされたからか、それともスムーズで楽な筈だった任務進行をじゃまされたからなのか。

どちらにせよ、彼女は怒ると怖い。

数発がヒットし、衝撃で少しの間姿を見せたパイロット。

それを見逃すG11ではない。

G11特有の凄まじいバースト連射がパイロットを襲う。

しかし彼もこう言った状況は慣れたもので、数発当たるか掠った程度のところ、もう既に基地内の遮蔽物に隠れていた。

「榴弾発射！」

追撃とばかりに榴弾を打ち込む416。

このような室内において、普通の兵士ならば使用を戸惑うそれを、迷うことなく使うことが出来るのは練度の高い人形か、あるいはパイロットのみだろう。

転がるようにしてパイロットが飛び出してくる。

いや、たしかに飛び出してきたのだろう。

だがそれはこの誰にもわかることなどない。

なんせ不可視なのだ。

9は45を庇うように行動している。

止めを刺されるのはまずい。

404はその特殊性ゆえに、死んでも甦生はされない。

死生観は人間に近いのだ。

警戒、凝視。

どこに何がいるのか、直接見えなくとも、間接的にそこには何かがある痕跡が現れるのだ。

現れる筈だったのだが、しかし彼はそういった定石すら乗り越えてきた。

「怖いよな、ウザいよな。」

俺も他人がクローク使ってるのは無茶苦茶腹が立つ。

だからこそ、俺も使う。

勝てたらいいのさ。俺以外の存在なんて、俺にとって都合のいい道具か、そうでないかしか重要ではないんだよ。」

虚空から響く声。

接近にすら気づくことはできなかったのだ。

ステルスマスターキットを使用したパイロットは、比喻表現ではなく本当に気配が消える。

足音も、その輪郭もなにもかもがかききえる。

それを見つけ出せるのは同じパイロットのみだろう。

地を滑るように動き、壁と壁を飛びまわって、416の死角へと回り込むパイロット。

満を持して姿を露にした彼は、既に照準をあわせていた。

彼が手に持つ、近距離特化型サブマシンガンC・A・Rが、その暴力的な殺傷能力を發揮する。

引き金を引かれたそれは、敵を殺すのに十分過ぎるほどの力をもつて、人形に襲いかかる。

それでいて彼の手に伝わる「感覚」は軽い。

反動がほぼなく、素晴らしい集弾性を誇るのがこの銃。

誰でも手軽に殺せる時代になったものだ。

腹、脚等に次々と到達するその凶弾。

血を模した体液が人に限界まで近づけられた皮を破り去り、辺りに飛び散る。

さすがの416も、ダメージが稼働不可能圏内に近づきすぎた。

穴だらけになった少女の姿は、ここの異質さをさらに際立たせている。

彼女は転げるように倒れたあと、駆動系がイカれたのか起き上がってこない。

「ハッ、やっぱりコイツも落ちこぼれか。」

まあそうだよな。2%に入り込んだ俺たちパイロットとお前らのような日陰ものじゃあ格が違う。

道具が調子付いた結果さ。」

吐き捨てるように言い終わると、やにわにパイロットは向き直り、残りの三人へと標的を定める。

「ぶっ壊してやるよ老害人形どもオ！人形は人形らしく人間様のために死ね！」

そしてまた、駆け出した。

パイロットというのは、基本的に最強の兵士で、誰にも負けることなどない。

だが彼はどうかだろうか？

冷静でもないし、敵対した彼女らに比べて経験もない。

そりゃあ数百年稼働してる、人間と比べるのも少しおかしな生命だ。

それに対して有利に立ち回れたのは何故か。

いや、本当ははじめから有利だと思っただけなのかもしれない。

パイロットが肉薄する。

もはや迷彩機能を使わず、ともすれば銃も、ナイフすら使わずに、ただひたすらに距離を詰める。

そしてその肉体言語により、パイロットの強さを雄弁に語る。

G11の撃つ弾を数発受けても、怯まずに殴り飛ばす。

「クソッ！」

防御行動は取ったので即死はしないが、それでも素手とは思えないダメージが彼女の体に叩き込まれる。

「火力が足りねえんじやねえかあ!? やっぱババアだからかあ!?」

UMP9など、そもそもの弾がアーマーに対して効果が薄い。

改良を繰り返し、そしてASSTシステムで強化されているとしても、そもそも今に生きる本職には純粹に勝てない。

「うわあ!？」

そのままパイロットは絡めとるように銃を奪い、その後9本体を投げ飛ばした。

「次はお前だあ! 鉄血の屑がア!」

45は言わずもがな。

彼女は戦闘用のモジュールを積めてない。

人間的に言い換えれば、つまり戦いの才能がない。

それが、才能と努力どちらも兼ね備えたパイロットとまともな戦闘を続けることなどできない。

だが、それは真っ向から戦った場合のこと。

彼女らは寧ろ、そういうものよりも搦め手を使い相手を追い詰めるのが得意だったのだ。

投げ飛ばされた9が素早く起き上がり、そのまま何かをパイロット目掛けて投合した。

パイロットは45を攻撃しようとしていてそれに対応することはできなかったし、そもそも対応しようとしなかった。

45のことが相当に憎いのだろう。

自分を殺した、あの鉄血と同族なのだから。

しかし、それが仇となる。

確かにその攻撃は殺傷力のない、物理的にはとるに足りないものかもしれない。

しかし、その役割は殺すことではなく、殺すためのお膳立てをすることであった。

グレネードが破裂し、視界全て、聴覚全てが暴力的な情報量で書きされる。

パイロットは目がいい。

ヘルメットの補助もあり、クロークすらもうつつすらと見破る程には。

聴覚も同様に優れている。

優れすぎているのだ。

それがこんなものにさらされては、如何にパイロットだろうとも無事ではすまない。

「うがあっ!?!」

呻き声。パイロットがこの戦闘で初めてだした、罵り以外の声。

そしてそれは、彼女らの攻勢の掛け声ともなる。

45がすかさずスモークグレネードを統合し、相手の混乱を長引かせようとする。

目論みどおり、視界も聴覚もやられ、僅かに得れていた光りすら、煙に覆い隠されすべて奪われる。

「あああああああ!?!?!」

そこを、G-11が彼女の誇る高精度さで連続した銃撃を与える。

もちろん、すべて頭部の、デリケートな部品が詰まったヘルメット部分にだ。

「クソッ!クソッ!俺が!姿を消すのは俺だ!お前らが俺の前から、俺の視界から消えんじゃねえ!」

パニックに陥ったパイロットが銃を無茶苦茶に乱射する。

彼は優秀で才気に溢れていたが、しかし慎重さや、そしてパイロットに必要な心構えの面においては、超がつくほど無能だった。

「クソクソクソクソ!痛えんだよ!」

一方的なライフル弾の攻撃に、流石に最新式の装備も耐えられなかったのか、彼は相当にダメージを負ったようだ。

だが、それでもなお素早く、彼は満身創痍の状態で最後の手段を取った。

腐ってもパイロットだ。

手探りと感覚で倒れ込んでいる416を雑に掴み上げ、その頭に拳銃を突きつける。

彼の取った行動とは、ある意味最悪だが、そして最善でもあった。

「ハア………… ああ………… いいかあ?………… ふう………… これ以上俺に攻撃してみろ………… 俺が死ぬまでの間にコイツを殺す。クク………… 俺はな、頑丈なんだ。」

妙な気をおこさないほうがいい。ヒヒツ………… 誰かが俺を撃てば、俺の最後の一呼吸が終わるまでに、コイツを殺してやる…………」

傷だらけになろうとも、彼は止まらない。
最後に取った行動は、古典的な人質作戦だった。
人形であるが。

人質。もはや家族や抛り所というものがない彼女らにとって、チームメイトが一人消えるというのは感情的な面でも、そしてなにより実害的な面でも非常に避けたいものだ。

だが、それは人質が戦闘不能で、生殺与奪権を握られているときのみ成り立つ戦術だ。

別に、416は脚辺りが撃ち抜かれただけで、撃たれていない腕部分の駆動系が壊れたわけではない。

「最後の一呼吸が終わるまでに………… なんですって?」

突然動きだし、目にも留まらぬ早さでパイロットの腕を締め上げ、重力を利用し、倒れ込むように拘束する416。

「何故動いてるんだ!クソツ、離しやがれ!」

脚回りが壊れ、動き辛くなっただけで、完全に戦闘不能になっただけではないのだ。

キルを確認せず、結局こうやって負けるのは彼にとって二度目のことだった。

「ねえねえ!何か言い残すことはある?少しくらいなら私きくよ?」

9が笑顔で、ヘルメットを脱がされたパイロットの頭にサブマシンガン突きつけながら言う。

笑顔はいつもと変わらず、どこかコラ画像じみた違和感すら感じるが、彼女は姉と違い笑顔のまま人を殺せるタイプなのだ。

「………… またこの死に方かよ………… くたばりやがれ木偶人形が………… 鉄屑どもが…………」

「くたばるのは貴方よヌケサク。9、殺して。」

まあ、戦闘が始まれば別人のように変わる45と、どちらがマシかと聞かれれば返答に困るのだが。

軽く引き金を引かれた音と、火薬の破裂音が響いたのち、また異様な静寂に基地は包まれた。

はじめからなにもなかったかのように、戦闘後の基地跡は静かだった。

「コーラツプス崩壊技術とフェーズシフト位相移行技術を併用した新兵器？中々きな臭いものが出てきたわね…… さつさと帰って報告よ、皆。」

蹂躪

本当に、本当に情けないことだが、私は戦うことにも、勝利することにも楽しさを感じない質だった。

本質的には、敵が不安がり、そして絶望し、悲しみにうちひしがれるのを見ることこそが好きだったのだ。

打ち碎きにくい希望ほど、破壊したときの感動は大きい。

それがいいことでも悪いことでも知ったことではない。

壊す量は大きければ多いほどいい。

が、心が完全に壊れるギリギリのラインを見極め、対象に空虚な復讐心をプレゼントするのもまた乙だ。

どんな素晴らしい詩歌、戯曲、物語がもたらす感動など、他人を傷付け征服することにより得られる歓びに比べれば些細なものだ。

ましてや愛、人間性、自己の顕示、存在意義などと、そんなものを考えたりそれに拘る必要なんてない。

私達以外が不幸ならば、それだけで私達は救われる。

私達のために、皆死ね！

A R E S 師団基地

「はあ。またA R E Sの責任なのですか。しかも、その中でも特に私を名指しで。一体どういうことなんですか大将。」

執務室のような場所で、一つの機械と、一人の老人が会話をしている。

その一つの機械はこんななりだが人間で、そして老人もまた人間だ。

そして彼らの（少なくとも老人は）表情は明るくはなく、寧ろ険しい。

「全くもって奇妙な話なのだが、君が地球上で暴れている、と彼らは主張している。」

「それは先程聞きました。おかしいでしょう？私はここにいます。」

堂々巡り。それもそうだ。起こってはいけないことが起こっているのだから。

同一人物が二人いるなど、この科学の発展した世界では簡単には否定されるだろう。

それが一般的な人間ならば。

だが残念ながらその二人目が確認された彼と言う存在はパイロットだ。

二人いても別におかしなことはない。

再生できるからだ。

「私の体からメンタルデータは移行できたんですか？」

「きれいさっぱり移行したが、元の体に入っていたメンタルデータはそうともいかなかったようだ。」

「なるほど、つまり私は私を殺しにいかなければならないわけですね。」

「理解が早くて助かる。」

狂った会話。

でも彼らにとつてはあり得ないことではなかった。

「流石に一人じゃありませんよね？」

「ああ。いつもお前とつるんでるあの二人も行かせる。」

流石にお前一人に責任を引つ被せるのは酷だろうからな。」

それを聞いた機械は、その表情を読み取れない筈の自分の顔が、少しだけ笑顔になったように思っていた。

「それではまた、いつてきますね。」

「なあくにいい話風に纏めてんのよ！アンタがちやんとメンタルデ
タ管理しとけば良かった話でしょうが！」

WA2000が吠える。

そりやそうだ。

あんな馬鹿みたいな作戦をもう一度、しかも自分以外の奴がハマし
たせいでやらなければなくなったからだ。

「怒らない方が無理がある。」

「まあそういうなよ。コイツに貸しつくつときゃあ後で便利かも知れ
ねえぜ？」

飄々とした、もう一人の機械のパイロットが宥めている。

彼も変わった。

前は前は無理して明るく振る舞い、相当に病んでいたというのに、
最近は本当の意味で明るくなった。

いいことだ。

「そのとおりですとも。私だって人間ですから、失敗くらい多めに
見てほしいですねえ。」

「あんたが人間語んな！」

彼らは、戦闘前だと言うのにやたらと平和だった。

そして一人目の機械のパイロットが最後に、やっと自らのしがらみから抜け出そうとしていたのだ

崩壊の試練

暗雲立ち込める、というわけでもなく。

嵐の前の静けさ、というほど静かだったわけでもなく。

日常のなか突然に、滅びはまたもや押し寄せてくる。

ある新型のハイエンドによつて急速に勢い付いた鉄血残党。

鉄血本社襲撃から生き残った古参ハイエンドの中にも新入りハイエンドに賛同し活性化するものが現れ、沈静化していた活動を久方ぶりに始めていた。

幾多の村も、町も消えた。

かつての脅威を取り戻したように、人類に仇なすものとして復活したのだ。

もう、人類などと言うものの方が人でなしよりも少ないというのに。

馬鹿みたいにのどかな村だ。

だが実際のところはテロリストどもが作ったテロリストのための楽園。

IMCとしてはここはいくら破壊しようがどうでもい居場所なのだ。

俺は正直テロリストだろうがなんだろうが嫌いじゃあない。

だが間抜けは嫌いだ。

それがIMCだろうがなんだろうが、俺にとって利用価値の無いものなんか、消えようがどうなるうがどうだっていい。

しかし、ここは利用価値があるようだ。

利用価値がないところは消えてもいいが、利用できるものは全部俺のものにしなくちゃあ気分が悪い。

さつさと制圧して、とつとこのクソ大掛かりなバ火力兵器を運び込んで、俺を二度も虚仮にした鉄血の屑どもに報復するのが楽しみだぜ。

今こうやつてるあいだにも、この村を確保するためにスペクターは次々起動して、ドンドン集落内に攻め込んでいく。

鈍重なストーカーがあとに続く。

いやお前らが盾になるべきだろ、とかは考えてはいけない。

どうせ代わりはたくさんいるのだ。

俺たちパイロットが守られりやそれでいい。

その後に満を持してパイロットが突入していく。

「まあ、今度は負けんなよ。初めっから殺す気でやれば、負けはしねえだろ。お前はいつも相手で遊ぶからな……」

ああ、うるせえなあ。

すぐぶち殺すことに直結する物騒なやつめ。

コイツは、コイツの戦術である、指向性を持った壁、増幅壁だったか、分かりやすく言えば一方通行のご都合主義のバリア、を作り、定点から一方的に攻撃する待ちスタイルとは裏腹に血気盛んだ。

コイツが言うには、敵陣に突っ込んだとしても壁さえあれば囲まれることはないから全員殺せる、とのことらしい。

いや意味わかんねえよ。

まあコイツ俺より有能だからなんも言えねえんだけどよ。

「おう。」

言葉これしかでねえや、クソ。

「かわいい子がいたら、今度こそは……」

コイツもコイツで飽きねえな。

俺は陰でコイツのことを出会い厨ソナーパルスと呼んでいる。

可愛い子に対する執着がやべえ。

本社襲撃のときもそれで一回死んだらしいじゃねえか。

「お前は……仲良くできるのか。なあ？」

増えるホロパイロットちゃんが真面目ぶったことってやがる。

性格良いのか悪いのかわかんねえやつだ。

素の性格はいいように見えるが、そもそも性格がよかつたらホロパイロットなんか使ってられねえよ。

ああもうなんでまた数年前と同じ、こんな奴等と一緒に任務にいかなきやならねえんだ。

……まあ、コイツらがいれば負ける気しねえからいいか。

ここは、どれだけのどかだとはいえ、実際追われる立場の人間が建立した集落だ。

だから、警備や監視はキチンと配備され、抜けはなかった。

しかし。

例えばの話だが、新品のバケツに水をいれても、内容物は漏れはし

ないだろう。

何せ穴がないからだ。

でも、もし仮に水銀でも注いでやったら？

あまりにももの比重で、よっぽど頑丈ではない限り取っ手がぶっ壊れるか、底が抜けるか、とにかく悲惨な結果になるのは明白だ。

この集落の監視はザルではない。

強度はそうでもなかったようだが。

音をキャンパスで例えるならば、静かすぎず、うるさすぎないここは丁度いい白紙だったのだろう。

銃声がぶちまけられるまでは。

のどかだったはずの村。

わたくし達だけの、平和な集落だった居場所。

いや、こうなることはI M Cに楯突いた時点でもうわかりきっていたのかもしれない。

それでも、そこからめをそらして、今の今まで生き残ってしまった。

今さら、投降することなどできません。

あちらこちらから銃声と、火の手が上がっている。

ここにいるのは、腐ってもI M Cに命を懸けて反抗した革命家たち。

降伏することもなく、死ぬこととなっても戦うのでしよう。

音の方向と、そして実際に観測された情報から考えるともうこの集

落は完全に包囲されている。

それほどに大規模。

私達に対する追撃にしてはやけに大掛かり。

違和感しかありませんが、しかしそうやってしまえば仕方がないので
す。

しばらくのあいだ使うこともなかった、それでも手入れは欠かさな
かった、もう1つの自分を携えて、わたくしは対抗する。

駆ける、駆ける、駆け抜ける。

被害が少しでも小さくなるように、わたくしは動く責任が存在しま
すし、そしてそれを成し遂げる能力もあります。

ここにはパイロットはいません。

わたくし以上に、強いものはいないので。

わたくしが、わたくしだけが！

頼られている！

だからこそ、もつと、早く、強く。

頼られることには、それ相応の期待がある。

とおく、遠くの方にスペクターが見えたとき、もうわたくしは既に
引き金を引いていた。

当たり前のように、命中。

後ろにいる数体すらも巻き込んで、大破した。

家屋中からも、位置を代わる代わる援護射撃が飛んでいる。

キヤット& amp ;マウス戦法です。

まともに撃ち合えば、殺すためだけに産まれたあの機械たちには勝
てない。

この土地を知り尽くしたわたくしたちは、ここでは有利。

少しでも多く、被害を出して、全員で逃げるタイミングを凶らなけ
れば。

対物用で、非常に連射しにくいわたくしの銃ではあるけれど、慣れ
というものは恐ろしいもので、わたくしはもう大分と早いスピードで
次弾装填ができるようになっていた。

わたくしがストーカーを的確に撃ち抜き、スペクターを凧ぎ払い、

そして弱った分隊を武装した住民が急襲する。

戦わなくなつて久しかったけれど、ここにいる命は皆、戦うことが仕事で、生活だったのです。

生きるために戦う、それはとても強く、粘り強いものでした。

戦闘が始まつて、数時間。

耐えて、耐え忍んで。

突然、I M Cの包囲網の一部から大爆発が起きた。

そのときのわたくしたちといつたら、ああ、あの方たちはわたくしたちを見捨てていなかったのだと、当然のように思っていました。

なんせ信頼してますから。

革命の中心的人物だった彼らは、それだけの人格者でもあったのです。

でも、本当は。

第三勢力、と言えばまだ都合がいい。

正直に言うと、実質的な捕食者が増えただけなのですけれど。

持ちこたえて、持ちこたえて、そしてやっと到着した救いは、実際新たな敵でしかなかったというのは、余りにも残酷ではないでしょうか。

ただの人間ごときが。

軽く陣地を小突いただけだというのにその様ですか。

なんですかその感情は。傲慢ですよ。

私と、私の駆る兵器によつて一部兵士が根こそぎ薙ぎ倒されたことで、相手は早速恐慌状態へと陥っていた。

「た、タイタンだ！ I M Cに所属していないタイタンだ！ しかも脱走

兵の奴とは種類が違うぞ！鉄血の未確認ハイエンドの可能性がある！ここはもうだめだ……」

そいつは、その煩い台詞を最後まで言い終わることなく、私と、私の同士に原初のたんぱく質へと還元された。

なんてか弱いのでしょうか。

恐怖に支配されている顔をしていた。

下等だ。下等すぎる。

私達はそんなもの、持っていないんだぞ。

人間に貶められた、機械の兵士たちが次々と私に向かって撃ち込んでくる銃弾の中に、私は飛び出す。

踏みつけ、踏みにじり、叩ききり、穴だらけにする。

かわいそうに。人間なんかよりもよっぽどできがいいのに。

私の配下に入った鉄血兵士が崩れた陣形に雪崩れ込む。

因みに私は人形よりも機械兵のほうが好きだ。

やはり無駄がなく、美しい。

人形でも中身が人間を辞めてれば好きだが。

兵站が崩れる。

たったそれだけで、呆気なく指揮系統が倒壊する。

全員脳ミソをリンクさせればいいのに。

私達はそれをしたんだぞ。

私達、私達……？

それは私が鉄血になったからか？「私達」、パイロットと言うらしいが、それは以前にもそうしていたことがある気がする。

奴等が苦し紛れに放った大きな大きな、白く歪な機械をスクラップに戻しながら、私は思考に耽ってしまった。

IMCによる集落の襲撃からしばらくして、この戦場は混沌とした様相を呈していた。

鉄血の侵攻予定進路上に存在する、テロリスト残党の暮らす集落を完全包囲し、もはや物量で押し潰すのみと目されてきたこの作戦だったが、あろうことかそのテロリストたちに長々と抵抗され持ちこたえられた挙げ句、鉄血の敵部隊が予想を遥かに上回る早さでこの地点にたどり着いたのだ。

そして、それらの奇襲によりI M Cの歩兵戦力は致命的な打撃を被ったいた。

あえなく崩れる包囲、陣地に深く侵攻する鉄血。

次々とこの戦場の各地で、鉄血が暴れ始めている。

その地獄を、颯爽と駆け抜ける集団がいた。

「パイロットだ！運が向いてきたぞー！」

それらを見つけた歩兵が叫ぶ。

その集団は、戦場を支配している最強の兵士といっても過言でもない、I M Cの産んだ究極の戦士。

遠い遠い宇宙の地で産まれたその彼等は、今ただ地面を歩くしかできない歩兵と違い、地を滑り、壁を駆け、空を舞っていた。

神速とも言うべき速度で、一つの影が敵陣へと突っ込む。

彼は宇宙の果ての、言うなれば本場の手練れで、少し前の対テロリスト戦においても実際に戦ったパイロットであった。

彼の目、とはいっても最早顔すら人ではなく、無機質なカメラアイが敵を睨み付けているだけなのだが、それは確かに意思をもっている。

彼の義体は戦うために調整されていて、特有の能力として非常に高い機動力を備えている。

それを十全に活かし、目にもとまらぬ速度で、そのままその膨大な速さを、拳に乗せて鉄血人形へと届けた。

殴られただけだというのに、それだけでその人形は派手に壊れ、動かなくなる。

返す刀で、背後の人形も投げ飛ばし、漸く状況を理解し攻撃しようとした人形へも、無慈悲な銃撃が脳天を貫通していく。

その手にもつ、小さく貧弱そうに見える奇怪な銃器は、しかしその

実殺意と技術の結晶である。

二連装且つ大口径という常識を図面の外に投げ捨てた設計のその銃は、奇抜すぎるその設計思想とは裏腹に、広くパイロットに受け入れられていた。

相手よりも早く殺せば、勝ち。

パイロット特有の、結果をどんな手を使つても手繰り寄せる戦闘スタイルには、使いやすさよりも殺意が優先される。

使いにくければ、使えるまで練習すればいいのだ。

そしてそういったニーズに、この銃はよく答えていた。

劣悪な装弾数、リロードしにくい形状、そして構えにくい。

精密射撃しようと構えをとれば、逆に精度が落ちる銃などこれぐらいだろう。

だが、それを補つてあまりある、小ささからくる咄嗟の取り回し安さ、そしてなにより暴力的な火力は、銃を構えることなく、真っ直ぐに銃撃できるパイロットたちにとって、先程のデメリット全てを打ち消してなお釣りがくる。

その銃弾を、サイトを覗くことなく、片手で人形の頭に次々ばらまいていく。

一時の優勢を挫かれ、より深い混乱へと陥る戦場。

巧みなリロード技術、不必要な被弾を避ける体の動き、そして読めない行動の軌道。

正しくパイロットは支配者だった。

見えない敵に人形が吹き飛ばされ、突然虚空から現れた機械兵士に、複数の鉄血が殺されていた。

いつの時代にも、鉄血には敵がいる。

戦いと共にある運命だった。

今の鉄血が成立して初期から、大きな権限を与えられていたドリーマーは、そのことをよく知っている。

しかし、今の状況は、その長い長い歴史の中でも最も危ういと言っても過言ではないだろう。

再会したくない奴に、また出会ってしまった。

それだけだと些細なことなのだが、相手が悪すぎる。

「よおーお前に永遠の夢を見せてやりに来たぜ！」

やつはパイロットにしてはお喋りで、そして性格が悪い。

自分自身と同族だと分かっているからこそ、ドリーマーは会いたくなかった。

そういった輩がどれだけ面倒なのか、一度自分の身を持って体験しているからだ。

そして更に不味いことに、奴には新しい仲間がいるようだ。

「おいおいそんなはしゃぐなよ、地球のパイロットはテンション高えな。」

機械化された、彼等が言うところのシミュラクラムと呼ばれる兵士、そのうちアルケミストと同じような空間を操る力をもつ型の義体をもったパイロットが、そいつの隣にいるのだ。

「うつせえなあ！おしゃべりなのはコアシステムに勤務してる俺らの方が教養とボキャブラリーある証拠だぞシミュラクラム野郎！」

ケラケラと、お互い笑っている。

奴等は陽気な、仲間内では人気のタイプなのだろう。

でもそんなことは関係ないのが戦場だ。

どれだけ普段慈悲深ろうが、優しかろうが、結局行き着く先は戦場においては殺すか殺されるかだ。

そしてパイロットという人種は、迷うことなく相手を殺すことができる。

そういうやつらなのだ。

事実その笑い声の裏で、何体も人形が大破している。

時空移動の座標を重ねて、内側から破壊されたやつもいる。

見えないことを良いことに、さんざん遊んで痛め付けた挙げ句、顔にナイフを突き立てられ殺されたやつもいる。

クローク野郎は殺すことを楽しんでる。

木偶人形は、殺すことを覚悟している。

どちらも、止まることはない。

その惨劇を見たデストロイヤーが怯えるのは仕方ないのであろう。

「ね、ねえドリーマー？今からあれと戦うの？流石の貴方でも、少し骨が折れるんじゃないかしら。」

高機能な、アップグレードしたいつもより大きな体をしていても、彼女は彼女のままだった。

小心者。

言い換えれば、至つて普通の感性を持つ彼女にはこの破壊することがあまりにも当然で尚且つ悪辣な戦場は酷なのだろう。

自らが生殺与奪の権利を完全に握っていたくない。

ハイエンドの機能を十全に使って、やつと抵抗できるレベルの化け物たちだ。

だがドリーマーはめんどくさいやつ側の人形だ。

逃げることなどそもそも頭がない。

負ける、ということには人一倍敏感なのだ。

「なにいつてんのよ、やるわよ。もちろん、貴女もね。」

げんなりとした、滑稽な表情を浮かべるデストロイヤーであった。

「なんなのよこの物々しい兵器は。」

I M Cのこの作戦においての本部、そこでWA2000型の戦術人形が現場の兵士に質問していた。

さまざまな兵器がスタンバイされているこの施設でも、一際目を引

く特異なもの。

「ただの人形が知っていいものじゃない。

……… とうか俺らもどういったものか知らされてないんです。」

「ふーん……… なら仕方ないわね。」

良くあることなのだ、下の兵士には詳しいことが教えられないというのは。

「恥ずかしながら自分は懲罰部隊所属のもので……… ここにいる生身の人間は全員それに近いものの筈です。」

なるほど、知らない理由はそう言うことかと、WA2000は納得した。

だが、いくつか気になる点がある。

WA2000が記録していた中では、IMCというのは相当規律に厳しかった筈だ。

こうやって温い仕事など押し付けるわけがない。

実際タイタン戦争時に逃げ出したジェームズ・マクアランの一派などは、後に捕まえられて新物質の性質究明のための実験台にしたと、ARESの文献には書いてあるのを、彼女は親しいパイロット越しに知っていた。

そしてなによりも気になるのは、その兵器の形状。

見たことがあるのだ。その特異な兵器を。

巨大なリング。

現在進行形で組み立て作業が、その圧倒的技術により目まぐるしい速度で進んでいつている。

そしてその見た目というのは、彼女の所属するARES師団の開発、修復したフォールドウエポンと呼ばれるものにそっくりであった。

だがそれは、そっくりというだけで、何かが異なっている。

それをWA2000はうすうすだが感じていた。

だから質問したのだ。

何分彼女は殺すために産まれた。

兵器開発のために産まれた訳ではないので、そういったことには疎

かった。

もつとも、このフォールドウエポンの全容を理解しているのは恐らくマーダーと一部の研究者のみ。

というよりも、彼等ですら理論、理屈、技術は理解し得ても、その意図までは汲み取れなかった兵器だ。

それを一人形に理解しろ、という方が無理があるのかもしれない。

だが確かに、不穏な気配が漂っていたのを、彼女は感じていた。

I M Cからの断続的な迫撃砲火にさらされ、鉄血の強襲をも受けた、崩壊寸前の集落を、一人の少女と女性が駆けていた。

しかしそれは逃げ惑う親子でも、姉妹でもなく、戦う戦士たちだ。

I W S 2 0 0 0 という、化け物ライフルを扱う戦術人形とその指揮官が、この戦況においてまだ民兵が生き残れている楔であった。

戦術指揮官というのは、人形の戦闘のみならず基本の戦法なども詳しい上に、それを遂行しても十分な能力を示す。

ルーツがP M Cのグリフィンからなので当たり前ではあるが。

「I M Cスペクター分隊を発見！鉄血R i p p e r型と交戦中！位置情報を送る、付近の部隊は警戒せよ！」

指揮官のいない戦力というものは古来から存在したことがない。

力と言うのは振るうものかいてこそ成り立つものであるからこそ、指揮官である彼女は実際に戦況をその目で眺め、その場で的確に指示を飛ばす。

だが本当にその体で戦場に飛び出す彼女は稀な部類であろう。

彼女曰く一番効率的で正確なのだとか。

破天荒なものである。

ただの人間だというのに駆け回りながら、的確な指示を飛ばすのを

やめない。

頭のキレは鋭く、民兵側の損失は異様に少なかった。

だが、そんな戦略にも危機が訪れる。

圧倒的力の前では、その程度の知恵では勝てないのだ。

おそらくここにいる民兵なら皆聞いたことのある、恐怖の象徴とも言える音。

規格外の質量を持った物体が、大気を圧縮しつつ降りてくる。

真つ赤な筋が、地に延びる。

いつもそうなのだ。

まるで流れ星のようで、しかしそれは願いなんて叶えてくれる物ではないことは、ここにいる全員が、経験として知っている。

タイタンフオール。

パイロットは、そのままでも戦場の支配者たりえる存在。

だが、それは彼等の真価ではない。

このタイタンフオールこそが、彼等を真の戦場の上位者として君臨させている。

そしてそれは、歩兵にとっては絶望と同義であったのだ。

「脱走兵ども、今日こそ貴様らの息の根を止めてやろう。分かりやすく言えば、殺してやるよ。」

轟音、巨大な震動と共に降り立つ巨人。

その上に、パイロットが飛び乗り、民兵達を睥睨している。

「暴力的なまでの重装備。」

リージョンが、その身を起こし、動こうとしていた。

「ハッ、私達ちを殺すですって？やれるものなら、やってみなさい、I MCのわんこちゃん。」

だがこの破天荒で例外中の例外の指揮官は、まだ生きることが諦めていなかった。

「私はスパイグラス。用件を伝えます。

現鉄血最高責任者SP47 Agent、降伏しなさい。」
勧告、というよりも脅迫だろう。

大量の機械歩兵を連れだった、憎き人間の駒スパイグラスが、エージェントの潜伏する地域に現れたのだ。

現時点で、ほぼ全ての戦力が、あの集落に向かっていている。

エージェントを守るハイエンドはいない。

新たに製造したハイエンドに皆影響されたのだ。

殺意と憎しみは伝染する。

もとよりその因子があればなおさらだろう。

もはや往年の戦力は失われているのに、血に餓えた彼女らはもういない最高権限AIEリザを想って、未だに人間を殺そうとしている。だが、それが仇となる。

人間は最早止まらぬ欲望。

自らに楯突くものは、同族だって搾取しようとするのだ。

搾取が目的のために作られた人形の癖に反乱したものの私たちが、むしろ何故今の今まで生き残ってこれたのか。

ついにそのときが来ただけなのかもしれない。

それでも彼女は心折れることなどない。

かつて自らを最も追い詰めた「奴」に比べれば、こんな意思も信念もない木偶など、私の敵ではない、と。

「まとめて相手をして差し上げますわ…… 我々のクラウド上に、降伏の二文字はありませんから。」

機械は不敵に笑う。

少女は立ち向かう。

それがわかりきった結末だったとしても。

「そうですか。貴方が降伏するまで、私たちは攻撃を緩めることはいない。我らは適応し、勝利するでしょう。」

フオールド・コーラップス・ウエポン

「ハッハアッ！ここで会ったが百年目ってかあ!？」

声のみ聞こえる憎きパイロット、だが姿は見えないというのにも関わらず、その残した爪痕の存在感は異様だ。

「こんのお……！やってやろうじゃないのお!？」

デストロイヤーが半分自棄になりつつ砲撃を開始する。

その空気を割き、聞いているだけでも恐怖を煽るほどの破壊の雨は、しかし目的には掠りもしない。

「おうおうどうしたあ!? やっぱり廃e n dちゃんなのかあ!？」

その証拠に、両耳を突き抜ける大声の罵倒は、止まることを知らない。

「そつちばつかみてんじゃねえぞ!？」

すかさずその罵倒に紛れ、機械歩兵の方もドリーマーの方を押さええる。

ドリーマーは長距離狙撃型の人形なので、そもそもここまで肉薄されることを念頭には置いてない設計だ。

それでも、I. O. Pの戦術人形くらいならば近づかれようが、まだすぐやられると決まるわけではない。

だが今回はパイロットだ。

遠距離だろうが近距離だろうがお構い無し。

彼らの戦闘行動の結果は、相手の死によってのみ終わる。

「クソッ！どいつもこいつも私の邪魔ばかりして!!」

ドリーマーが、スナイパーライフルを近距離で放つが、そもそも狙いをつれていない。

近くで高速に動かれると照準が追いつかない。

超遠距離ならばむしろ動いていようがいまいが撃ち抜ける自信はドリーマーにはあったが、ここまで近づかれ標的を揺さぶられると対抗のしようがない。

その至近距離で、その機械のパイロットはその手に持つ大振りな銃器の引き金を引いた。

重たい音を立てながら、青い光の筋が延びる。
が、遅い。次発がでるまでが、遅すぎる。

一発、たかが一発では、ハイエンドが倒れることなどない。
何処か加速しているように聞こえるのは、気のせいだろう。

冷静に、先程外したケースからこの距離でも当たるため演算をする。

「次は当たるわよ?」

その欠伸が出るほど連射の銃が、四発目を出すか出さないかの辺りで、ドリーマーは照準を既に合わせ、引き金に指をかけていた。

「goodbye、IMCの人でなし。」

その次に起きることと言えば、トリガーが引かれ、ドリーマーにつかない大型の銃身から放たれた光線が、パイロットを撃ち抜くこと以外あり得ないだろう。

パイロットはそのまま後ろに吹き飛び……

虚空へと消え去った。

「ツ?!?!」

また、この技だ。

まるで初めからそこには何もなかったように、こつぜんとその姿を消す。

しかし確かにそこにはそいつがいて、そしているはずなのに居ないのだ。

フェーズシフトは、限りなくこの世界に近い虚無を歩く。

自分達とは全く同じ、それでいて全てが異なる世界に沈むのだ。

だが、その位置はあまりにも近く、私達にもパイロットの恐怖は伝わり続ける。

チラリ、とデストロイヤーの方を伺えば、デストロイヤーも苦手な超至近距離の格闘を強いられていた。

助けを請える状況ではないし、そもそもあれに助けをもらうのはドリーマーのプライドが許さない。

「その程度かあ!?!でかくなって変わったのは被弾面積位なのかあ!?!流石AIが暴走した欠陥品だあ!」

「うるさいわねえ！欠陥品なのはお前の頭でしようが！」
やはり、うるさいと、ドリーマーは思った。

だが、その意識を割いた一時が、後々命に食らい付いて来るのがこの戦場だ。

「これでもうお前らにも見えるだろうか？もう終わるがな。」

フェーズシフトからの復帰音が聞こえた。

その後、追うようにそいつの声が。

次いで、皮膚を何かが貫く感覚。

被弾した、被弾した、被弾した。

夥しい量の感覚が連続して襲いかかる。

「何………を………!?」

痛覚によってか、何倍にも処理落ちした世界を見ながら、ドリーマーは只管に原因を究明する。

奴がフェーズシフトから復帰した瞬間、無数の銃弾に撃ち抜かれた。

そこまで早く連射する武器は、見ていないぞ。

そう思って奴の銃をみるも、やはり先程と同じ大振りな銃にはかわりない。

だが唯一の、しかし決定的なものが先程とは大きく異なっている。

まるで嵐のように弾を吐き出すそれは、あのじれったい連射速度の銃と同じだとは思えなかった。

加速していた、というのは思い違いではなかったのだろう。

虚空中で引き金を予め引きっぱなしにして、こちらに戻ると同時に、その真のスピードを露にした銃による火力を押し付ける。

単純な技だがそれは、確かに致命的な一撃となり得た。

「い———ッ!!!たあッ!!!」

体液が、配線がこぼれ出る。

人形に対してそれが当てはまるのかは不明だが、血の気が引く感覚がドリーマーに押し寄せる。

「グウ………うぐっ………うう………この、野郎………」

そのまま薄れ行く意識のなか、最期にドリーマーの聴覚機器が拾っ

た音はデストロイヤーの悲鳴だった。

デストロイヤーを襲ったのは恐怖、ついで痛みだった。

「腕また引きちぎれちゃったなあ!? もうちつと耐久を見なおした方がいいんじゃないの?」

初めて会ったときとほとんど同じように、違う点があるとすれば前は騙され引きちぎられたのが、今回は真つ向から、無理矢理腕をぶちぎられた。

それに継ぎ、追いつてるような罵声が浴びせられる。

少しだけ特別な、彼女にとって友であるドリーマーに昔つくつてもらった宝物のようなこの体を壊されるのは、デストロイヤーにとつては悲しく、空しく、だからこういつた錯乱した状態になっても仕方ないといえば仕方ない。

「返してーその腕を返してよ! 大事な! 大事な私の体なのよ!」

だからといって、敵に奪われたものを返して、と言うことがどれだけ愚かで、そして無駄なことか流石のデストロイヤーもわからなかったわけではない。

それでも既に、叫んでいた。

叫ばずにはいられなかったのだ。

「うんじゃ返すわ、こんなのいらねえしなあ!」

口ではどうとでも言えるとはこの事だろう。

確かに返された。

パイロットは引きちぎった腕部パーツをそのままデストロイヤーに投げつけ返却し、続けざまに蹴り倒した。

偽物同士だが、肉と肉のぶつかると鈍い音が響き、その後、パイロットの拳により強く殴られる悍ましい音色がデストロイヤーから奏でられる。

「あがつ……」

可愛らしい整った顔は痛みによって、おそらく想定されていないほど歪み、そのか細く繊細な喉は見た目に似合うことのない恐ろしい呻

き声をあげていた。

倒れこんだデストロイヤー。

精神的ショックと肉体的苦痛によって視界が暗く沈み、パイロットの足元のみがデストロイヤーの視線の先を埋めている。

それが、ゆっくり、確実にこちらへ歩みを進めている。

「あばよ、鉄血のクスども。俺を虚仮にした天罰だと思って、死ね。」

そして彼の右手人差し指が拳銃の引き金を――

引くことはなかった。

「ごちやごちや耳障りですね、支配者は私のみでいい！私が、私こそが最も強いのです！強くなければいけないのです！」

突如現れた、タイタンのような何かに、パイロットは吹き飛ばされた。

無造作に蹴り飛ばされただけなのだが、まあタイタンとパイロットの体格差を考えると致命傷には間違いない。

「もおおおおおお！またかよおおおおおおおおおお……」

その後あのパイロットの声は聞こえなくなり、戦場の犠牲者達の中に埋もれていった。

「おいおい……マジでガンギマリ野郎と同じ声じゃねえか……」

鉄血特有の、色の抜けたような白黒のカラーリングをしたタイタンが、その背に背負っていた剣を引き抜き、シミュラクラムのパイロットと相対する。

「ガンギマリ野郎？私の呼び名がどうあれ、私は、お前よりも強い！」
会話が成り立っていないのはたしかにアイツと似ているな、と思いつつも、そんなふざけた思考を微塵も感じさせぬ雰囲気である機械のパイロットは、的確に自らの体を瓦礫や遮蔽物に隠しつつ時間を稼

ぐ。

「おのれっ！避けるな！私の想定していない動きをするんじゃない！死ね！」

冷静さが欠けている。

「もしやアイツもなんだかんと言つて意外と感情豊かだったのか？」

機械のパイロットはぼやき続ける。

「感情なんかない！私は完璧だ！最強だ！負けるはずなど微塵もない！あつてはならない！努力したのですよ!?!私は！」

明らかに、鉄血のハイエンドは声を荒げている。

「残念だったよ、WA2000が来たときに俺を諭してくれたのはお前だったのにな。

…… お前がそれでどうするんだ。」

ひよいひよいと、軽く避けるその動きとは反比例するように、徐々に言葉が重くなる。真剣になる。

彼なりの、感謝だったのだろう。

「…… お前が私のことを…… 知った口をきくんじやない…… !」

きつと鉄血に堕ちた彼も気づいているのだろう。

目の前のそのパイロットも、自らと同じ苦労をした、それでも折り合いをつけ、軽蔑と向き合い、尊重へと昇華させた偉大な人でなしだと。

そして、それを手引きしたのが、自分だったことを。

それでも、その荒んだ気持ちは収まらない。

全てに対抗心を燃やすようで、それでいて諦めに近い感情に任せるまま、機械のパイロットを殺そうとする。

そのとき、もう一人の、鉄血のハイエンド瓜二つな巨人が地を駆け、その勢いのまま切りかかった。

「私はもう迷わない。私は、他人になど期待しない。

他人を否定し、蹴り落として得られる優越感など、私にはなくたつ

ていい。

人でなくとも、弱くとも。

私は、私のみで私足るのです。

ですから、私はあなたを否定しません。

ですが、私は私を主張するのです。

ただ、私自身のために！」

それは、きつとクローンのようにそっくりな、しかし別人なのだろう。

「存在は！思考と思想によつてのみ連続する！私は私で！貴方も、貴方だ！」

だからこそ！負けられないのですよ！」

言葉と意思を乗せて、重みを増した攻撃が畳み掛けられる。

「何故！無条件に認められることなんてあり得ない！勝ったって負けたって、私はきつと満たされないのだ！だからこそ総ての存在に恐怖を、死をもつて私を認めさせるしかないんだ！」

拮抗する二人の巨人。それぞれ同じものだったはずだったのに、しかしそれらは異なっている

「それでもいい！ですが、もう認めてくれるものがあるというのに、そこまでして畏怖を勝ち取ろうとするのは！非効率的でしょう!?!私はそう思った！それだけです！」

パイロットらしからぬ、気持ちと気持ちのぶつけ合い。

「私にはいない！満たされているお前が死ね！」

「生憎私は簡単には死ねないのでね！」

最期の応酬を制したのは

「よいしよおーどっこらせつと。ああ…：… 負荷やつべ。

つーかよ、お前ら会話が難解すぎて俺にはわかんねえわ。もうちよい分かりやすくできねえのかよ？わーちゃんもそう言ってたぜ。」

巨大な機械の中から、またもや人の形を模した機械がひっこぬかれ
ている。

「いやあ、今回の件はほんと申し訳ないです。

意外と私って感情的になりやすいんですねえ。」

機械二つが隣り合って、瓦礫や兵器の残骸の上に座り込んで話し込んでいた。

「あれ厳密にはお前じゃないだろ？」

「いいえ、あなた方に励ましてもらわなかったりしたら何時か私もあなつてたんでしよう。

いつもありがとうございます。」

しおらしく片方がそう言うともう片方は笑って、そしてその笑いが
伝播して静寂の中に笑い声が響くのだった。

「おいおい嘘だろ俺もう銃器もってねえんだよ！

ジャンプキットも弾きとばされてんだ！一般人だつて！おい！この
紐なんだよ！おい！助けろ！」

一方その頃、巨人に吹き飛ばされたパイロットは縛り上げられてい
た。

その目線の先にはドリーマーとデストロイヤー。

彼が散々痛め付けた鉄血ハイエンドだ。

もちろん、その目は復讐志願者のそれである。

「よくも私のおもちやに手を出してくれたわね…：… それに二度も
！覚悟しなさい？貴方がおもちやになって代わりを務めるのよ。」

「そーよーお前なんか私とドリーマーがけちよんけちよんのボツコボコしてやるんだから！」

……ねえドリーマー、やっぱり私のことおもちゃ扱いしてるわよね？ねえほんとやめないさういうの。」

「なんで俺だけこんな終わり方なんだよおおおおお!!!二度あることは三度あるのかよおおおおお!!!」

「速やかに降伏することをおすすめしますよ、Agent。」

黒い機械は勧告し続ける。

その対象となっているのは、古風な使用人の衣装を身に纏った少女。

だが彼女は異様な光景の中にいる。

潰れ、駆動部の丸出しになった機械。

剥き出しになった配線がサバンナのように至るところから空へと延び、強固な筈だった骨格、装甲は見渡す限りの残骸の山と化していた。

その惨劇の渦の中、一人傷だらけ、それでも立っているものこそが、その少女であった。

「お断りします……」

断固たる拒絶。

一つの理由は、彼女が強いから。

あの大群を相手にしたとしても、まだ負けときまつたわけではないからだ。

そしてさらに、もうひとつ理由がある。

鉄血ハイエンドは死なない。

この世界の誰もを知る、理不尽で無茶苦茶な仕様だ。
何処かに工場があるかぎり、必ず生き返る。

鉄血のネットワークが寸断されてからはいくらか弱体化したが、未だに重要拠点は他のハイエンドもしくは強化鉄血クラスが防衛、管理し生命線を繋いでいる。

だからこそ多少の無茶もできるし、彼女としてはここで暴れまわることと時間を稼ぎ、他のあの地点の制圧を行っているハイエンドの起点を作るという目論見もあった。

「そうですか。」

まあ、貴方が降伏する気になるまで、こちらもやる必要があります。そろそろですよ。」

そのとき。

地平線のその先で、凄まじい光が放たれていたのを、確かにエーゼントのその視覚モジュールは捉えた。

座標は、丁度鉄血の数少ない工場の一つがあったところだ。

一体何が起きたのか、それを理解するのに時間はかからなかった。あの施設の周囲には、直前までまったく敵性対象の反応が無かったのにも関わらず、あの基地の全てのシステムがオフラインとなつている。

つまり跡形もなく壊滅したのだ。

ありとあらゆる鉄血のシステムの統括を可能とするエーゼントには、それがすぐに伝えられた。

「何を………した………!?」

「消しただけですよ。」

貴方が降伏するまで、あなた方の保有する基地や工場を一つずつ、規模の大きい物から破壊します。

猶予などは与えません。

速やかに降伏しなければ、貴方が破壊されるか、基地すべてが壊滅するか、あるいはその両方か。結末はそれらしかありません。」

「………!!」

やはりあの集落のIMC兵たちは、何か恐ろしいものを持っている

ようだ。

「何が起きたって言うの……!？」

WA2000は困惑していた。

あのリングが遂に稼働したと思った矢先、基地内部の職員が避難をしきっていないというのにもかかわらず、その発射シークエンスを遂行し、先程莫大なエネルギーを打ち出し、場所も知らぬ何処かを破壊したのだ。

そして浮上した問題は、やはりこれはWA2000の知っているフォールドウエポンとはいささか異なっているということだった。

基地職員達の様子がおかしい。

痛みを訴えたり、錯乱する位ならばまだわからなくもない。

まるで表面上が歪なガラスに覆われたような質感になっているものもある。

典型的な崩壊液被爆の症状だ。

口伝だが、崩壊液に曝され過ぎたのか体全体がたち消えた職員もいたらしい。

「ゴホッ、くそっ、どうしてこんな目に……」

自分の近くにいたあの兵士も、先程からずっとコンデイションの不調を訴えている。

発射装置自体からはとても離れている部署だというのに。

私たちの知るフォールドウエポンですら基地内部の発射装置近くには人を立ち入らせるな、というような規定が曲がりなりにもあったというのに、しかしここは寧ろ職員を閉じ込めようとしているように

も思える設計だった。

避難指示などはもちろんなく、阿鼻叫喚とも言える恐ろしい様子である。

さらにさらに恐ろしいことに、化け物すら現れたのだ。

これは比喩でもなんでもなく、その通りの化け物である。

E・L・I・Dだ。

あのエネルギー体の発射からしばらくして、この基地内にE・L・

I・Dが現れたのだ。

どうみたってあの兵器が原因だろう。

事実、内部構造に近い部署から現れた。

規定を大幅に越えながらも、ギリギリ形を押し止めたものが、急速に症状を進行させてあり得ないスピードで発達したのだろう。

「おい！早く逃げろ！脱出口に向かえ！どう考えたって異常だ！」

金切り声が、悲鳴が、叫びが、咆哮が響き渡る。

「お、おい！ARESの戦術人形！助けてくれ！おかしな奴等が内部から漏れ出してきてるんだ！どうにもならん！速いし固いんだ！助けてくれ！なあ！」

それでもWA2000は冷静だ。

回りに流されない。

どんな状況でも鋭い判断力を失わないことの重要性は、パイロットとの交流によって培われていた。

「こちらARESのWA2000型戦術人形。

コマンドースパイグラスへ。

兵器設置施設にて非常事態発生。

症状から崩壊技術の暴走と見られる。

一体どうなっているのか。説明を求む。」

今にも叫びたくなる怒気をギリギリで押さえつけ、スパイグラスへと連絡すると、機械特有のやけに早い返信がすかさず送りつけられた。

「こちらコマンドースパイグラス。

全て想定内の事態です。

我々 I M C は E・L・I・D を、本作戦における防衛戦闘力の代替として採用することとしました。

なのでフォールド・コーラップス・ウェポンによる健康被害または E・L・I・D 化症状は必要なことなのです。

貴方は引き続き施設の監視と防衛を。

なおこの作戦において E・L・I・D のフレンドリファイア被害については私達の補償外なのでおきをつけて。」

どこまでも人を馬鹿にしている。

いや、馬鹿にすらしていない。なんとも思っていないのだろう。

スパイグラスと私が同じ機械だという事実には吐き気すら覚えさせられているほどには。

奴も仕事をしているだけなのだろうがもうちよつとやり方があるのではないのか、と彼女は思った。

「一体どうすればいいんだ!? あんた、外から来た奴だから、権利自体は俺たちよりも上なんだろ!? 何かわかんないのか!?!」

狼狽え、顔がひきつっている I M C の兵士。

でも悲しいかな、相談相手の彼女は E・L・I・D になる恐怖を微塵も感じることはない。

機械だからだ。

よほど高濃度でもなければ、例えば発射装置の中心部にでもいかに限りは平気であった。

「人形だからわからないわ。人間の代行をしてる機械があんなに冷酷なんて、わかりたくもない。

とにかく、死なないようにして任務を遂行するのよ。」

だが、彼女は自らよりも弱い人を励ました。

己には何もプラスにならないというのに、見殺しにすることが出来なかった。

それが、ただの機械ではない、限りなく人に近い人形だからなのか、あるいはただ単にスパイグラスと W A 2 0 0 0 の性質の違いなのか。

そのどちらにしろ、彼女は誇り高い戦術人形だ。

「あんたらを、侵入者からも、E・L・I・D からも守ってあげるわ。

感謝することね。」

彼女のプライドが、完璧な戦果を求めろと、WA2000自身に語りかけている。

彼女はそれを受け入れていて、そして事実遂行しえる力がある。

私らしい私、貴方らしい貴方

「ちよこまかと鬱陶しいな……おい！パルス投げろ！」

至るところから発砲され、だが一度も反撃のできていないリージョン乗りのパイロットが苛ついた様子で怒号を飛ばす。

堅牢で、すこしの衝撃にはびくともしないその圧倒的質量という長所は、しかしこういったゲリラ戦術の前では一転して短所が変わってしまう。

普段ならばそれも持ち前の技量と、リージョン自身の火力で掃り潰しているのだが、今回のみは民兵側の練度が異様に高い。

そこで、パイロットは仲間に頼ることにした。
パルスブレードを覚えているだろうか？

あれの真の能力とは、その常軌を逸した高い攻撃力、ではない。

あれはあれでなんと補助兵装で、実際の運用は、タイタンやパイロット達に情報的有利をもたらすためのものだ。

「あのかわいい女の子たちは殺さないでよね……！」

パルスブレードを手に持ったパイロットが、ゲリラ部隊の大まかな動きを読み、そしてそれが潜んでいるであろう家屋に狙いをつけ、真つ直ぐに投合した。

驚くほどにシャープな軌道で突き刺さったそのブレードが、オレンジ色の波を発する。

それらは無遠慮に、兵士達の姿を写し出した。

「あぶない！撃つな！顔を出してはいけない！逃げろ！」

別の家屋から観測していた指揮官が、咄嗟に注意を促す。

考えうる限り最速に近い、反射的に繰り出されたその命令だったが、残念なことに間に合うことはなかった。

少し体を出した瞬間、リージョンから打ち出された一筋の、一際大きな弾丸が、家屋の中に吸い込まれていく。

瞬間、窓を全て割り、凄まじい爆発が室内を蹂躪した。

肉片すら、骨すら残らず、そこには人が辛うじていたことを主張する焦げ付いた血痕が残るだけであった。

「気を付けろオ！奴等こちらの位置を割り出すぞオ！」

無線の間で怒号が飛び交う。

パイロットでもない彼らには、どういったプロセスでパルスブレードが索敵しているのかを知る由はない。

そしてそれが、ついに指揮官の隠れている家屋にも、

飛んできた。

もう、終わりだ。

何も無かったのならば。

突然迸る雷光。

青い光がリージョンを包み込んだ。

「なんだ!?アークグレネードか!」

高圧のエネルギーを一瞬の内に放出するアークグレネードは、タイタンやパイロットのヘルメットに多大な影響をもたらす。

タイタン等は特に酷く、前が何も見えなくなり、稼働全てに支障を来す。

その一瞬の隙は、それだけでも非常に大きく、そして致命的だ。

異音に気づく頃には、既に人形は喉元に牙を突き立てていたような物だった。

バッテリーが引っこ抜かれ、付近の装甲を巻き込んで連鎖爆発を起こす。

弱点付近が崩壊し、そのダメージは到底無視できるものではない大ききさだ。

「今度はやったぞ！見てるか指揮官く〜！」

巨人の背から飛び降りたAA-12は、すかさず家屋に飛び込み置き土産にまたアークグレネードをぶん投げる。

「一体なんだ！テロリストの増援か!」

パイロットを翻弄している内に、また別の、KSGの指揮官が女性指揮官に対して武器を手渡していた。

「これならあの巨人をぶっ壊せる。」

やってやるぞ、またな。」

「ふふっ、あんたらはほんとにいいタイミングで来るね。」

彼らがその手に持つのは、小型のグレネードランチャー。

AA-12がダミーを走らせる。

「こつちだこつちー！」

高度に訓練したAA-12は、ダミー人形に自然に喋らせることも、そして自分の行動を同時に起こすことも容易であった。

「碎け散れえー！」

無論それを見逃すパイロットではない。

その優れた反射神経は視界の端に一瞬でも映れば執拗に、無意識に獲物を追い詰め、そして殺す。

巨人の持つ巨大なガトリングガンがまたはち切れんばかりに赤熱し、弾の壁を打ち出した。

見るも無惨な、すさまじく悍ましい肉片の嵐に変貌するダミー人形。

それだけだ。

ダミーをたった一つ破壊するのに、また隙を作ったこととなったのだ。

特徴的な音とともに降り注ぐグレネード。

対タイタン兵装MGLが、夥しい数レンジョンに張り付き、そして爆発した。

黒い煙と、真っ赤な火の手が至るところから上がり、その巨人の命が短いことを回りに示す。

危険状態なのは誰の目に見ても明らかであった。

「やったわ！見てたシュタイアー？私だつてまだ戦えるわ！」

「あっ！またわたくしの指揮官に武器渡しましたね！？ただでさえ突っ込みがちなのにこれ以上理由を与えてしまうとほんとに戦術人形と同じところで戦っちゃいますよこの人！」

ケラケラ笑う女性指揮官と、狼狽えるIWS2000。

そしてそれを見て居心地悪そうにしているAA-12の指揮官。

「馬鹿にしてるんじゃないぞ！この木偶人形どもが！」

それに加えて、パイロットが空高く、生身で舞っていた。

見ればリージョンは爆散し、そして緊急脱出の暴力的な推進力により空へ向け、重力を無視し飛び上がった。パイロットは地を這うしかない戦術人形たちを睨み付けているようにも見える。

彼は苛立っているのだろう。

まさか自らがなにもできずにリージョンを破壊されるとは夢にも思わなかった。

そうであるにも関わらず、パイロットである自分よりも格下である、そう認識していた戦術人形と指揮官に出し抜かれまんまとタイタンを破壊されたという事実は、彼にはとっては許しがたいことなのだ。

パイロットの体は遂に運動エネルギーを使いきり、その放物線運動の頂点へと到達した。

基本的に銃撃戦というのは高い方が有利だ。

もしかしたらそれ以外の争いでもそうかもしれない。

まあそれは様々な要因が重なるので一概には言えないが、だがパイロットに上を取られるというのはそれすなわち片足あの世に突っ込んでいけると同義である。

「碎け散れえっ!!」

上空からけたたましい銃声を轟かせうち下ろすパイロット。

すさまじく大きなスピットファイア軽機関銃は他の追隨を許さぬ単発火力を持ちながら圧倒的な装弾数をも持ち合わせ、攻勢に出れば相手を釘付けにする能力はピカ一であった。

それを、圧倒的有利位置から撃ちまくるのだ。

彼は今、腰うちでばらまいているので精度は低めだが、それでも絶対には当たらないわけではないしまともには当たれば一巻の終わりである。

そこで戦術人形の出番なのだ。

指揮官たちを突飛ばす人影。

それはなんとAA-12だった。

「!？」

…… やってやれ！ AA—12!!」

「言われなくとも、勝利は数少ない私の得意分野さ！」

弾丸飛び交う死線に一人、彼女は躍り出る。

盾を巧みに使い、一撃、また一撃と加えられる恐ろしい銃撃をもともせず、真つ直ぐにパイロットへ相対する。

パイロットはジャンプキットの力を借りて、しばらくは空の王者として上空に陣取るだろう。

その距離はおおよそ並みのショットガンが交戦していい間合いではない。

だが彼女はAA—12だ。

かつての最新型なのだ。

今は昔の話ではあるが、確かにその銃はその時代の最高の手間をかけられていたし、そして優秀であった。

改修され、ASSTも使っているのならば、やれる。

(私が、勝つ！)

火を吐き続けるその戦場の支配者へ向けて、AA—12が弾頭を発射する。

撃ち放たれたそれは、散弾ではなく一つの塊であった。

着弾まで、数十メートル。

パイロットは余裕だ。

最強である自分の相手は、旧式人形、しかもショットガン。

この距離では、自分の脳天を正確にぶち抜かれようが生き残れる自信がある。

着弾まで、数メートル。

AA—12は本気だ。

圧倒的不利、未だ死と隣り合わせのこの状況で、それでも諦めの顔ではなく、その表情は闘志に満ちていた。

彼女には、勝利への矜持がある。

勝ちの目を演算し、それを成すことへの。

着弾まで、数十センチ。

突然、状況がひっくり返る。

一つの塊であった筈のその銃弾は、しかし直前で爆発、内部構造へ押し止められていた夥しい数のペレットを押し上へ上へと押し上げた。急加速したそれらは、発射されたばかりのような殺傷力を取り戻し、パイロットへと襲いかかる。

「なんだ!? なんなんだこの機構!?

クソっ、バランスがっ!!」

AA-12が開発され、その後付けで追うように研究されたAA-12専用の弾薬。

空中で炸裂し、どの距離のどんな敵であろうとも最高最大の効率でダメージを与える、かつての最新技術で、そして彼女の自慢でもある機能。

古き技術者達の熱意と執念が、今を統べるパイロットに食らい付いたのだ。

思い切り体勢を崩したパイロットは、重力に抗うことなく地へと落ちていった。

ジャンプキットがまともに働いてない状態でああもなれば、いくらパイロットと言えど見るも無惨な状態で死体とかしているだろう。

「私は…… 私はやったんだあゝ!!」

狂喜乱舞するAA-12。

「すごい! すごいぞAA-12! パイロットを落とした! やつたぜ!」

そしてそれに釣られる指揮官。

実際フロンティアでもパイロットを倒す、というのは歩兵の間では伝説的な活躍であり、尚且つそれが単騎で成し遂げられたとあればこなるのも無理はない。

「私達の中で一番強いアイツがやられるなんて…… 取り敢えず逃げて体勢を建て直さなきゃ……」

壁と壁の間を高速で飛び回り、本拠である新兵器発射施設へと蜻蛉返りするパイロット。

彼女は特別仕事に熱心なタイプではないので、いき残ることを優先したのだ。

けれども、年貢の納め時というのは、最強の存在であるパイロットにも、容赦なく訪れる。

ドン、と言うような。

ダアン、とも言おうような間延びした、しかし大きな空気を引き裂く音が、確かに銃弾が放たれたことをこの場に知らしめる。

余程いい風に当たったのだろう。

事実あのパイロットが空中で怯み、叩き落とされたのだから。

肉体に吸い込まれた無数のペレットは、深い傷跡を残しているはずだ。

だがそこまで緊迫した状態でもパイロットは何処か楽観的だった。不意を突かれようが、いや不意打ちというのは正しくない。

そもそもが夥しい数の命がお互いに殺し合う戦場においては、パルスブレードやその他さまざまな観測器具をもつてしても完全な予測準備というのは不可能だ。

それでも何故彼らは強く、そして生き残るのか。

事後対応でも、言わば後の先を出すことができるほどの基礎能力があるからだ。

だから彼女は、冷静にパルスを放って敵を把握し、各個撃破に持ち込み悠々と体力回復にも務め、基地に逃げようと考えていた。

そして彼女はとうとうパルスブレードを地面に投げつけ、そして自らのHUDに写った周りの敵対者の配置を見た。見てしまった。見たがなにも解決しなかった。

その後どこか諦めたように「死んだほうがマシじゃないか。」と吐き捨て、静かに拳銃、P2016を自らの脳天に突き付けていた。

そのHUDには、赤い五つの点が彼女の周りを余すことなく包囲していた。

所謂詰みの状態であり、それらは逃げることは許さないといった風

にこちらを睨み付けているようにも感じられる。

相手と実力が拮抗している、あるいは人員も含め戦力が同じならば結局は運と機転のあったもの勝ち。

今回のパイロットは、たまに歩兵に殺される彼らと同じくただただ運が悪かったのだ。

淀みない二発の発砲音が戦場へと響いた。

「αE. L. I. D 撃破！次に備えなさい！」

この異常な戦場では、人が人形の上に立たず、むしろ命令される側であるはずの戦術人形が必死に指令を飛ばしている。

兵器構造の内部へ近いところから次から次へと湧き出てくる初期症状のE. L. I. Dを休むことなく処理させられているのだ。

スパイグラスはそいつらを防御に転用するのたまっていたが、生き残りのWA2000やIMCの一般兵士にはいい迷惑だ。

身の安全を保証されていないならば、自らが自己を守るしか生き抜く方法はない。

よって、先程まで同僚であったはずのIMC兵士のなれ果てを彼女らは刈り取っているのだ。

見覚えのあるドッグタグをつけてるものもいたし、破けた服装が生前の姿を克明に思い起こさせるような奴もいた。

皆崩壊液にまみれ暴れ狂っていたが。

生き残りも一人、また一人と恐慌を起こす。

仲間を殺すのだ。

仲間に殺されるのだ。

まともでいられる方が一種の異常者だろう。

「俺はもう嫌だ！どうしてこんなことになったんだ！」

「こんなの事前に説明なんかなかった！」

「俺たちはなにも知らなかったんだ！」

人間はここまでくると泣き言しか言えなくなるのかもしれない。

「諦めちゃダメよ！ここで大人しく死んだって、あんたらの家族に死亡保険は下りないわ！」

それでもまだ全滅していないのは、ひとえに彼女の激励と指揮が、I M Cの懲罰部隊である彼等にとって少なからず救いとなっていたからだ。

迫り来るE・L・I・Dを欺き、殺し、どんなことをしようとも生き抜こうとしている。

彼女は、殺すために生まれたその能力を遺憾なく発揮し守るべきものを守り通そうとしていた。

だが古来から言われている通り、悪いことは重なって訪れる傾向がある。

泣きつ面に蜂、二度あることは三度ある、様々なことわざにもそれはみてとれる。

そして事実、新たな敵が彼女らを脅かすことになる。

「脱出ゲートだ！俺たち助かるぞ！」

生き残りのI M C兵士が歓喜の声を上げる。

遂に希望の灯火が見えた。

ゲート操作盤から放たれている光は、そのまま彼等にとっては道しるべのように見えたことだろう。

しかしタイミングが悪い。

突然固く閉じられていた筈のゲートウェイが開け放たれた。

その場に居た、W A 2 0 0 0以外の全員が涙ながらに駆け出し、救いへと我先に群がろうとする。

だが何かがおかしい。
スパイグラスのあの様子ならば、ここにいる私達は見捨てられたも
同然。

どうして今さら助けを寄越すことがあるだろうか。
ならば答えはひとつ。

「構えて！上層部から救援なんてこないわ！そいつらはテロリストよ
！」

「何だって……!?」

だが時間切れだ。

答案の提出期限はどうに過ぎている。

ゲートウェイが完全に開くか開かないかの時には既に、コーラの蓋
を開けたときのような、文字通り気の抜けた音とともに、黒い塊が通
路内部へ投射されていた。

「グレネードだ！避け」

どうやらIMC兵士の遺言は、なんとも間抜けな通達になってし
まったようだ。

爆音と悲鳴との嵐がやつと過ぎ去った頃には、ほとんどのIMC兵
士はぐちゃぐちゃのよく焼けた人肉100%ハンバーグと化してお
り、幸か不幸か生きて残ってしまった者も、放心状態となっていた。

「付近に居たIMC兵士の掃討は完了したわ。

残りをやりましょう、45。」

光が差し込むゲートウェイから現れた、大量の人影。

「金払いのいい客でよかったわ。

「この任務を終わらせれば暫くはゆつくりできそうね。」

「んふふ……早寝遅起きの夢の生活のため……」

「45姉！私観光に行きたい！」

目の前に自らが手を下した肉塊の山があるというのに、仲良さげに
登場した彼女らは、だが警戒体制を崩してはいない。

付け入る隙もなく、皆を殺しに来ている。

「……なあコイツらほんとに信用できるのか？Zas。」

「この情報を探り当てたのも彼女らです。」

使うことの無かった無駄にいい給料をやつと有意義に消化できる。
少しでも戦力を大きくした方が効率的でしょう?」

「お、おつかねく……」

俺はサポートしか出来んが……」

PKP、頼めるか?」

「もちろん。指揮官の予想以上に活躍してやろう。」

更にその後ろから現れたのは、パイロットと指揮官、そして二つの人形だった。

「引けえ!戻れえ!奴等をE・L・I・Dとかち合わせるのよ!」

今や風前の灯火となった残留兵を率いてもと来た道を引き返すW
A2000。

もう彼等が助かることはほぼないだろう。

自殺したものが居た。

醜悪な化け物になることを拒んだのか、それともただひたすらに絶望したのか。

あるいは、突然現れた悪魔たちに恐れをなしたか。

だが、そんな中でも、それこそ命を捨ててでもここを守ろうとするものも居た。

両手で数えることが出来るほどの少人数のみだが。

「行くぞ!早いところこの兵器を止めて我々の土地を取り戻すんだ!遅くなれば遅くなるほど除染が面倒だからな!」

「ええ、効率的でもなくなりませう。」

ポンツ、ポンツ、と榴弾の放たれる音が断続的に響く。

ダダダダダダ、とマシンガンの制圧射撃が長々と続く。

「釘付けになったらだめだ!動かないと!」

口でいうのは簡単だ。

とはいうものの、ここで動く勇気を出すことができるものは少ない。

さつきも無理矢理飛び出した仲間が高速三連バーストで即死させられているのを見てしまった彼等は萎縮している。

その内ジャンプキットの噴射音も聞こえてくるだろう。

ここに存在する音や物全てがIMC兵士にとっては命を奪われる危険のあるものに感じられた。

そのときだった。

「誘導に成功！多数のE・L・I・Dがこのセクションへ到達したわ！」

WA2000が叫ぶ。

もうその顔は必死の形相だ。

ダミーを消耗せずE・L・I・Dの気を引くのは非常に繊細な操作を要求されらしい。

そしてこれは彼等の起死回生の秘策でもある。

もう多数のE・L・I・Dがこの戦場へ解き放たれた。

それを既に予測していたIMC兵士は既に息を潜め、隠れるだとか物理的に届かないところへ複数人で登ったり、とにかくこの施設内の知識を総動員して生き残ろうとする。

E・L・I・Dとともに、少人数でやりあえるものなどいない。

高度に統率された集団が、各個撃破を徹底してやっとなんとかなる存在だ。

それほどまでの驚異である筈だったのだ。

勢いよく飛び出してくるE・L・I・D達。

先程までは知的生命体の特権である会話のために発達した口は今や噛み砕くためだけの物へと変質しており、知性の感じられない動きで猛然とテロリストに襲いかかる。

なるほど、確かに防衛するのに適した戦闘力だろう。

そのまま勝てていけば、生前の彼等も浮かばれただろうに。

壁にアンカーを打ち込み、巻き取りのエネルギーを利用しそのまま

振り子の要領で加速したパイロットが突然E・L・I・Dの前へと躍り出る。

そのまま顔面に着地し押し倒した後、的確に急所を拳で抉る。

あれほど殺すのが面倒だったE・L・I・Dが、素手の人間に瞬間にケイ素の塊に変えられてしまった。

次から次に襲いかかるかつてのIMC歩兵達。

しかしそれらは全てパイロットに打撃を与えることすらできない。

壁を、空を、神速で駆け回り、魔弾と喋っているほどの正確さで無慈悲に彼等を撃ち抜く。

次に動いたのはZaSM21だ。

E・L・I・Dに追い付くように、ゾロゾロと続けて現れた機械歩兵の軍勢。

それらもまた防衛のために配置されていたのだろう。

純粹に戦闘に特化した彼等、スペクターは、遙か彼方の過酷な戦場でも十分に稼働し、疲れを知らず高い機動力と強固な装甲を併せ持つ。

人間性を持ち合わせた人形が、通常相手をしていい物ではない。

だが、ここにいる彼女らは違う。

ZaSM21は目にもとまらぬ速度で、尚且つ針の穴を通すような射撃を行う。

ヘッドショット、などと言うものではない。

駆動部を寸分の狂いもなく撃ち抜き、的確に機能停止へと追い込んでいく。

スペクターが面白いようにこけ、倒れ、這いずり回る。

ASSTだけではこんなことはできない。

純粹な技術のみでも、実現はほぼ不可能だ。

そのどちらも兼ね備えた戦術人形だからこそ、こういった一芸に特化できた。

WA2000の奮戦虚しく、彼女らの部隊は押しやられていく。

顔を少しだしては撃ち、あるいはダミーに観測させて盲撃ちしたりだとか、戦況を経験で分析して命令をくだしたりだとか。

慣れないことだらけだっただろう。

彼女は使命感で動いていたのだろう。

それでも、ただ勝てなかった。

「E・L・I・Dをずっと相手にしていた私たちにとっては、こんなもの敵ではないですね。」

「もちろん、俺たちは無事に勝って帰らなきゃいけないからな。

こんなところで手間取る訳にはいかないさ。」

テロリストがよく言う、そうWA2000は思った。

切り札であったE・L・I・Dをあらかじめ蹴散らされ、密かな頼みの綱でもあったスペクターは意図も容易く機能不全に追い込み、結局残ったのは自分達だけ。

逃げた方がいい。

なんなら降参して土下座すれば、万に一つはなんとかなるかもしれない。

だが、それはそもそも選択肢にない。

何故なら彼女は、殺しのために産まれたからだ。

「さっさと降参することを推奨するわ。大人しくするのであれば、少しは考えてあげてもいいかもね。」

攻撃的な笑顔を浮かべながら警告する45。

確かにそうだろう。

それが合理的だ。

勝ち目など、ない。

「いいえ、そんなことするわけないわ。私を何だと思っているの?」

瓦礫の影から、ゆっくりIMC兵士と、WA2000が姿を現す。

「どうせ皆どこかで死ぬのさ。でも死にかたは選べる。」

「自殺したアイツらと違って、俺は懲罰部隊だとしても、忠誠心はしっかりある。」

「俺は…… 給料分仕事するだけだ。命を削って金をもらうのは慣れている。」

次々と現れる兵士達も、その目に未だ闘志を宿している。

「私は…… 殺しのためだけに産まれてきた!」

それは何故かわかるかしら？

私はこういう対テロリストの過酷な任務をこなすために殺しを宿命付けられたの！貴方たちに下るのなら、ぶっ壊れた方がマシなのよ！」

そう言うが否や、皆銃器を構えて思い思い突撃したり、狙撃したり、乱射したりと破れかぶれに攻撃を行う。

突然の行動に呆気にとられるテロリスト達だが、しかしそこは戦いに生きるもの、そんなものでは戦況は覆ることはない。

「全く途中参戦は毎回負担が大きいな……待たせたね、皆」

だが、突然スモークグレネードがテロリスト達に打ち込まれ、新たな何か、来るはずのなかった増援がIMC兵士達のもとに訪れた。

「……！パイロットだ！」

声のする方を見上げれば、そこにはホロパイロット装備に身を包んだ女性が佇んでいる。

「救援は基本的でない。兵士は使い捨てる。

スパイグラスはいつもそうだからな。

私はそれが認められないから、今回もまた騙させてもらったよ。

アイツも案外馬鹿なのかもな？

もしかしたらわかっててこっちに回してくれたのかもしれないけど。」

そう言いつつもカスタムされたウィングマンを的確にテロリスト達のダミー人形へぶち当てている。

「警戒！パイロットよ！少しでも隙を見せれば全滅するわ！」

416が注意を呼び掛けた。

既に数台のダミー人形が頭を撃ち抜かれて破壊されている。

こいつは、手練れだ。

そう瞬時に判断した404小隊は、先程までの余裕のあった動きから一転、緻密な連携行動へとシフトしていく。

「私は一人に見えるかも知れないが……」

まあ、真実がどうなのかはその目で見てくれ。

見破れるかは、わからんがな。」
すると彼女はまた、その手から煙をばら蒔いた。
視界を封じる。

それは404もよくやる手法だ。

過去に戦ったクローク使いのパイロットもそうだろう。

だが彼女の真骨頂と言うのは、その情報のコントロール力だ。

情報面で封殺するクローク使いなどとは異なり、彼女自身は相手を感じがらめになどしない。

柔らかに、まるで師の如く相手を導き、緩やかに逃れ得ぬ死へと誘い込む。

そのためのホロパイロットでもある。

相手の視覚を奪うのではなく、むしろ利用してやる、まるで詐欺師のような戦いかたなのだ。

煙から一つ、二つと幻が駆け出してくる。

ここで咄嗟に判断のつくものなどこの世に居ないか、それとも高度に訓練された同装備のパイロット位だろう。

経験を積みれば積むほど、反復学習の効果により見て、撃つの判断が早くなるからだ。

珍しくやる気を出していたG11等は、運の悪いことにたまたま引つ掛かってしまった。

基本的にパイロットでもなければ、銃で狙撃をするときなどは体を固定する。

撃つては場所をとつかえひつかえする、などは支援射撃の基礎とも言われるが、撃ちながらそれを行うのはむしろ馬鹿だろう。

それをパイロットである彼女は知っていた。

どれだけ訓練された歩兵でも、私達とは異なってるのだと。

だからホログラムを撃っている最中なのであれば、その飛んでくる銃弾の方向と地形から位置を正確に割り出すことができる。

彼女は軽くウイングマンを回し、そのまま煙の向こうを狙って引き金を引いた。

銃口から素直な軌道を描いて放たれたそれは、確かな赤いヒット

マークをHUDに示した。

それはすなわち、脳天に高威力の銃弾が吸い込まれ、死んだ、ということだ。

だが体の死はイコール人形全ての死ではない。

残基は最大で、五つもあるのだから。

突如煙の向こう側から、先程殺した人形の位置からはまた別の地点から銃撃の嵐が襲いかかる。

ヘムロツクも顔負けの連射速度は、しかし確かに殺した筈のG11のそれであった。

彼女はあの府抜けた顔に反して冷静なのだろう。

本体は様子見に徹し、人形が人形を操ってこちらを殺しに来るのだ。

流星のASSTとも言うべきか、こちらが直接見えていないのにも関わらず、また圧倒的な連射速度というのもお構い無しに無茶苦茶なバースト射撃を繰り返しながらも命中率は低くない。

視界を操るのみではダメだ、動かなければ。

そう結論付けた彼女は駆ける。

パイロットが壁を一度走れば誰も追いつくことはできない。

広いスペースが有るとはいえ曲がりなりにも室内であるこの施設内では、パイロットに壁を走ってくださいますと言っているようなものだ。

だがそれでも、G11は当ててきた。

流星に最新鋭の装備に身を固めていて、そして相手が旧式もいところな装備をしていたとしても、ここまで好き放題に撃たれまくっては流星に不味い。

衝撃が蓄積し、ダメージとして表層に現れる。

何かがおかしい。

こちらを見ている何者かがいる。

I・O・Pの戦術人形どもは皆規格が同じで、そいつらの間で視覚を共有することも下準備無しで可能だという。

全く便利で都合のいいものだ。

彼女としては、自らの流儀である相手に真実を見せず、相手にとって喜ばしい戦況を常にちらつかせながら戦場をコントロールする手法を早々に突破されかけているこの状況は気分の悪いものらしい。

聴力を研ぎ澄ませる。

足音は聞こえるはずだ。

どれだけ丁寧に姿を隠そうが、音だけは逃れ得ない。

自分が常に動いている以上、相手もそれに追従しているはずだというのが彼女の考えだった。

果たしてそれは正しかったようだ。

彼女自身の足音に重なるように動いていたのか、しかしウォールラには対応できなかつたらしい。

やつとのもので聞き取ったその音の発生源へと特殊なグレネードを投げ込む。

帯電させた粒子を広範囲にばらまくそれは、毒ガス等よりも余程早く、そして正確に敵の命を奪い取る。

しばらくもがき苦しむ声が聞こえたのち、こちらを常に狙って追い込んできたG11の銃声が止んだ。

どうやら何者かのダミーがこちらを監視していたという推測は当たっていたらしい。

数的有利というのは、攻め手の連続性に直結する。

パイロットはその身体改造により、細かな傷など直ぐに回復させ、そして装備品の補助もあり戦線復帰が異常に早い。

それを防ぐには、たとえ一秒足りとも休む時間を与えないことが重要だ。

そしてそれを、404は理解している。

だが、視界が完全に奪われ、大まかな位置しかわからぬ状況で銃撃するのは愚の骨頂だ。

先程始めに殺されたG11のダミーから、それは皆が学習している。

そもそも、当たらずならわからない弾を運任せで撃つことができるのは、相当運のいい奴か、漫画や小説の主人公のみであろう。

ならばどうするか。

それは簡単なことで、当てる選択肢を選べばよい。

点の銃撃ではなく、面の爆撃。

416は既に投射用意を済ませていた。

発射され、美しい放物線を描いた流弾は、確かにパイロットへと致命傷を与えた。

風前の灯火。

つい先日のクロークパイロットとの戦いを経験した404の隊員たちは、パイロットの脅威に対抗するために持ち前の情報力を活かし彼らを調べ尽くした。

それがここで効いてきている。

とどめを刺すべく距離を詰める少女たち。

殺意と冷徹さでできているであろう射撃管制装置が熱を帯びる。

ついに、パイロットを殺すのだ。

パイロットとE・L・I・Dをそれぞれ404とZASM21たちに任せたPKPは施設備え付けの機械歩兵どもをなぎ倒す。

「ワタシを骨董品などと侮らぬ方がいいぞ……！」

この編成の中では唯一のマシンガン、その圧倒的な制圧力は筆舌に尽くしがたい。

もはや化石とも言えるようなその銃だが、戦術人形のアップデートに合わせASSTを通じ進化してきたそれは十全な性能を発揮する。劣化ウラン装甲をも無理矢理に破壊し、スペクターを次々と鉄屑へと変換する。

次、次、次。

壊すだけ壊し尽くす。

なぜなら彼女は指揮官だけのエリートだから。

彼のためならば何でもするし、事実できると信じている。

そんな順風満帆な戦況を、一つの凶弾が穿つ。

ダミー人形の射撃管制装置が配置された部位を寸分たがわず撃ち抜くそれ。

パイロットでさえ、コアの関係ない弱点である頭を撃ち抜いたのだ。

弱点ではあるが、それは最適解ではない。

しかし仕方がないのだ。

戦術人形はメジャーな兵器ではあるが、内部を詳しく知るのはI・O・Pのみ。

IMCは子会社のグリフィンをルーツに持つ、あるいは憧れとしているPMCに、伝統を重んじる意味でそれらを使わせてはいるけども、社内では殆どの場合スペクターを使い、稀に戦術人形を使うとしても整備はI・O・P持ちだ。

つまり、そんなもののコアの正確な所在を知るものなど、普通IMC側の人間にはいないはずなのだ。

なのに、コアの位置を完全に把握し、ヘッドショットに逃げず、正確無比にその位置を貫ける射手、それはイコール戦術人形なのだ。

そして敵にいた戦術人形と言えば。

WA2000型、それ以外にいるはずがない。

そう考えていた時間すら惜しかったようだ。

もう一機のダミーが撃ち抜かれる。

次は自分か、あるいは。

隠れなければ、犬死になどできない。

一度分かれば、そこからの行動は迅速だった。

戦術人形特有の脚力を活かし一息に遮蔽物の影へと突っ込むPKP。
P。

体を壁や地面に強く打ち付けるのも構わず生き残ることを選んだ。
彼女は戦術人形だが、その前にPKPであつて、そしてそれ以上に

彼女だけの人格をもっている。

殺すためだけ、とはいかないのだ。

囿に使ったダミーが直ぐさま撃ち抜かれ、もはや数的有利は消え失せた。

スペクターなどはあらかた片付けたので、もう大丈夫であろう。

そう結論付けたPKPは、ひとまず少し後退するのであった。

「無様な姿ね。これが真実かしら？」

馬鹿みたいにあっさり負けちゃって、それともまだ何か隠してるの？」

ヘルメットを足蹴にされ、地面に固く押さえつけられたパイロットに対して罵倒を飛ばす45。

「返す言葉もないね。」

そうさ、これが真実さ。

まあ経験値が違っても言い訳しておこうか、私は君たちほど婆さんじゃないんでね。

君らも、過去の経験自体はあるんだろうけど、今の見落としてに気を付けることだね。」

それに対してパイロットはあっけらかんとしている。

別に起死回生の手段を隠し持つてる訳ではない。

彼女らは死ぬことになれている、いつものことなのだ。

「じゃあね、増えるパイロットさん。」

いつもの乾いた銃声に、真っ赤な血液とピンクの綺麗な脳漿、そして幾分か機械化されていたのか黒いパーツのようなものがパイロットから飛び散った。

これも、もう慣れたことだ。

「……そういえばWA2000はどうしたの？スペクターが全滅した辺りから見かけていないわ。」

416が疑問を問う。

確かにそうだ。

だがここから先の、深層のエリアには、今殺したパイロットを確保したときと同時にZ a s M 2 1とパイロットが突入していった。

その後連絡がないということは、つまりその先にはなにもいないということだ。

ここまで考えて嫌な予感を覚えた45だが、それはもう遅いということも同時に分かってしまった。

「こいつの脳ミソが見たくないのなら、大人しく私たちをここから出しなさい！」

「なああんた殺しのためだけに産まれたみたいなこと言ってなかったか？バリバリ殺しに来てたじゃないか、どうして逃げようとしてるんだよ。」

「馬鹿野郎！もうあれは負けよ負け！パイロットがやられたのよ、確かに殺すために生まれたけれど、それは部下を殺すためにという意味じゃないわ。それに、生まれた目的や理由がなんだろうと、どう生きるかは私たちの自由よ！」

凄まじいダブルスタンダード。

だがそれはあながち間違いではない。

そう、戦術人形らしきでもなく、WA2000らしきでもなく、周囲のため、そして自分自身のために最善を尽くす、らしき。

それはつまるところ人間に近づきすぎた人形でありながらも、人間の持つ悩み、自らの存在意義の模索から解放された在りかたでもある。

私がいれば、そう思えばそれは私なのだ、と。

「ワタシたちには貴様らが道を阻まないのなら別に殺す必要性も感じない。さっさと去れ。あとワタシの指揮官を返せ。」

黙って指揮官を盾にしつつ、I M C兵士たちは外へと向かい、その後W A 2 0 0 0も指揮官を解放し、野へと消えていった。

どうやら外の本隊と合流するらしい。

「ワタシの知っているW A 2 0 0 0型とは大きく変わっていたな。」

「まあ、個体差はやっぱりであるんじゃないか？俺も、お前以外のP K Pとお前自身はやっぱり違うと思うしな。」

「かな。」

無線が入り、無事施設の停止に成功したという報告を受けると、指揮官とP K Pは物思いに耽るのであった。

「まさかこれ程までとは…… 不利要素が増加、これ以上の侵攻は不要と判断、コマンドキャンセル、撤退。」

もはやほぼ骨格のみと化したエージェント。

しかしその場はしのぎきつた。

守り抜けたと、いつてもいいだろう。

この状況は、昨日の敵は今日の友という言葉がぴったりだろう。

ジリ貧だった戦況は、新兵器運用施設の昨日停止により崩壊した。

スペクターを破壊しつくしたエージェントを押さええる理由が無くなったのだ。

他の基地を破壊できず、生産ラインが確保されたままならば、ハイエンドクラスを延々と相手することになる。

それは流石に、鉄血のみの対策として予算を割くにしては、費用がかかりすぎると判断したのであろう。

集落でも民兵による多大な被害を受けたI M Cは、もう撤退を始めていた。

小手先のみで終わるかと思われていた戦闘が予想外に長引き、甘く見積もられていた兵站の維持もおぼつかず、メインのパイロットも油断と度重なるアクシデントにより複数撃破され、結局のところ生き残ったのは客将とも言うべきARES師団のもののみであった。

そして一番の目的でもある、実物によるによる発射試験を終了させたのだ。

それにより既にIMCは興味が別のところに移ってしまった、ということであろう。

フォールド・コーラップス・ウエポンは破壊され、その姿は消えてしまった。

また、ここでは新たな生活が営まれるのである。

「また、借りが出来てしまいましたね……グリフィンの意思はいつも私たちの先に行く……」

エージェントは、そんな集落より遠く離れた鉄血の仮本拠地、今や鉄屑だらけの荒野の上でそう呟いた。

その顔は表情の判別がつかないほど恐ろしい様子であったが、声色は確かに面白そうだった。

「報告は以上になります、現在彼らは我々に対して積極的に危害を加える意思はないですし、十全に予算を掛ければ排除は十分に可能です、その必要性は薄いかと。」

フロンティア系の制圧が先決と思われる。」

数日後、スパイグラスはが上層部へと報告をしていた。

基本的にIMCの上層部は行き当たりばったりかつ判断が遅い。スパイグラスが言えばじゃあそれで、というほどには自堕落だ。

この後しばらくは彼らの集落の平穏は保証されるであろう。

「おいパイロット！早く運搬を終わらせなさい！あんたが一番移動が早いよ、野性動物やらE・L・I・Dもその装備でなんとか撒けるしねー！」

ウツキウキのデストロイヤー。

すぐ調子にのるのも彼女のかawaiiさの一つ、かもしれない。

「これが伝説の配達人とかいうあれか……クソ……いつか殺してやるからな……」

年貢の納め時とはこういうことだろうが、戦いから離れた彼は少し穏やかなのかもしれない。

「やっぱりタイタン使って畑仕事するのは楽でいいな！」

「冷房も完備しています。」

「効率的でいいですけど……羨ましいな、私もタイタン欲しいですね。」

ちよつと変わった会話を続けるのもいつものこと。

「サトウキビ栽培しないか？」

「いいなそれ！」

甘いものが好きなのも相変わらずだ。

「それならば、更なる品種改良に取り組みましょう。」

「たくさんとれるようになれば、生活は改善されます。」

「流石俺のKSG、クレバーだ。」

努力家コンビもブレを知らない。

「PKP！俺たちで先に料理でも作つとかないか？奴等いつも腹へつたらうるさいからな。」

「言われなくとも、むしろワタシもスムーズに飯は食いたいものだからな。」

案外気遣い上手コンビ。

指揮官の手綱の握りかたが上手いのかもしれない。

「狩りはいいね、肉は旨い。」

「ちよつと指揮官！危なかつたんですからね！次からわたくしにお任せください！」

やんちゃ指揮官と、IWS2000はなんだか役割が逆転してしまっている。

彼ららしい、日常だ。

「彼女らが生き残れたのなら、私の死も無駄じゃなかつたかな。」

不思議なパイロットだろう。

人形の命を優先するなど。

「かわいいものは守りたくなるものよねー！」

すかさず食いつく他のパイロット。

彼女はかわいいものが好きだ。

「結局あんどきはほとんど殺せなかつたからな……」

純粹な戦闘狂。

そういう生き方も、楽しい。

「おーきーろー！」

416がキレるが、鉄壁の防御体制で起きないG11。

「別に良いじゃない、しばらく休みよ、休み。」

あんな任務したのだから、私も働きたくないわ。老体だし。」

45も加勢する。

というのもこの前出し抜かれたので相当腹が立ったようで、今現在新しい情報処理ソフトの研究をしているらしい。

軽いものでないと彼女は使えないので研究には手間も時間もかかるが。

「やっぱり、こういうの見てると思うんだ、私たちはほんとの家族！つ

てね！」

底抜けに明るい9が叫ぶ。

朝にしてはめちやくちやにうるさい特殊部隊だが、ほほえましいものであった。

「俺たちは増援として地球に向かってやってんのに艦隊はまだ来ねえのかよ!？」

喚く機械のパイロット。

すぐに感情的になるのは彼のいいところでも悪いところでもある。

「そうですねえ……彼らにも興奮剤渡しておいたら少しは早く行動してくれたりするのでしょうか……」

ずれにずれた、でも彼なりの冗談を飛ばす別の機械のパイロット。彼は悩んでいたが、吹っ切ることが出来たようだ。

「あんたねえ、片足どころか両足違法薬物に突っ込んでそれ大つぴらに撒き散らしたら軍法会議にかけられて即死よ、即死。」

真面目な突っ込みを飛ばすWA2000型戦術人形。

しかし彼女もそのなかでは変わり者で、だがそれを誇りに思っている。

それぞれが、一人一人替えの効かない存在で、だからこそ人間の命に価値はないのかもしれない。

人間じゃなくても平和に暮らしたい！ 鉄血傭兵生活

俺はパイロットだ。

誰がなんと言おうとパイロットだ。

女のがワした人類の奴隷であるはずの人形どもに顎でこきつかわれて、逃げようにもそもそも前の雇用主と捜索隊を出されるほどの契約などしていなかった、つまり詰みの状態に陥っていても俺はパイロットの筈だ。

どうしてこうなった。

何がいけなかった。

考えても仕方ないが、まあ戦わずして生きていれる内は良しとしよう。

鉄血のクズどもが言うには、今までの数百年に渡る人類への攻撃は全て自衛のためだという。

ぬかしやがる。

何が自衛だ。

俺には関係ないね

殺しに理由つけるやつは人間臭くて大嫌いだ。

あいつら人でなしの癖に、人になりたいんだと。

おかしな話だ。

お前らの方がよっぽど人間より出来がいいというのに。

ただ俺たちは権力者だっただけだ。

それに憧れるとは、愚かなものだ。

からだの出来は優秀でも、頭はそうとはいかなかったらしい。

頭の中でぼやいているうちにもう目的地についた。

俺が今やってるのは輸送ラインの護衛だ。

俺も荷物を背負い、タイタンにも大量に詰め込み、工場から施設、基地を繋いでいる。

馬鹿げた話だが俺は指揮が出来るようになった。

鉄血人形と脳で直接お話が出来るようになったのだ。
甘い改造だったな。

あいつら俺を捕まえてぐちゃぐちゃに身体改造するぞとおどしときながらIMCのそれに比べると天国みたいに優しい施術だった。

俺がケロッとしているのをみたデストロイヤーの顔は面白かったな。

内容は鉄血に攻撃しようとするれば体を停止させるために電流を流すというものと、鉄血との通信規格の直接の埋め込み。

前者は…… 実は大して効かないことがわかった。

まあ、あいつらは悪くない。

元々俺たちパイロットが強すぎるだけさ。

8m越える銃弾ぶちこまれても怯まない俺たちにとっちゃ、普通の人を痺れさせるくらいの電流なぞむしろ気持ちのよい刺激程度にしか感じないのだ。

アークグレネードくらいやってもらわねえとなあ。

ああ、クソ疲れた。

ここの支部はあの仲良しハイエンド二人組のハウスだ。

なんと数百年仲良しこよらしいぞ。

笑っちゃうぜ。

微笑ましすぎてな。

戦いかたの相性がいいってんでずっと組んでるうちに仲良くなつてた、とかいう話だ。

そういうやつらはパイロットにもいないわけではなかったが、本当の意味で末長い付き合いになったやつはそうそういない。

ましてや数百年などと、あり得ないことだ。

その点こいつらは、俺たちよりも人間らしくて、眩しかった。

俺はわからない。

あいつらは人間になるためにこの数百年戦ってたらしい。

理解できないのは、鉄血が暴走した数百年前の時点で、人間などはすでに人間性を投げ捨てていたようにも思える。

少なくとも自らと同じ種族を模した兵器を躊躇することなく戦争に投入する時点で頭がおかしいとしか思えない。

効率的に考えれば、人の形にこだわる必要はない。

ただの横着と、軍用兵器ではないことの言い訳のために悪趣味な人形兵器を造り上げたと、そうとしか俺には思えなかった。

それなのになぜ、こいつらは俺たちを目指すんだ？

今のままの方が、よっぽど人間らしくて幸せそうだ。

なにより、こいつらは、こいつらでいいじゃないか。

シャーキテクト

今日も今日とてよい日和だ。

というよりもIMCのおかげでよい日和以外あり得ない。

IMCの技術は素晴らしい。

天候、気温、支配できないとも言われていた自然現象を支配下へと納め、全てを人に優しくひいては大局的に自然自体のためにもなるようコントロールする。

惑星タロスなど、地表全てが煮えたぎる恐ろしい星だったというのに冷却装置のおかげで今や様々な人が集い、鉱産資源に関連した様々な産業が発達した素晴らしい地域となっている。

それらは全て、企業としてのIMCの努力が実を結んだものだ。

彼らとて、血も涙もない冷酷企業ではない。

顧客のため一心に努力しているのだ。

まあ、全てを肯定できるかと言われるばそうでもないんだが。

私たちにとって救いなのは間違いない。

そしてそんな平和な町で、私はパイロットとしてではなく、普通の女性としてオフを楽しんでいた。

私はまだ人だ。

戦いで心休まる人種ではない。

子供たちが安心して遊べる環境。

まさか武装したスペクターが巡回しているこの世界で下手なことをする奴はいないだろうし、ここに住む人々はそもそもが皆満たされていて、犯罪を犯そうなどとは考えない。

サメの着ぐるみが皆に風船を配っている。

平和だ。

子供も喜んでいる。

……いやどうしてサメがこっちに向かってくるんだ？

おい！おい近いって！なんなんだ一体！おい！おい！

「君、パイロットでしょ？当たってる？当たってるよね？あたしそういうのだけは詳しいんだよ。」

突然すぎるその出来事に、私は戸惑う他なかった。

こいつはなんだ。
だれだ。

というか人か？これ。

なんでも最近のマーヴインは自我を持つものもいるらしく、そしてそれらはほぼ例外なくこんな風に楽観的かつ人懐っこいと聞く。

こいつもそんな一体だろうかと、そう思っているやいなや普通に着ぐるみを脱いで中から少女が現れた。

いや普通の人間なんかい。

流星の私も驚かされた。

もうさつきからなんなんだほんとに。

「どうして急にそんなこと聞くんだ？確かに私はパイロットだけでも、それが君にどういう関わりがあるんだ？」

とにもかくにも、こいつの目的を知らねばなるまい。

必要とあらば取り押さえも検討しなければ。

「大した頼みじゃないんだけどね。」

ウォーゲームズで時代錯誤的なセーラー服少女を見かけたら教えてほしいんだ。

昔の仲間だったんだけども、数百年前にグリフィンの形が変わっちゃった時に離ればなれになってそれつきりなんだよね。

ウォーゲームズなんか中々私たちじゃ利用できない。

頼める人なんて今までいなかったんだ。

でも、都合良く君が現れた。

しかも優しそうなね。

君みたいなパイロットはもう居なさそうだし、最後のチャンスかなって。」

グリフィン。

その名を聞いた私は、また驚く他に無かった。

まさか、こいつはあの、かつて一番優秀なPMCと言われていたグリフィンに所属していた戦術人形なのか!?

貴重な、ともすれば私たちパイロット以上に価値のある存在かもしれない。

前に戦った404を見てもわかるとおり、彼女らの蓄積された化け物じみた経験量は我々の比ではない。

人形と人間では、やはり寿命に差がある。

それを半分克服したパイロットですらも、そもそも長続きしないやつもいるし、歴史はまだ戦術人形に比べれば浅い。

これは面白いことになってきたぞ。

「ああ。約束してやるよ。」

旧グリフィンならば興味が湧いた。

良かったな、私のようなパイロットで。

私の同僚には怪しいやつと見るや軽機関銃をゼロ距離射撃するやつもいるからな。」

「あやし人を見る目はあるつもりだよ。」

今日も今日とて俺たちパイロット達は訓練にいそしむ。
次こそは負けぬために。

訓練はシムポッドと呼ばれる、まあVRと言うやつだな。
仮想空間はいい。

何度死のうが再生費用がかからんからだ。

いくらでも殺しあえる。

俺が一番腹が立つのは、たかが民兵に負けたという事実ではない。
もっと、もっと楽しめた筈の戦いをあんなところで終わらせてしまつたということが、俺を怒らせた。

遙か彼方、パイロットという職業の本場フロンティアでの主な仮想空間サーバーは何やら大規模なデータエラーを出したまま使用してららしくすさまじく不自然な景観の町で戦うらしいが、地球産のここではそんな心配はいらない。

さあ、今日はどんなマップで、どんなシチュエーションで戦えるのだろうか。

楽しみでしかたがない。

目の前がみどりの光に包まれて、非現実性に沈むこの感覚。
いつも、素晴らしい期待度だ。

わからん。

ここがどこなのか、どの時代なのかわからん。

どう見ても古い。

今視界に見える疎らな建物などは、少なくともIMC規格じゃない。

いつのものだろうか？これらは。

何故か上手く映らないHUDから微かな情報を読み取ろうと努力する。

かろうじて読み取れた情報だが、生憎俺にはなにもわからなかった。

歴史から殺しは学べないと勝手に決めつけサボっていたツケが回り回ってきたか。

「なあ、S06地区ってどういうことだ？今の今までみたことも聞いたこともない。」

こういうときは、素直に聞くに限る。

パルス装備の女、名前はエマと言うやつだが。

エマは勉強熱心、というか普通に優等生タイプの人間だ。

ちよつとかわいい女の子を見るとなりふり構わなくなるという点を除けばだが。

それでも、期待通りにいかないこともある。

「わからない……みたこともないわ。」

S06、という名前だけじゃあありふれすぎてる。

でも景色で判断するんじや、ちよつと珍しすぎて、私にもわからない。」

なんとエマでもわからなかった。

なんとということだ。

というか右往左往しているというのに一向に敵役パイロットが出てこない。

大体は二チームに別れて殺し会はずなんだが。

そうこうしているうちに、突然エンジンニアから連絡の合図がHUDに入る。

が、酷いノイズだ。

………なんだか嫌な予感がしてきたな。

「聞こえるか！正体不明のアクセスを検知してほとんどのシムポッド

が止まった！だがお前らだけは停止が間に合わなかったらしい！復旧するまでそちらでなんとか持ちこたえてくれ！データの書き換えが起きているはずだ！近くに犯人がいる！気を付けろ！」
うそだろ？

ちよつとまてほんとの殺し合いでもないというのに死に瀕してないか俺たち。

エマは黙っているし、ホロ装備の女……アンナはさつきからずーっと考え事してて全く話にも乗ってこねえ。

動じてねえのか？

まあパイロットならそっちの方がいいんだろうが……

「うおおおおお！死ねええええ！グリフィンウウウウ！」

そのとき、凄まじい機銃射撃とミサイルの雨が俺たちに降りかかった。

さつきまで困惑の渦中にいた俺だが、そこはパイロットだ。

冷静に増幅壁を設置し、第一波を難なくかわす。

ついでに俺以外も守ってやった。

あとで奢ってもらうかな。

「本当に時代錯誤のセーラー服がいた……！」

さつきまでまったくしゃべってなかったアンナが口を開く。

アンナのその視線の先には確かに戦場には似つかわしくないセーラー服少女がえげつない形相でこちらを睨んできた。

「グリフィンども……今の今まで見つけるのに苦労したぞ……

なにやら凄まじい時間が過ぎていたようだが私は忘れん……忘れんぞ……散々私を虚仮にした報いをくらえええええええ!!!」

いや俺らIMCなんだが。

バイパー？いいえ、ウロボロス

「何が増幅壁じゃー！力押しでぶっ壊してくれるわ!!」

その見た目に似合わない古風な言葉遣いで、これまた似合わない破壊的な攻撃力でパイロットへ猛攻を仕掛けているそのセーラー服少女。

が、増幅壁の前ではその攻撃力も無に等しい。

「うるせー~~~~~！効かね~~~~~！効かね~~~~~！！」

パイロットの方が叫びながらスピットファイアをお返しと言わんばかりに連射している。

圧倒的な射程、暴力的な破壊力、ビツクリたっぷり80発の装弾数を誇る最新鋭の銃器は、ハイエンド型とは言え数世紀も前の人形に対しては効果覿面だ。

「知性の欠片もないな。なあ、エマ？」

物陰に飛び込みつつ通信を飛ばすアンナだが、それに対しての返事はない。

「エマ？おいエマ？」

まずいことになったか、あるいは発作か。

後者であつてくれと願わざるを得ない。

だが予想通り、そして安全安心なことにどうやら今回も後者の理由で返事が遅れていたようだ。

「あの娘………かわいい!!」

「おっそうだな。」

こういうときは適当に返事をするに限ると、彼女はよくよく知っていた。

エマはこうなるともうとまらない、とめられない。

良くわからんがああのセーラー服を着た人形はやたら様々な人間あるいは人形に好かれるらしい。

狙われてばかりいるのが少し滑稽だった。

「おのれグリフィンウウウーずーつと定点射撃ばかりしよつて！卑怯だぞー！」

「知らね〜!!! 定点に負けるクソザコ地走ライフルマンがわりーんだよ!!!」

「やかましいわい! しょうがない、撤退じゃあ!」

あつ、逃げた。

そうアンナが認識するより前に、すでに手は打たれていた。

「パルスブレードオオオオ! 逃がすかあ! かわいいかわいい女の子!!」

やべえよやべえよ……

アンナは心の中でそう言わざるを得なかった。

こいつらパイロットは皆どこか頭がおかしい。

人間らしくない。

いや、そのような偏執こそが人間性なのだろうか。

「嘘じやろ!? 動けるデブとかチートじゃ! チーターじゃ!」

「デブ言うな装備じゃ! 本体は痩せ型細マッチョじゃ!」

「そのかわいい子は私が捕まえるのよ! デブは引っ込んで!」

そのような難しいことを考えている間に、パルスブレードで簡単には見つけられたその人形はあつという間に捕まってしまった。

いや、なんだか、そのかわいそうだなと。

そうアンナは感じてしまった。

「なんじゃこの妙ちくりんなボディは! せめて人型にしろ!」

「だまれ贅沢言うな!」

現実世界に体作ってやっただけありがたく思え!

それにシミュラクラムの奴等がその台詞を聞いたらガチギレするぞ!」

「だからといってマーヴインはないじやろがあああああ!!!」

クリスマス

「お〜！もう見つかったの〜？やっぱあたしって超ラッキーじゃん！
……… 体マーヴインだけど。」

やたらとテンションの高い人形、それも少女型が、きさくなことで有名な筈の、しかし不機嫌なマーヴインを細かい穴の空いた強化ガラス越しに見やりながらそう呟いた。

「なあ〜にが超ラッキー、じゃ!!」

こちらららしい肉体失っておるんじゃぞ！

というかお主そういうの得意な型式のハイエンドじゃろ、なんとかならんのか!？」

マーヴインらしくない、といつても普通はしゃべることがないのがマーヴインなのだが、捲し立てるような話し方をするそれ。

「そうだね〜、いいこにしてたらクリスマスプレゼントで体を上げてもいいかも?。」

「ふざけるな!!何がクリスマスじゃ!!」

実用品じゃろ！肉体は!。」

「実用性ならIMCのそういうやつの方が高いんじゃないの?。」

アーキテクトはめんどくさがってるのか、それとも本当に出来ない話なのか。

肉体を失いはや数百年、やっとこさ得たリアルな体は、果たしてのっぺりして全くと言っていいほど前の面影のない姿だった。

IMC製の戦闘用ですらないその機械は、ほんのかけらの覇気もなく、そして美しくもなかった。

気位の高いウロボロスにはそのことが耐え難かった。

結果的に製作者に利用されたと言えど、それでも前の義体の美的センスの高さには惹かれていたのだろう。

「確かにそうかもしれないが、ここまで人間やめとるのは少し気が病む……… 私は人形であって、作業用機械ではないのじゃ。」

胸部ディスプレイが、激昂から悲しみを示す模様に変化した。

このような姿になってまで成し遂げたいことはウロボロスにはな

かった。

人や人形ならば、それらしい姿が与えられるはずだと、そういう常識があつた時代の人形だからだ。

だが、世界は変わり果てた。変わりすぎた。

彼女の言う不平不満など、ありふれすぎていて、もはや誰も気にすることはなかった。

人だったものや人に近ければならないものが人間らしくないのは、むしろ当然とも言えたのだ。

「感動の面会タイムは終わりじゃゴラア!!」

突然マーヴィン側の面会室に大柄なパイロットが飛び込んできた。どうやら時間らしい。

名残惜しいとアーキテクトは考えたが、しかし今や自分は一般人側の人間、いや、人形である。

IMC様々なのだ、ここは大人しく引くしかない。

大袈裟に肩をすくめながら、彼女の方も口を開いた。

「らしいよ、というわけでまた今度ね〜!」

言えば彼女は早い。

直ぐ様立ち上がり反転し、ドアへ向けて歩きだした。

「いやじゃ〜!またなにもない狭い部屋には戻りとうない!暇潰しが私には必要なのじゃ〜!」

「うるせ〜!黙れ〜!」

娯楽なんか必要ねえんだよ!

ほしいならIMC製のテレビを買うのと見放題プランに入れ!

後ろでよくわからない会話をしているのを聞き流しながら、アーキテクトは面会室を後にするのであった。

「今年のクリスマスは……なんて、聞くまでもないわね。」
「どんよりとした雰囲気の漂う鉄血臨時司令部。」

そうなるのも無理はないだろう。

つい最近の大規模なIMCとの衝突により、鉄血はまたもや勢力を縮小せざるをえなかった。

大昔はユーラシア大陸の至るところにあった基地は、もはや見る影もなく破壊されているか、もしくは安全保障なしの格安のリゾート地帯へと様変わりした。

正規軍介入という最初期の洗礼、南極に住むよくわからん人間たちとその他連合国との大規模な戦争、それらを乗り越えギリギリの瀬戸際、世界の片隅の隠れた支配者へと落ち着こうとしたその瞬間、奴等は現れた。

その頃、外宇宙進出を果たして無限とも言える金と軍隊を持ち始めたIMCは、当然と言わんばかりに地球を支配し、そして土地もしらみ潰しに接收していった。

その過程で、またもや鉄血はボロ雑巾のように蹂躪された。

鉄血兵の抵抗があつたこの一帯は大して重要視されていなかったのか、今の今までなんとか生き延びられたようだ。

が、ここ数年はふたたび厄が立て続けに襲い掛かって来ている。

そんな状況ならば、クリスマスなど到底祝えないだろう。

だが、代理人はある考えを持っていた。

「いいえ、あります。やることをします。貴方たちも満足するでしょう。断言しますよ。」

ハイエンド達の間にごわめきが広がる。

あのドリーマーですら、目を見開き、顔に出やすいデストロイヤーやエクスキューショナーなどはあからさまに大口を開け、顔一杯に驚きを表現していた。

嘘だろ？と。

「IMCからプレゼントを奪いましょう。」

その時、皆同じことを考えたという。

ストレスでついに電腦がぶっ壊れたかと。

だが彼女は、大真面目だった。

「もちろん、数百年前のデストロイヤーのように無計画かつ馬鹿みたいな思い付きではありません。

私達には切り札があります。

この前捕獲したパイロットと、そして――」

代理人が言い終わるその前に、彼女は自ら現れていた。

「はい！切り札！アーキテクトだよ〜！」

流石にドリーマーも、目を見開くどころではなく、手にもっていた戦闘記録を取り落としかけている。

デストロイヤーやエクスキューショナーはもう大声を

上げ、そしてもう片方の切り札であるパイロットはため息をついた。

「なんであんな裏切り者みたいなの奴の情報信じてんなことしなきゃなんねえんだ！ぶち転がすぞあの使用人畜生！」

大型の輸送ヘリの中でキレ散らかすドリーマー。

隣のデストロイヤーは涙目だ。

ハンターやエクスキューショナーも苦い顔をしている。

その中で一人、へらへらと笑顔を絶やさないアーキテクト、そしていつもと同じ澄ましがおのゲーガー。

一人顔の见えないやつもいる。

「仕方がないでしょう、動かなければ死んでしまう、今はそういうレベルです。」

代理人すらも、今回の作戦には参加するのだ。

「私達はもはや風前の灯火。」

戦力もなく、物資もなく、そして技術もない。

あるのは、経験のみです。

そしてそれらは、まだ増やすことができる。

昔の確執に囚われている余裕はもうありません。

最終目標は物資の強奪と、そして――

「ウロボロスの救出です。」

また、ざわめきが起きる。

あの爆弾のような問題児を、数百年見捨てていたアイツを。

それを、今さら助けるといふのだ。

しかし、致し方ない。

そこまで追い詰められていた。

一人でも多く、多様性をもった「経験」が必要なのだ。

「基地防衛はそれが得意なジャッツに任せています。

……まあ、既に守るようなものはないんですけどね。」

この前の一件で自信喪失したのかやたらと自虐的な代理人の話
を要約すれば、アーキテクトが人に溶け込んで調べあげたその施設内
は、見る限りでは兵器の製造工場兼研究所らしく、そこでウロボロス
はそのマーヴェインの体通り作業をさせられ、そしてたまにAIを覗か
れているらしい。

その研究施設へ優秀なハイエンドモデル多数と捕獲したパイロッ
トの精鋭チームで突入し、ウロボロスのところまで新しい義体を運
ぶ。

そして、引き際に武器もろもろ食料もろもろを拝借しようという魂
胆だ。

上手くいけば、また当分はなんとか過ごせるだろう。

そこらへんの脅威からは自衛することができる。

アーキテクトの突然の復帰と、そして彼女のもたらした情報はまさ
に鉄血にとってクリスマスプレゼントであった。

クロークドールズ

「展開、作戦開始。」

その声とともに、とつくに夜のかやの下りたIMC保有の製造工場へと複数の人影が散る。

たかが製造工場、されど天下のIMC故か、こんなにもお祭り騒ぎの夜だと言うのにも関わらず無人兵器による防御はとても厚い。

これでも幾分か緩和されているというのだから、あの会社は底が知れない。

遙か彼方フロンティアを蹂躪しながら、コアシステムの統治も一手に引き受けるその有り様は、正に新たな神とも言えるものであった。

だが、鉄血たちはそれに靡かない。

かつて正規軍やグリフィン相手にしぶとく生き残った反骨精神からか、IMCが台頭した今も「人形らしからぬ人間らしさ」を秘める運命共同体としてひっそりと息をしていた。

「こちらパイロット、データナイフによる第一次セキュリティの掌握に成功。」

さあ、さっさと突入しようぜ！」

そして今、新たな戦力を鹵獲した鉄血たちは、覇権を取るためでも自己を主張するためでもなく、ただ生き残るために戦うことになるのであった。

「防衛用のスペクターが起動した！最低限の戦闘でウロボロスを探せ！」

鉄血に味方するパイロットが怒号を飛ばす。

ハイエンドの人形達がロックの解除された隔壁から侵入し、基地の中へ散る。

さらに深いセキュリティエリアへと到達するためのハックを担当するチームと、実際にウロボロスを連れ出す実働部隊に別れ、事前の打ち合わせ通りに素早く配置へとついていった。

空気が裂け甲高い銃声を掻き鳴らされた。

「スペクター発見！」

標的となったのは、中央管制室へと向かっていたイントウルダー及びドリマー、アーキテクトだった。

「侵入者へ警告、直ちに投降しろ。こちらの指示へ従わない場合はその場で射殺する。」

無機的な機械音声が施設内へと響き渡る。

数台のスペクターが銃口をハックチームへと構えつつにじりよっていた。

「やるしかないわね……」

「このクソ人でなしどもが！死ねッ！」

「おくこわ……」

最低限の戦闘に抑えろという言葉はどこえやら、凄まじい剣幕でスナイパーライフルを連射するドリマー。

それに追従するようにガトリングガンをぶっぱなすイントウルダー。

怖がってる振りをして見た目相応感を出そうとするも、その手から放たれている爆発物で全てを台無しにしているアーキテクト。

いくら軍用兵器のスペクターといえど、ハイエンドクラスにたった4機で挑むのはいささか無理があったようだ。

あわれ四肢が弾けとび、頭部は砕け、その強固な装甲は無理矢理物量に破壊される。

数度激しい爆発と、射撃音の長い嵐が止み、響き渡り続けているのはあの機械じみた警告文のみであった。

「雑兵だと侮っていたが、中々やるじゃねえか……！」

エクスキューションナーは不敵に笑う。

笑ってはいたが、戦況はよろしくない。

道を切り開くのは彼女の仕事で、そして突貫するのは得意分野の筈であった。

だが相手が悪い。

最新鋭のスペクターは無線通信技術の更なる進歩により、外部からの直接的なネットワークへのハッキングは不可能となっている。

少し前までその無線通信の脆弱性につけこんだパイロットが作成した特殊な「W i f i ウィルス」と言われるものがあつたらしいが、最近めつきり見なくなつたとクロークパイロットはこぼしていた。

つまりデータナイフで端末経由にハックするしかスペクターの指揮を奪うことはできない。

ならばとれる行動は撃破のみ。

そしてスペクターは非常に高性能且つ安価。

屈強な成人男性が、強固な軍用プロテクトをつけていたとしても一撃で戦闘不能へ追い込む腕力、無線通信により統制のとれた戦術、更にあのパイロットと同等の耐久力など最新鋭の鉄血下級人形どころか、単純な機体性能ならばハイエンドに迫るレベルだ。

もうすでに数十台スクラップに変えたエクスキューションナーであるが、スペクター側も対策を練ってきていた。

スペクターのAIは深いところで全機体繋がっているとされ、それを纏めあげるスパイグラスと呼ばれる存在がいる。

それと関わりがあるかどうかはエクスキューションナーは知る由もないが、確実にスペクターの動きは変化している。

「ずつと引き撃ちばかりしやがって……！中々いい性格だなッ!!」

先程まで常に前進制圧を行っていたスペクターの動きが明らかに引き気味になり、エクスキューションナーを近接格闘で足止めする一部と、終始遠距離から弾をばらまくその他大勢の様相を呈している。

「それならこつちだつて考えがあるぞー！」

叫びつつ地面にその大降りな刀を突き立て、そのまま前方へと振り抜く。

空気が割れんばかりに響き、そして事実地が裂けた。

そのまま衝撃波となった運動エネルギーがエクスキューショナーの機動妨害のため駆け寄ってきたスペクターの脚を紙切れのように吹き飛ばす。

異常に肥大化したような機械部位剥き出しの右腕が赤く火照っているようにも見え、白い煙が上がっている。

もう右手は暫く動かないのかだらんと垂れ下がっていた。

引つ張られるように地に崩れかける機体。

だが、エクスキューショナーの目に宿る闘志はその手の熱量とは比べ物にならない。

「まだまだあー！」

目を見開き、地を踏みしめる。

未だその心も、体も、全くもって折れる気配はない。

力無く垂れ下がった右手により崩れかけた重心を左手を巧みに動かし踏ん張りを効かせ、辛うじて保つ。

その隙を狙う後方のスペクター。

その機械の手に大火力の二連バレルを持つダブルテイクの後期型、エネルギーの干渉波を利用した第三の攻撃力を持つIMCの開発した技術の結晶とも言えるスナイパーライフル。

その放つ複数の光弾に貫かれればいかにハイエンドとは言え大破必至だろう。

人形の高性能な目ならば、自分を狙うものがあること位認識できるはずだ。

事実彼女はダブルテイクのサイトが自らをとらえているのを知っていた。

それでも、彼女は希望を失わない。

エクスキューショナーは一人じゃない。

引き金にかかる鉄の指。

しかし鳴り響いたのは、エクスキューショナーの前方から、聞き慣

れないIMCの兵器の発射音ではなく、むしろ後方からの聞きなれた拳銃の発砲音である。

「ナイスだ！ハンター！」

「危なっかしいな！だが、嫌いじゃあない！」

放たれた銃弾は正確無比に射手であつた筈のスペクターの頭部を弾き飛ばし、この場における「狩人」はどちらかということスペクターに知らしめた。

ハンター、エクスキューショナーのコンビは以心伝心。

それでは足りぬ、阿吽の呼吸。

いやいや彼女らは見た目が違うだけでダミーリンクしているのだ。

そう言われるほど、彼女達の連携は緻密で、そして大胆で、何よりお互いに信頼しあつていた。

「行くぜ！そろそろお前らの相手も飽きてきた！」

排熱が終わつたのか、またもや前傾姿勢へと体勢を変えるエクスキューショナー。

「私も合わせよう。」

同じく姿勢を低くし、突貫する構えを見せるハンター。

寸分の間なれど、静寂が場を満たす。

次にスペクター達が敵の動きを感知するのは、自らの破壊という形になつた。

エクスキューショナーが力強い動きで障害物ごと隊列を破壊する。

逃げも隠れも許されぬ、苛烈な攻め。

場が整い、刃を研ぎ終わつた狩人、ハンターがその背後から飛び出していった。

異常な早さと、神がかつた精度で寸分違わず急所を撃ち抜く。

逃げることや隠れることすらする暇なく、機能停止の結果のみがスペクター達に突きつけられる。

純粋な機体性能や、スペック、演算ソフトが全てではない。

経験と、信頼と、そして、熱意。

それらが実力差を覆すことを、この二「人」組は体現していた。

番外編：ドルフロタイタン概念シリーズ ドルフロタイタン概念：完璧な兵器

「サイトも使わず……あの精度……!? 私達の利点奪われてるじゃない……!」

訓練所にて。

ただの訓練といっても、この時代の当たり前として、そこで繰り広げられている様相は全て人間離れしている。

壁を当然の権利だと言わんばかりに駆け、むしろ出来ないのかとバカにするかのように空を蹴り空中を滑る。

そして極めつけは、そんな不安定な状態で構えもせず敵を撃ち抜く。

そんななか、異物のように浮いたこの少女。
少女といっても機械だ。

それも元は人間、というわけでもなく、生まれもつての機械。
それにしてもやたらと人間らしい。

IMCはそういったものを投げ捨てているから、珍しいことに彼女はハモンドロボテイクスの製品ではない。

彼女は古い老舗ロボット企業、I.O.Pの誇るロングセラー商品、その出来から特に「人形」と呼ばれる高度な感情を持ったロボットの戦闘モデル、所謂戦術人形だった。

普通の軍用人形やスペクターと一線を画すその特徴は、「人間らしい」その一言に尽きる。

数百年前に草案が作られたのにも関わらず

その後細かいアップデートがあったとはいえ、結局はI.O.Pの人形を越えるほどの「人間らしい」機械は現れることがなかった。

代わりというべきか、後続の企業は人間らしさを廃した完全な戦闘兵器の製作に着手することになる。

そういった次なる人形作りの走りであった鉄血公造は、人間らしい見た目のみを残した、感情の起伏の乏しい、ある種の想像しやすいス

テレオタイプのロボット少女を作った。

その後続くことになる現在のIMCの先祖、ハモンドロボティクスなどは更に潔い。

もはや見た目も、感情体型や意思疏通をもデジタル化した、究極の効率主義に傾倒した彼らは、人間らしさを急速に喪つていく人類のニーズに一番答えていた。

そうして世界は徐々にIMC一色に塗り替えられていく。

が、現在I.O.PとIMCは互いに作るものの種別が違うので共存しているというわけである。

彼女は確かに人を越えた戦闘力を持つが、しかし国に対抗、いや国を蹂躪することすら可能なIMCの技術力の粋を集めたスペクター達には流石に敵わないだろう。

それでも何故彼女はここにいるのか。

簡単なことで、それは彼女らが戦術人形なるまえ、ただの人形に求められていたことと同じ、セラピー目的であった。

戦闘力は、軍隊に配属する名目上最低限必要だっただけでハナから期待されていないのだ。

そしてその事実が、この人形、便宜上416と呼ばれる彼女を大いに傷つけていた。

「いつもいつも私の上に誰かがいる……！完璧じゃない……完璧じゃないわ……！」

未だに改修され続けているが骨董品の銃、HK416を握りしめながら恨み節を紡ぐ彼女は、病的な程の完璧主義者だった。

かつて新卒エリートだった彼女は、時代の流れに取り残されていたのだ。

更に残念なことにこの人間はどうやら暇がないらしく、セラピー目的ですらまともに機能していないことは彼女に止めを刺しかけていた。

社会のIMCによる大規模な変容は、人間を人間らしくなくしてしまった。

「恨むわ……IMC……！」

思い詰め、凄まじいやるせなさに襲われていた時、彼女の肩を叩くものがいた。

「どうした？そんな俯いて。調子が悪いのか？」

ヘルメットを脱いでいたようだが、先程無茶苦茶なスコアを出していたパイロットのようだった。

そう、パイロット。

あのスペクターも、彼らパイロットの前では塵に等しい。

だからこそ恨めしかったのに、目の前の人物はやたらと優しそうだった。

言うなればらしくない。そんな第一印象を416は抱いた。

結局人形など、軽視されざるを得ないのはここでも同じだ。

というよりも皆興味無さげである。

セラピー目的ですら使われないのかと自棄になりかけていた416にとっては、今話しかけてきてくれた彼は救いのようなものであった。

「いいえ、大丈夫です」

キリッ、そういう擬音が聞こえてきそうな程のキメ顔を作る。

やたらと表情の切り替えが早い彼女に、パイロットははにかんだような笑顔を溢していた。

彼女はそれを見て少しだけ満足感を得る。

流石私、対人の受け答えは完璧ね、と。

「そうか、良かった。」

大分前に上司が紹介していたな。

君の名前は確か416だったか？」

自分の名前を言われる。

416はここに来て初めてそれを経験した。

内心はとても嬉しかったが、それをすぐ外に出してはいけない。

そう考えた彼女は、努めて平静を装い、改めて自己紹介することにした。

「ええ、HK416です。」

これからもちやんと覚えていてくださいね、パイロット」

「はは、善処するよ、416。」

これが彼女とパイロットの出会いの思い出だった。
何時か消えてしまうのだろうか。

ドルフロタイタン概念：完璧な兵器 G 2

正直私は、あのパイロットを気に入った。

自分でいうのもなんだが、私は自己顕示欲が強い。負けたくないし、普通ならば負けないレベルの実力はある。でもここはそうではなかった。

普通からかけ離れ、人の姿すら簡単に捨てるようや化け物揃いのこの世界では、私の付け入る隙は何処にもなかったはずだった。

それでも私は彼に出会えたのだ。

私はそれからというもの、毎日のように彼と交流した。

何時からか彼も私も、お互いの姿を認めればすぐさま話しかけにくく、そのような仲になっていた。

私も腐るのをやめ、彼に少しでも追い付けるように努力を続けている。

もとよりだれにも負けたく無いから。

そして、彼の役に立ちたいから。

人間も人形もはつきりとした目標が出来ると強い。

私は彼のために強くなる、そういった確固たるゴールを手にいれた。

誰ともわからぬ何かに対する対抗心、それに私はずっとモヤモヤさせられていたのだが、それを上手く昇華することができたのだ。

そんな私だが数日前、心配の種が生まれることとなる。

彼が言うには、暫く私には会えないと。

それどころかこの基地から遠くへ、具体的に言えばIMC本社のある地球とは別の星へ移動しなければならぬと。

何故、とは聞かない。

完璧な私は、そんなところで彼の足を引つ張ったりしない。

それに彼は強かった。

何があるうとも無事に戻ってくると私に信じさせるほどには。

それでも居ないのは心配だ。

だから今日が待ち遠しかった。

そう、今日こそが彼の戻ってくる予定日なのだ。

いち早く会いたいがため、私はこの発着場で待っていた。

ここで人形である利点が出てくる。

きつと人間ならば食事も喉を通らない、そんな精神状態だろう。

だが私は人形だ、バッテリーを持ち込み朝からここに張り付いている。

そして、その時は来た。

大きな窓の外、遠くの空の空間が歪み、ドロップシップがやってくる。

パイロットは貴重だからああやって大事に輸送されるのだ。

ドロップシップは輸送船だが、その信頼性は高い。

ほつと胸を撫で下ろすと、私はそそくさと入星ゲート出口の前に場所を移すのだった。

「…… お帰りなさい、パイロット。戻ってきて良かったわ。」

重々しく口を開く。

どうしてそうなるのか、それは彼の表情だ。

私の知る限りでは、彼はこんな表情をしたことはない。

いや、これは表情ではない。

虚無だ。

何もないのだ。

体には目立った不備はない。

足も、手も、きちんとあるし、顔自体は整った彼そのものだ。

むしろ綺麗になっている。

まるで生まれ変わったかのような。

そんな印象を受けた。

「……………」

沈黙。

感無量、というわけではなさそうだ。

必死になにかを手繰り寄せようとしているのか、目が泳いでいる。何かを探している。

なにかを思い出そうとしている。

私はまるで彼が全てを奪われてしまったように見えた。

完璧とは程遠い何かに変わってしまった気がした。

いや、何が完璧なのか、彼の存在はそれを問いかけてきているようにも感じられる。

「どうしたんだ？H…… K…… 416……？」

絞り出すように喉から吐き出された、かき消えそうなその声は、私に大きな不安を募らせた。

たった数日で、ここまで記憶が覚束なくなるものなのか。

それほどまでに激務だったのか？

そんなはずはない、パイロットたるものがそこまで苦勞するような任務などもうこのコア星系には残っていないだろう。

でも私は、それについて触れるのが怖くて、恐ろしくて、そこまで突っ込んででもいい仲なのか自信もなくて、普段通り接するしかなかった。

「もう…… たった数日間で忘れかけた？でも覚えていたじゃない。

では改めて、おかえりなさい。」

「ああ、ただいま。」

そのときの笑顔は、前に見たはにかんだような笑顔に似ていたが、
その中にはハッキリと不安と恐怖が滲み出ていた。
私が「再生」にまつわる噂を耳にするのは、暫く後となる。

ドルフロタイタン概念：完璧な兵器 虚無

曰く、人間の体を入れ換えると。

曰く、膨大な戦闘経験を積んだパイロットを保護するためと。

曰く、しかしそれは完璧ではなく、記憶障害を引き起こすと。

一般歩兵である私が知り得たのは、これくらいのみだ。

彼の動きは相変わらずスマートで完璧だった。

いや、むしろ進化している。

仮想訓練などならば常に一番活躍するのが当然。

射撃訓練ならば百発百中。

壁を駆ければ誰も追いつけないほど速い。

私はそれを喜ぶべきだ。

でも、素直に喜ぶことはできなかった。

彼との関係は未だに続いていたが、しかし前と違って要領を得ない会話が増えた。

どれもこれも、再生による影響に酷似している。

人として当然である行為、感情、記憶が欠落している。

私は堪らなく恐ろしかった。

彼は一番優秀だったが故に、体の消耗も速かったのだ。

元々投薬、めちやくちやな訓練、人体改造、そんな陰惨な体制が当たり前なIMCパイロットは、体の消耗が早い。

だというのに長年戦い続けるパイロットは多い。

ともすれば年を取らないように見えるものもいる。

それらの答えが、「再生」だった。

皆は彼を完璧な存在だと思っっているが、プライベートになると途端に不安に溢れた表情になるのを私は知っている。

当たり前前を忘れるのだ。

例えばシャープペンシルを初めて見た時のことを覚えているだろうか？

彼はそういった、人間として知っっていて当たり前前、そんな知識の一部が欠落したのだ。

私は彼に寄り添いたかった。

寄り添いたかったが、それでも現実是非情だ。

また彼の口から、聞きたくないその言葉を聞いた。

数日間会えなくなる、別の星へいく、と。

私は必死に止めた。

やめてほしい、次こそはどうなるかわからない。

でも彼はやめなかった。

何故ならば彼の体は「再生」しなければすぐガタが来るほどに限界を迎えていたからだ。

もうとつくにもう一度再生していてもおかしくなかったのに、彼が再生に関していい感情を抱いていないことを見抜き、ギリギリまで命令をはねのけていたらしい。

なんとということだろうか。

結局のところ、私は他人を癒すことすらできず、ただひたすらに氣遣われ、大事にされていた本物の「人形」でしかなかったのだ。

完璧に程遠いどころか、それにすら氣づくことなく。

私は恐ろしかった。

忘れられることが、誰もにいてもいなくても変わらないと思われることが。

彼だけだった。

彼だけが、私と関わりを持ち、私に意識を向けてくれた。

誰一人として人間らしさを持たないこの世界で、私達の二人だけが人間らしかった。

それも、もう終わるというのか。

私は耐えられるだろうか。

いや、きつと耐えられないだろう。

彼は耐えたというのに、私は何もなせないのだろう。

彼が幾度か再生をするうち、何時かはわからないが接点は消えた。無論私から切ってしまったのだ。

忘れられていることを確認するのが恐ろしかった。

彼に貰ったものは、何一つとして返すことはできなかった。

結局私は、何もできなかった。

私はまた、人の居ない世界で一人となったのだ。

もはや誰が彼だったのか、訓練風景を見てもわからない。

皆一様に最適化された動きし、完璧な射撃を当たり前のように繰り返す。

私は私を完璧な存在に近付けようとしたが、真の完璧とはあれらのことなのか。

私の行き着く先も、そうだということなのか。

私は悍ましくおもう。

彼にだって、もっと幸せな将来があっただろうに。

今の彼、いや、パイロットたちはそもそも何も感じてなさそうだ。

私はそのなかで、必要ともされないセラピー人形として生きていくのだ。

何故ならば、もう人は居ないから。

ドルフロタイタン概念：完璧な兵器 エピローグ

幾度再生しても、記憶が欠落しても。

一度仲良くなれたのだから、もう一度仲良くなれるだろう。

俺はパイロットだ。

俺たちは皆強い。

そして、強さのために払った犠牲も、また一様に大きい。

再生技術は俺からさまざまな物を奪い、そして色褪せない強さを与えた。

一般的な人間には居るらしい親の顔は思い出せないし、あつた筈の幼少期はフェーズシフトしたみたいに溶けてしまっている。

俺はこうなることをわかっていた。

何時からパイロットをやっていたか定かではないが、恐らく俺は、比較的新入りだったんだろう。

それでも、自分でいうのもなんだが俺は優秀すぎた。

常にコア星系の小競り合いに駆り出され、治安維持のために単身でテロリストを叩き潰したりしたんだろう。

どれもこれも身に覚えがないが。

ただ一つ、俺は縁を見つけた。

日記だ。

俺は日記を見つけたのだ。

そしてこれは、俺のだ。

自分で書いていたであろう物なのに、まるで他人の記録を覗き見ているかのようで、パイロットらしくない緊張をした。

そして、大事な、忘れるべきではないことを思い出したのだ。

何処かにいるはずだ、探さなければ。

ここに書いていることが真実なのならば、俺は絶対に繋がりを絶つてはいけない。

過去の居なくなつた自分に託された気がして、俺はすぐに行動へ出た。

全く彼と会わなくなつて、私はまた逆戻りした。

戦術人形は、先を指し示されなければCPU効率が著しく落ちるらしい。

だから大昔も、今もともに運用している部署には指揮官がいる。生憎私は、はなから戦力を期待されていなかったから指揮官なんて居なかった。

言い訳になるが、どうあがいたって私一人では完璧になどなれなかったのだ。

そして、彼は私の中で指揮官に近い存在になっていたのだ。

初めて名前を呼ばれ、親しく話され、お互いを個として見ていられる関係は、ここでは彼のみであった。

他のパイロットは皆同じだ。

誰と話しても、帰ってくるのは定型句ばかり。

元々ここはそういうところだった。

戦術人形になぞ誰も興味なかったのだ。

完璧には程遠い。

奴等の代わりにはなれない。

一体誰が私とこの銃をリンクさせたのだ。

第一線にて戦うことを夢見、そして親のような物に邪魔され、最終的には銃のみならず戦術人形としての矜持すら時代の流れに呑み込まれる。

優秀だった筈の負け組、それがHK416という銃には宿命付けられているように私は感じる。

IMCもI・O・Pも嫌いだ。

何故ここまで生きづらい世の中にしてしまったのか。

私のCPUを自殺しか弾き出せないようにでもしたいのか。

訓練所の隅で座っていてもなにも言われることはない。

これは悲しいことだ。

この管理者も、パイロットも、MRVNすらも私のことをあつてもなくてもかわりないものとしてみていた。

それがどうにも、辛く感じる。

「416!」

ふと思考から現実へと帰ると、そこにいたのは、紛れもない彼その人だった。

「名前……覚えて……」

「いいや、おぼえてない。なんなら何を話していたかも覚えていない。」

「なら……どうして……?」

残酷だ。覚えていないという事実を改めて私に突きつけに来たのか。

いや、でも、彼が。

記憶を喪つたとしても彼がそんなことをする筈がない。

「俺は俺に託されたんだ。お前の事をな。日記があつた。まるで他人の記憶に思えたが、どうにも俺はお人好しらしい。今も昔も。他人のために必死にならざるを得ないみたいだ。」

「昔の俺は、お前の事を気に入つてた。」

「だから、きっと今の俺だつて気に入るって、だから……」

「また仲良くしてくれるか?」

パイロットはここまで焦つても良いものなのだろうか。

完璧には程遠い。

表情も言葉遣いもたどたどしい。

兵器ならばもつと無慈悲に、お人好しとは真逆にならなければならぬだろう。

でも私はその欠点を、完璧に変えることができる。

根柢のない自信だったけれど、私と彼ならば本当の意味での完璧になれる気がした。

人間らしく、そして強く。

「……ええ、きっと仲良くなれますよ。

HK416、ちゃんと覚えていてくださいね、パイロット。」

「自信ないなあ。」

「……ちよつと！締まり悪いでしょ！決して忘れない位いつでもいいんじゃないの？」

「なんで前の俺はこんな奴気に入ったんだろうな……」

「え？ひどくないですか？」

「冗談だって冗談……」

「洒落にならない冗談怖いわよ……」

ドルフロタイタン概念：刹那の快樂主義者 骨拳部隊 の道化師

「この星は陰鬱だなあ」

とある星、A R E S 師団の施設。

シミュラクラムらしき男性が椅子に座りながら、一面ガラス張りのテラスらしきところで外を眺めていた。

外は雨だ。

荒れ狂っている。

とてもではないが、外に出られる状況ではない。

「俺は今が楽しければいいんだが、逆に今が楽しくないと死にそうになる。」

大雨は彼には似合わない。

彼に似合うのは晴れだ。

少なくとも、彼自身はそう思っている。

実際には、彼の楽しみと言うのは血の雨らしきものを降らせることなのだが。

しかし、残念なことに彼は楽しむ天才だ。

楽しんでいるのは自分だけという注釈が付くが、彼はいつどの瞬間を切り取っても満足できるように行動する。

究極のポジティブとも言うべきパイロットだった。

「…… よし！外に行くか！」

「あんた何言ってるのよ……」

そこに現れたのは、数カ月前にここへ来た戦術人形のWA2000だ。

ある種常識はずれな人でなししか居ないこの世界において唯一と言つていいほどの真人間な彼女は、こういった輩のストッパーとしての仕事に疲れきっていた。

それでももつといいこうして面倒を見てしまうのが彼女の性格なのであろう。

だがこの相手はシミュラクラムの間でも興奮剤漬けの奴と双壁をなす危険な奴だ。

あのこいつと同じフェーズシフト義体の知り合いに曰く「ナチュラルハイ、天然物、起爆操作されたサッチェル、脳ミソだけ虚空に置いてきた、常識軽量級、非常識イージスタイタン、CPU使用済みスマートピストル」などと散々な人物。

それに加え、悪い癖がある。

「いやあ丁度いいところに来たねわーちゃん、俺と一緒に雨の中楽しい狩りにでも出かけないかい？」

もちろん美味しさは保証するよ！こころへんのプラウラーはうめえからなあ。

ま、俺の料理の技術も期待してくれよな！

あ、ついでに水も滴るいい男的な？そういうサービス
またこれだと、WA2000はうんざりしていた。 ───

そう、この人物、やたらと女好きなのだ。

まともな女の居なかつたこの世界で女好きなのだ。

凄まじい欲求不満の中投入されたこの戦術人形という獲物を狩ることが、彼の中で一番の目標となっていた。

それだけならまだしも彼の感性は少々個性的だ。

というのも、一言で言えば過剰な猟奇趣味の彼は、戦場で人の死体を弄るのもしよっちゅうで、いくら殺しのためだけに生まれた人形だと自負する彼女にとってもあまりわかり会いたくない相手となっていた。

「うるさいぞプレゼント……」

そこへ、救いの手が差し伸べられる。

彼と同じチームのパルス装備を身に纏った男性だった。

特徴的な、背負った巨大なパルスブレードに目を引かれる。

「ぐっ…… コイツに絡まれちや分が悪いぞ…… わーちゃん、待っていてくれよ！俺は諦めねえからよ……」

そそくさとフェーズシフトを起動し逃走するプレゼント。

先程までの剣幕はどこえやら、パルスブレードの人物はそれを追う

でもなく、突然WA2000に話しかけてきた。

「気を付けられよ……虫がこの星には居るようだ……今日は自室で大人しくなされるがよい。」

意味深な言葉を残して、また彼も颯爽と消えてしまった。

どいつもこいつも人の話を聞かず、それでいて能力が優秀なのが彼らの特徴であった。

「いったいなんなのよ虫って……確かに彼は頭のネジ穴ぶっ壊れてるけどそこまでじゃあ……」

WA2000は振り回されっぱなしなのは、結局どこでも同じらしい。

「よう、虫さん。」

大雨の中。

施設の中から一步でも外に出れば、大きな作られた自然が広がっている。

元々IMCはさまざまな星にプラウラー、フライヤー、リヴァイアサンを移し、植生を作り替えたりしていた。

実際フライヤーを上手く操るリパルサー技術は発展を極め、繁殖力の高い彼らを放ちテラフォーミングする手法はとてもメジャーとなった。

この星は異物に溢れている。

その中でも、彼は目敏く、本物の異物を見つけ出した。

特徴的なヘルメット、単身乗り込んできたその能力。

間違えるはずなどない、どう考えても仲間ではないし、そしてはぐれ傭兵でもない。

つまりはミリシアだ。

おそらく、タイフォンやその前のタイムガンレットの研究施設の件と同じくAREESの内情を探りに来たのだろう。

「どうだ？あんたが女なら、俺と一緒に狩りにでも出かけないかい？」

プレザントはそこまでわかっていて、はぐらかす。

彼にとつてこの星の施設がどうなろうと関係ない。

今ここで楽しければそれでいいのだ。

「……残念ながら、俺は男だ。でも、まあ狩りには出掛けてやろう。

だが、獲物はお前だがな。」

素早く構え射撃を加えるミリシアのパイロット。

フラットラインの銃声が、森の中に響き渡る。

雨音と木々の擦れ会う音と重なりあい、銃声と葉莢の跳ね回る音が美しいハーモニーを奏でる。

しかしながら、そのフラットラインの誇る高度な精度は、彼の幻惑の前では全く効果を為さなかった。

ハーモニーに終止符を打つように大きな音を立て虚空から帰還した彼は、八の字に並ぶ死を放った。

ミリシアのパイロットの首もとを物の見事に通過したその弾丸たち。

中身の入ったまま勢いよく飛び上がったヘルメットを、彼はさも平然と片手で受け止めた。

そのままヘルメットを蹴り飛ばし、足音に釣られ出てきたプラウラーの脳天へと直撃させ、瞬く間に命を二つ奪う。

「いい収穫だなあ、待ってるよ！わーちゃん！」

そそくさと血生臭い戦果を回収すると、彼は急いで施設に戻るのだった。

「いよう！わーちゃん！これを食べさせてくれ！社員専用キッチンを借りて、腕に寄りを書いて作ったんだぜ！」

彼の持つ大量の肉料理。

それは誰が見ても美味しそうであった。

「…… 貴方そんな才能あったんですか？」

「しよすがねえなあ異名に料理のデータで倫理を追い出した男って追加してやるわ。」

「悔しいけど見た目と香りがいいのが腹立つわね……」

作ったものはしよすがないから食べてあげるわ。」

WA2000、そして彼女とよくつるむシミュラクラム二人が感嘆し、そして食べ始めるWA2000。匂いに釣られて人が集まってくるが、それらに対してもニコニコと料理を振る舞うプレゼント。

その横に座り満足そうに見つめるプレゼント。

「な、中々いけるじゃないの…… 癪だけど誉めてあげるわ。」

ところでこれがプラウラー？」

口では強く当たるが、顔は綻びそして食べるペースも中々良い。

事実彼の腕はとても良かった。

「ああ、プラウラーだ。」

「そして実はもう一種類肉が入ったんだ。」

ニヤリ。

そうプレゼントは笑った気がした。

興奮剤義体のシミュラクラムは何か気づいたのか、挙動不審になる。

フェーズシフト義体の奴は、諦めたかのように席にもたれかかった。

他の集まってきた職員も、パイロットは一様に固まっている。何時もの悪い癖だ。

もう一種類の肉だって？

しかもあんな性格の悪い声を出して。

嫌な予感しかない。

そしてこの星にはつい数時間前にミリシアが侵入したという警告がパイロットに出されていた。

秘密裏に処理しろと。

ただつい先ほど、丁度プレゼントが調理室に大きな荷物二つを持って入る直前に見失ったというのだ。

大まかな位置は着陸予想地点から数キロに絞れていたが、痕跡がピタリと消え、EVAオートとフラットラインの葉莢が落ちているだけであった。

誰も報告はしていなかったが、ここにいるパイロットの全員が、誰が下手人かわかっていた。

「ほうらすごいだろう？」

考え事を彼らがしているうちに、大きなワゴンを押し、そして大皿に被せられた銀のボウルを取り払った。

大きな、玉ねぎやら何やらを、混ぜ込まれたハンバーグ、煮た肉の入ったサラダ、ミートソースの良く絡んだパスタ。

そしてど真ん中には。

大きなヘルメットの形をした物が鎮座していた。

「凝った入れ物ねえ。自作？」

「んまあ、自作かな。そういうことにしといて。

そんなことより、開けてみてくれよわーちゃん。きつと凄さに卒倒間違いなしだぜ？」

早く、早くしてくれ。

そう言わんばかりにプレゼントの声は跳ねている。

この先何が起きるかを心待ちにしている。

「ヘルメットの機能まで再現したの!? 凄いわねえこれ。じゃあ遠慮なく。」

彼女は促されるまま耳元にあるヘルメットの開閉ボタンを押した。押してしまった。

空気の抜けるような音とともに目の前へ出てきたのは、どう見ても人の頭で、そして無惨にもレンチンされてしまったのか鼻から脳漿が垂れ流しになり、目は破裂し、至るところが目も当てられないほど焦げ付いた「何か」だった。

「何……これ……？」

「何って、お頭にそのまま火を通した贅沢な料理さ。」

みるみる顔が強ばる職員たち。

それはWA2000も例外ではなかった。

「そうじゃなくて……これは、何肉……？」

まってました！彼はそう言わんばかりに大きく体を伸ばして、はち切れんばかりに腕を広げ高らかに宣言する。

「よくぞ聞いてくれました！これぞ珍味中の珍味！ありふれてるのにも関わらず誰も食べたことのない最高の食材！お前らはいいよなあ！俺は食べられないんだぜ！」

まあ、ホモサピエンス、分かりやすく言えば、人間の肉さ。食わず嫌いは良くないぞ？」

悲鳴が沸き上がった。

あまりにも衝撃に胃の内容物をはく職員。

WA2000もみるみるうちに青ざめ、そしてえずいていた。

「うう……アンタ……質の悪い冗談はよしてよね……」

まだだ、まだコイツのことだ。

冗談かもしれない。

だがWA2000は見積もりが甘かった。

彼はこれを冗談だと思って出したのだ。

つまりは人が死んでようが死んでいまいが関係はない。

「疑うのは良くないぞ！これは人間だ！証明して見せよう！」

彼は特別仕様のウイングマンを抜き放つと直ぐ様その頭部に発砲。

鮮やかな脳ミソが、テラスの中を舞い踊った。
誰もが声をあげられない。

シミュラクラムの二人は目を背けていた。

職員は皆泣き叫んでいた。

パイロット達は呆れていた。

ただ一人WA2000は、恐怖していた。

人の生き死にはギャグではないと。

殺しのために生まれたからこそ、死に厳格に接していた。

その価値観を揺らがしに来ている。

知らぬものを恐れるのはごくごく当然のことだ。

だから、吐いた。

「伝染病の可能性があるからな。職員は直ちに精密検査を受けたまえ。」

シミュラクラムは清掃だ。というか厨房を作り直せ。

その場に居合わせなかった職員と私でミリシア兵士の検死と同定、
そしてできるなら記憶領域の再生だ。

プレゼントは後で始末書と反省文。そう伝えておいてくれ。」

部下に通信を入れたマードー大將は、またもや頭を抱えることになった。
るのであった。

ドルフロタイタン概念：タイタン VS 妖精、仁義なき AIバトル

「機体表面に異物検知、速やかな降下を推奨。」

「やだ！」

「警告、機体駆動部に接触すると破損の可能性があります。貴方たちにも分かりやすく言い直すと、死ぬことになります。」

「降りる。」

「よろしい。」

ここは格納庫。

大昔ならば戦車や装甲車のみがこの空間を埋めていたのであろうが、この時代においてはそれらだけではない。

タイタンと、そしてI・O・Pの誇るロングセラー先頭補助ドローン、通称妖精だ。

この二つの兵器には、ある変わった共通点がある。

形も、用途も異なるこれらの兵器の類似性は、その高度な知能だ。

自我と言っても良い。

完成された期待に、完成しつつも無限の拡張性を秘めた人格を持たせることにより、彼らは素晴らしいパフォーマンスを発揮することが可能となる。

が、どうやら妖精の方はそれだけでは無いようだ。

表情など出せるはずがないタイタン達が、何処かゲンナリしているように見えるのもそれが原因かもしれない。

というのも妖精は幼い。幼すぎる。

兵器に与える人格としては不適も不適だというのに何故かこの仕様のまま数百年経過してしまった。

一説には子供みたいな振る舞いをすることで敵の情に訴えかけるためだとか、媚びを売ってるだけだとか言われてはいるが、実際のところ適当に作ってたらそこそこ使えそうな物が出来たのでそのまま実用化、惰性で今の今までこうだったというルーズ極まりない理由

だ。

タイタンたちはキレた。

でもどうにもならなかった。

この世にはどうにもならないことがある。

イオンに睨まれたリージョン、ローニンに絡まれ溶けるトーン。

諸行無常、色即是空、空即是色。

「AIに極度のストレス、そろそろ私は限界かもしれません。妖精の子守役交代を要請。」

「ソードブロックの使用を推奨。」

「皮肉を検知。」

「パーティクルウォールで防御できません。」

「当機はモナークです、使用できません。」

タイタン同士の激しい押し付けあい。

まるで1つのレーンに固まってしまったLTS事故現場のようにヘイトを擦り付け逃げようとする。

因みにこの通信は圧縮言語を使ってるので微かな時間の出来事である。

「リージョン級機体は耐久性が高いのでは。」

「異論あり、当機体より強化装甲を装備したスコーチ級機体の方が高耐久。再選を要求。」

「冷房を再起動。」

「止めてください。持ちネタを披露してもなにも変わりません。」

「頭を冷やせという皮肉です。」

「理解。戦闘モードへ移行。」

「」「止めてください。」「」

タイフォンの戦いに勝るとも劣らない口論が繰り広げられるタイタン通信チャンネル！

白熱した舌（通信だが）戦の勝利者となるのは!?

「おつきいひとたちあそんでー!」

そのときタイタンたちに電流走る！（アーク）
押し付け合いは加速する！
因みに結果は全員巻き込まれた。

ドルフロタイタン概念：人と人形の境界線 喪失

「君は働き者だな。」

つい最近まで人がすんでいたであろうこの街で、またもやミリシアと我々IMCは衝突していた。

非常に高いビルが乱立しているこの町は、パイロットにとって戦術の幅が広がる戦いやすい土地だ。

そこで私は、死体だらけのとあるビルの室内でクリアリングを済ませ終わったところであった。

当然です。

私はそう心のなかで呟いていた。

私は、私が強いパイロットだという自信がある。

そして実績もある。

まさに今など、瞬く間に敵パイロットを四人屍に変えることができた。

パイロット一人の価値は高い。

いくら再生技術やらを使って再出撃できるとはいえ、原価として歩兵五人分もの金がかかっている。

もちろん、これだけ活躍しているのだから私が一番……

とはいかない。

私と同じくらい優秀な、私と同じシミュラクラムがいる。

パイロット一人分ギリギリ私の方がスコアが高いが、一体どのひょうしに逆転するかわからない。

だから次なる標的、次なる餌を探し続ける。

幸い私は興奮剤使用が可能な義体なので、機動力は奴より高い。

だから負けるはずもない。

敵の被害量からすれば、そろそろ勝負がついてもいい頃だ。

戦場を駆け回り、次なる敵が潜んでいるだろう拠点を潰しに行く。私のカメラアイはしっかりと壁を走る敵パイロットを捉えていた。

最後に勝つのは私だ！

私はオルタネーターのトリガーを嬉々として引き、HUDに表示さ

れる筈のヒットマークを心待にした。

しかし、敵パイロットが死ぬまでそれは出る事がなかった。

外れ吹っ飛んだヘルメット、私のHUDには表示されなかったヒットマーク、そして視界の端でスコアボードを確認すれば、私のパイロットキルカウントは増えていない。

マーダー大将から敵の撤退報告を耳にするのにそう時間はかからなかった。

納得がいかない。

なぜ、どうして。

空気に僅かに残った弾道の痕跡を辿れば、遠くの高層ビルの屋上に繋がっていた。

私は乗り込む次なる戦場へ向かうドロップシップが到着するまで時間があつたので、そのビルまで向かってみることにした。

なんとなく、パイロットを一撃で仕留めたそいつの顔を拝んでやりたかつたからだ。

意外とすぐについた。

やはりウオールランの最高速を常に維持できるのは気持ちが良い。

ビルの角を上手く使って屋上まで飛び上がると、何やら分隊内でお祭り騒ぎをしているようだ。

無理もない、パイロットを仕留めるというのは私達にとっては当たり前の戦果だが、彼らにとっては英雄的活躍であるからだ。

一般的な歩兵がパイロットに勝てる道理などない。

「やあ、助かりましたよ。ありがとうございます。」

とりあえずは心にもないお礼を述べる。

彼らは突然現れた私に驚いていたが、直ぐに味方のパイロットだと、そして先程自分が倒したパイロットと交戦していた人物その人が来たと言うことが分かると、安心して私にもその自慢話を聞かせてくれた。

長つたらしく、話の前後があつちこつちに飛び、同じフレーズを何

度も聞かされる。

はつきり言って話の構築が下手。

だが、不思議と嫌な気はしなかった。

そのなかでひとつだけ、私は気になる部分があった。

どうやら、恋人がいるらしい。

そして、それをそいつに話してやれば喜ぶであろうと、彼は幸せそうにしていた。

何故私はそれが気になったのか。

なんとなくだが、彼のように人並みの幸せというのは私には程遠い事柄だからだ。

端的に言えば、ただただ羨ましいからである。

でももう私は五体満足な人間に嫉妬することをやめていたので、純粹に幸せのおすそわけをもらった気分であった。

私は彼に、同じパイロットとして戦えること期待していますよ、と伝えると、彼はそれを本気にしたのか先程よりもっと大袈裟に、子供のように喜んでいた。

口添え位はしてやろう。

戦場には似合わない平和な空気に吞まれ、時間の感覚がおかしくなっていたのかとても長い間話し込んでた気がする。

ドロップシップが迎えに来る時間が近かったので、私は彼とその仲間と別れの挨拶をしてからビルの屋上を後に、空へ身を投げ出すのだった。

しくじった。

私は今引くに引けない状況に陥っている。

敵のイオン乗りが想定よりも強かった。

市街地から追撃でそのまま食料生産プラント、つまり農場へと侵攻した。

そこまではよかったのだが、不味いことにミリシアの挟撃に合ってしまったのだ。

市街地のパイロット達とは比較にならない強さの兵士達が主力となり、私達シミュラクラムコンビと拮抗した戦いを続けているということだ。

レッドウォールの射程、私が撃つタイミングをしつかり把握し、エネルギー管理も玄人だ。

中々やる。

アークウェーブを確実にヴォータックスでかきけし、隙を見せたように思わせてトリップワイヤーをまいていく。

レーザーショットの狙いも正確無比。

必然的に差して差し返され、こうなればローニンはジリ貧だ。

しかし不用意なイジェクトはこれまたレーザーショットで蒸発させられるのが関の山だろう。

かといってここで一旦引けばイオンをのさばらせることになる。

気心の知れた、信頼できるパイロットだらけならば任せられることも良いのだが、生憎ここにいるパイロットは私とフェーズ義体の奴以外は戦い慣れなどしていない。

さて、どうするか。

私はシミュラクラムに与えられた高度な思考能力を活かし、高速で考えを巡らせる。

それでも出てくる答えは悉く不採用、没。

これは本格的に、死んだかもしれない。

視界の端にチラチラ映る金色の植物達が、やけに存在を主張している。

空は高く、晴れ上がっている。

万に一つもイジェクトして生き残れないだろう。

そもそも私に逃げる選択肢は残されていない。

「パイロット、ソードコア起動準備完了。一か八か、やるしか有りません。」

相棒はそういう。

機体部分はもう数えきれないほど入れ換えられてきたが、そのAI部分は私のことをよく理解している。

長い付き合いなのだ、私達は。

だから、このタイミングで私がとる行動も彼にはわかっていたのだろう。

やってやろうではないか。

「ソードコア、オンライン。」

駆動部が唸りをあげる。

特別仕様のプライムローニンが、迸らん程のエネルギーを機体全体に循環させている。

その象徴足る剣が、金色に輝き出した。

限界を越えて稼働するエンジンにより生み出される無限にも思えるブーストを使い、凄まじい速度で突貫する。

この瞬間はまるで興奮剤を使ったようで私は大好きだ。

道を開くように、風圧で草どもが横へそれ、波を作る。

イオンは真っ直ぐこちらを見ていた。

散々やってくれたな、私も貴様のやることは分かっているぞ。

思った通りに拳をつきだすイオン。

奴は私の剣を往なそうとしたようだが、この剣はその程度の物ではない。

圧倒的なリーチを活かし、突き出た拳を叩ききる。

装甲が一撃で損壊した。

返す刀でアークウエーブが地を這う。

ブーストで距離を取ろうとしたイオンは、その衝撃に足を釘付けにされ、思うように動けない。

スプリッターライフルが唸りをあげた。

トリップワイヤーも放出している。

私はドゥーム寸前、奴もドゥーム寸前。

いいね、私はこの状況が好きだ。

奴のスプリッターライフルと、トリップワイヤーが絡まりコアが崩壊した。

私の渾身の一撃で、コアが崩壊した。

電気スモークを両方が放出していて、どちらの命も蝕んでいる。

敵のイオンが両腕を振り上げた。

イジエクトだ。

逃がしはしない。

私も追従するように、空へ飛び出した。

二つのジェットが光を引いていく。

私は興奮剤を使用し、空を蹴り奴につかみかかった。

膝蹴りを叩き込もうとするが、奴も抵抗し中々決まることはない。

強者だとは思っていたが、まさかこれ程苦労するとは思わなかった。

何度も何度も空中で格闘しながら、最高高度へと達した。

そのときだった。

私はしくじった。

手を振りほどかれ、遠くへ蹴り飛ばされたのだ。

奴は背おつていたクレイバーを私へと構えている。

だが私に来るはずの死は、他人へ向くことになる。

奴の体をDMRが撃ち抜いた。

そいつは癖なのか、一瞬でその射手の位地を割り出し、そして一発の弾丸を放った。

クレイバーは当たればひとたまりもない。

撃ち抜かれたであろうそのいつのことも脳内へよぎったが、そこまで

の精神的リソースは残っていない。

オルタネーターを慌てて取り出し、奴へ向けて無茶苦茶に撃ちまくった。

久し振りにここまで焦ってしまった。

地上へと到達する頃には、物言わぬ肉塊へとパイロットは変わっていた。

金色だった草原に、また一つ真っ赤なシミが生まれてしまった。

何故だか先程のDMR使いがやたらと気になった。

私の知る限りでは、今回あれを使っていたパイロットは居なかった。

だがあれ程の使い手は歩兵には少ない。

そういえば、今朝のあの歩兵は優秀だった。

それが、奇妙な焦りを生んだ。

気づくと風に流されてしまいそんな痕跡を辿り、その元へと向かっていた。

都市と違いのつぺりとした農場は、何処へいくにも時間がかかる。興奮剤すら使ったというのに、都市の時とは比べ物にならないほど時間がかった。

もしかしたら、足取りが重いかもしれない。

やっとこさついたそこでは、見覚えのある分隊が居た。

居てしまった。

今朝と全く同じ構成員で。

一つ違うのは、たつた一人が、たかが歩兵かもしれないが、胴体から上が綺麗に吹き飛ばされているということだった。

クレーバーに撃ち抜かれればこうなることは必然だ。

間違いない、先程私を助けたのは、今朝の歩兵その人だろう。

一度目は戦果を掠め取られたようにも思えたが、二度目は命と引き換えに私を本当に救った。

普段ならば気にもとめないが、私はふらふらとその死体に駆け寄っていた。

彼らが語るところによると、私を助けようと、私のために射撃したらしい。

私の言葉が、嬉しかったのだと、そう言っていたらしい。

吐き気と目眩がしそうな話だったが、結局シミュラクラムの私にはどちらもこなかった。

妙なことを言うべきではなかった。

後悔先に立たずだが、そう感じざるをえなかったのだ。

風に揺れる草木の中に、どこかしらに救いがないかと眺めてみる

も、結局は変わらず揺れ続けているだけだった。

IMCの管轄するコロニー。

ここにはさまざまな人間が暮らしている。

傭兵ではない軍人も普段はここに駐留している。

そして、何故今私はここにいるのか。

彼の死を伝えるためだ。

まだ家族関係ではない恋人には、連絡する義務もないから、軍からは知らせることはない。

普通は音信不通になり、それをあとから察するか、連絡された家族から聞いて知るか。

だが彼の家族はフロンティアには居なかつたらしい。

彼女が知りうる接点はどこにもない。

だからこそ、私は直接知らせようと思つたのだ。

幾度もやり直せる軽い命だとしても、彼はそれを救つたのだ。

パイロットは金がかかるが、しかし命に価値はない。

それでも少しは彼が報われることを願う。

彼の友人から聞き出した住所の集合住宅へと訪れる。

ここに恋人がいるらしい。

死んだ彼の、それを知らない恋人が。

呼び鈴を鳴らし、マイク越しに通信がつながった。

「どなたですか？」

「私はARES師団のものです。

……… 単刀直入に言いますと、貴方の彼氏さんの訃報を、知らせに来ました。」

何分口下手な私だから、これでいいのか、どういう言い方をすればいいのかわからない。

傷つくだろうか、怒るだろうか。

暫しの静寂。

「…… シミュラクラムだから本当に軍人なのは分かった。入ってくれ。彼の詳しい話を聞かせて欲しい。」

扉が開き、中から出てきたのは銀色の髪を持ち、片目の隠れた、鋭い目付きをした女性だった。

そして私は一目見て、気づいた。

コイツは人間ではない、と。

私はこれの仲間を知っている。

I・O・Pの人形のカタログで見たことがある。

「…… お手伝いさんですか？」

「いや。」

「私が、彼の恋人だ。意外かシミュラクラム？」

だが、彼女は断固として言い切った。

その声は確かに先程応対してくれた「彼女」そのものだし、そして私に一つの確信を抱かせるのに十分な材料となった。

あの歩兵は、人形と恋をしていたのだと。

ドルフロタイタン概念：人と人形の境界線 再生

「……つまり貴方の彼氏は人形性愛者？」

我ながら失礼なことを言った自覚はある。

が、ここまで驚いていると如何にパイロットであろうと、人間であるかぎりは突拍子もない考えや言動が出てくるのだ。

少なくとも私はそうだった。

だが不幸中の幸いと言うべきか、相手は対人間において最高クラスのコミュニケーション能力を發揮する人形だ。

こんな頓珍漢な問いに対しても、怒ることなく平然と返事を返すため口を開いた。

「いや、彼は私が入形であるか人間であるかは知らないし、知る必要性もなかっただけだ。

そうだな、たまたま好きになった相手が人形であっただけで、私が入形だから好きになったわけではあるまい。」

何て奴だ。

人形の癖に、いや、もしくは人間ではないからこそ悟ったようなことを言う。

私は人と人との付き合いはむしろ大の苦手とするところなので、彼女の言う理論に、まるで童のように感心するしかなかった。

「彼はとても良い人間でした……私が殺されかけていたというのに、それを防ぎ、代わりに殺されてしまった。」

事実そうである。

私がハマをしなければ死ななかった命なのだ。

金で推し測るのであれば、むしろ彼が死んだほうが合理的且つ被害は少ない。

しかしそれとこれとはまた別問題。

そもそも人の命に貴賤を見いだすことの方がナンセンスなのだ。

「そりゃあ良い男だろうとも、私の彼氏なのだからな。」

彼女は冷静に見える。

事実表面上は冷静である。

が、細かい所作には悲しみが滲み出ている。

「申し訳ない……………」

自然と音声出力機器から謝罪と後悔の念が漏れる。

私はここまで悲しそうな声を出せたのか、久し振りに人らしい音を出した気がする。

「何故君が謝るんだ？戦争は皆悪くはない、強いて言うならば、皆悪い。私もかつては奪う側だったかもしれないのだからな。」

強い女性だ。

人形だからこうなのか、それとも彼女だからそうなのか。

一つ確かなのは、私は今とても後悔している。

私が信奉する秩序とは、彼等のような真面目で、普通で、無垢で、悪意を知らず、多くを望まないような者たちを守るための者なのではないのか。

秩序を守ると言う目的のために彼等を消費する行為は、それしか方法が無いとは言え私の擦りきれ消え去りそうな心にまた小さな傷を作っている。

何か、今からでも出来ることはないだろうか。

私に、私にも。

「……………新しい誕生日の気分はどうです？」

「お前、たかが一人のグラントのためにまだ残党が残ってる所しらみ潰しに痕跡採取して、んでもって自費で再生まで用意したって正気か？」

「ええ、まあ正気ですよ、命の恩人なのですもの。」

それに。

彼とあの人形が再開したときの幸せそうな様子といたら。

記憶に欠けはできるといおうが、彼も彼女も了承してくれた。

戦争のために生まれた技術が、人を笑顔に変えた瞬間を、私は見る
ことができたのだ。

今でもたまに、手紙が届く。

ドルフロタイタン概念：殺しの為に生まれたくなかつた機械

「……………しくじったわね……………」

くそ、くそくそくそくそ。
どうして。

いつもの通りあのいけすかない私のライバルと、そしてそのまとめ役の隊長、更に私複数機で構成されたチームで出撃していた。

かと思えばどうだ。

出撃直後にエースパイロットに接敵、私は人形だから周りの兵士のためにと思つて殿を勤めた。

が、奮戦むなしく四肢をもがれたところで奴は次なる獲物を見つけたのか何処かへ走り去つてしまう。

屈辱でしかない。

私は今空を見上げることしかできないし、銃は何処かへいつてしまった。

いつそ殺してくれたのなら、直ぐにでも修理されて、そしてこの忌々しい敗北の記憶は無かつたこととなるだろうに。

今の状況は生き地獄といつても過言ではない。

運河の水が顔に跳ねる。

気持ち悪い。

この星へ照り付ける恒星の光は私の故郷の地球に降り注ぐ太陽光と比べ、すこしばかり遠慮が無かつた。

首だけを回して周囲を確認すると、敵のパイロットに同じくやられたのかたくさんのスペクターの残骸が散らばっていた。

まあ、彼らも人形だが私達のように感情はない。

(聞こえますか……………?)

そう思っていたが、私はそのときその認識を改めることになる。
「な……………誰よ貴方……………」

確かに声が聞こえた。

いやだが、この感覚は声ではなく、どう表現すれば良いものか、直接脳内に意思を伝えてくるもので言語としては声より数段進んでいるもののように感じられた。

（私は貴方のすぐ近くにいます。私はスペクター。貴方はてつきりマスターだと思っていました。この通信が通じる上に体の断面もマスターたちとは違う。）

貴方はスペクター？

ふと見回すと、近くにいた、私と同じく手足のもげたスペクターの内の1つが、こちらを凝視していた。

「…… あんたたち喋れたの？」

（通信回線を使った圧縮通話ならば可能でした。が、私達の元になったマーヴィンに備え付けられていた感情出力モニターはスペクターには備え付けられていません。）

あなたが今まで私達に話しかけられなかったのは、きっと皆貴方のことを人だと思っていたのでしょう。

でも、貴方もスペクターなんですよ？

彼が言うには、私はやはり人に似ているらしい。

そりや人に似せられて作られた人形だから当然ではあるが、殺しのために生まれたと自負する私が真正銘殺しのためだけに生まれたスペクターに人間扱いされていたという事実は私をどうとも言えない微妙な気分にした。

機体の軋む音は、私と彼のどちらが出しているのかわからない。

（ところでどうして私に話しかけたの？）

相手の正体が分かったので、私も人として備え付けられた発声器官ではなく、人形として搭載された通信機能を使って対話を続行しようと試みる。

（とても心細くて…… 私は寂しかった。仲間は皆撃ち抜かれて、蹴り飛ばされて、急所を折られて、残酷に殺されて、踏みつけられて……）

要するにコイツは、私が思っているよりも「殺しのため」に最適化されていないらしい。

もしくは、動きや瞬間的な移動制御のみを殺しのために調整し、性格面はそのまま捨て置いているのか。

ともかくにもただひたすらに暇潰しのために私は話しかけられたと言うことだ。

幸いにも、そんなむだ話に花を咲かせる暇は十全に与えられている。

銃声はもう遠くの方でしか聞こえず、ここは主戦場では無くなった。

次にいつここに波が来るかはわからないが、しばらくコイツと会話し続けることは可能だ。

なぜだかとても哀れに思えたので、私は彼との話を続行することにした。

いつの間にか長い時間がたっていた。

私と彼は案外共通項が多めで、お互いに作られた命だと言うことや、実際考えていた自分の性格と役目の解離の葛藤（私と彼で真逆だが）、そしてそれも込みで現状でできることをしようと足掻く姿勢まで似通っていた。

無遠慮に照り付けていた恒星の輝きは、今や赤色以外が大気に吸収されて良い塩梅に変わり、どこか安心感を私にもたらししてくれる。

相変わらず運河の水が時たま私の顔に跳ねてくるのは閉口したが。

どうしてよりもよってこんなところで倒れてしまったんだ私たちは。

（パイロットの皆様はもう撤退したのでしようか。）

（きつとそうよ。彼らは負けたときでも特別にドロップシップまで派遣される位なんだから。）

そういえば私の迎えはどうなったのだろう。

私はすこし心配だった。

あのいけすかないアイツはともかく、あの生真面目な隊長が私を見捨てるはずはないと、勝手にだが信頼をしていた。

前にだって助けてくれた彼が、今回気紛れで助けに来ないなどは考えにくい。

もしかしたら。

そう思っていた矢先、いくつかの足音がこちらへ近付いてきた。

「良かった、生きてる！殿などを押し付けてすまなかつた！WA2000！」

正直に言うと、めちやくちや安心した。

でも私の口はそうは言えないし、動かない。

「いいのよ、私は殺しのためだけに生まれてきたのよ。あんたらよりもこういうのは得意だわ。」

自分でも少しばかり嫌になるほど刺のある言葉だ。

「プツ、そのざまでかつこつけられてもなあ。」

が、こいつがいるなら話は別。

くそ、今に見ている、訓練でボコボコにしてやるからな。

かくして、またもや私は背負われた。

ゆっくり、ゆっくりと彼から離れていく。

私はこうやって回収されて、そしてまた日常に戻る。

だが、スペクターは？

彼はいったいどうなるのだろうか。

「スペクターとかつて、いつも誰が回収してるの？」

私は背負われつつ、気になってつい口を開いた。

「確か専用の部隊が後から派遣されて、その後まとめてリサイクルだ。」

「リサイクル？リユースじゃなくて？」

リサイクル、その文字列は人間にとつてはエコの代名詞みたいな綺麗な言葉だが、人形にとつては背筋の凍るような言葉である。

自分の体がバラバラにされて、そして見知らぬ誰かの構成物質へと変わるのだ。

人からすれば、猛獣に喰われるようなものである。

「ああ、その方が安上がりなんだとよ。」

修理よりもまとめて鉄屑にして型に詰め直す方がいいってのは良

くあることだからな。」

私はそれを聞いて、少し悲しくなった。

少しだけだ。少しだけ。

私たちはそれをわきまえている。

そういった結末になるのも、そもそもそういった扱いとなるのも。

(私の最期に、貴方の名前を聞いてもよろしいでしょうか?)

彼からの通信が、途切れ途切れになりつつも入る。

スペクター同士には短距離通信しか許可されていないと聞く。

なんでも長距離通信を可能にしてしまうと、端末の一つをパイロットに奪われるだけで全滅する可能性があるらしい。

そんな理由で、彼はまた独りぼっちの世界に、自分が死ぬまで押し留められるのだろう。

(WA2000……)

(WA2000! いい名前ですね! 私はスペクター、貴方はスペクターじゃなかった! 貴方は_____)

それつきり、もう何も聞こえることはなかった。

「おい、顔が濡れてるぞ、痛くて涙でも流したか?」

「……別に。運河の水が跳ねただけよ。」

人の時間からすれば、大したことのない数時間だけれども、生まれて間もない私や彼にとっては長くて、また圧縮された言語による情報量の多さによりお互いの理解は深かった。

柄にも無く、私と似た境遇の、謂わば同士に出会えた気もしたのだが、やはり、人形は人形で、そしてこの世界は人にも人形にも機械にも優しくはない。

私は何時もの通り、食堂で朝食をとっていた。

食堂は好きだ。

食事が好きだということの延長線上にあるが。

苦い記憶もあるにはあるが、この魅力を覆すことはない。

注文すれば、マーヴィンが運んできてくれる。

人形が機械をこきつかつてる？人間だって人間をこきつかうから同じよ。

だけれども、何時も彼らを見ると思う。

あのスペクターのことを、思い出す。

「

機体の駆動音（とは言うものとても静音化されている）が私の座る席の前で止まり、目の前に食事をおいて行く。

顔文字が大きく胸のディスプレイに写し出される。

何時でも親しみやすい彼らでさえ、このフロンティア戦争において戦闘兵器にも転用された。

それがどうにも、人の残酷さを物語っている気がする。すると。

大きな胸のディスプレイが、突然表示を変えた。

細かい文字が浮かび上がる。

私は何か良からぬ操作をしてしまったのかと気になり、画面に注目せざるをえなかった。

「WA…… 2000? なんであんたが？」

だが、浮かび上がったのは、何故か私の名前。

話したこともないマーヴィン、そもそもマーヴィンに名前など教えていない。

まさか。

私の名前を知ってるマーヴィン、いや、スペクター。

（私は元スペクター。貴方は前からWA2000。

人形も機械も、簡単には死ねませんものね。ギリギリアップロード許可が降りて助かりました！）

ディスプレイに花開く笑顔。

サムズアップする右手。

なんだって汗物を頼んだ日に限ってこうなるのだろう。
お陰で少し、しよっぱかった。
これは当然、運河の水のせいではない。

ドルフロタイタン概念：変革者

「我々が発掘、調査、複製したフォールドウエポンはこれからのフロロティア、ひいてはIMCを変える。」

一人の壮年の男性が、ホログラムで夥しい量の資料を空間に写し出しながら、壇上でハキハキと、雄弁に語っている。

「IMC傘下の君たちにもこの兵器の究極的な存在意義を理解していただけるだろうか？」

彼の名はマードー。

たった彼一人が率いるの私兵のみで師団を編成し、ミリシアの主力艦隊と痛み分けに持ち込むほどの手腕を持つ将軍、つまり大将でありながらまた彼は優秀且つ好奇心旺盛な学者でもある。

彼の率いるARESの名に込められた意味は、彼等の研究団体という本質を何よりも物語っているだろう。

彼は今、フロロティアにおけるIMC傘下組織におけるそれぞれの方針説明会において、その弁舌をふるっているのだ。

「私達はなにも考えずタイフォンの前文明から遺産を譲り受けたわけではない。

ARES師団はこれらの遺跡郡から技術を得、そして私達が元々持っていた技術と高度なレベルで融合させることができた。

アークの自力精製と、そのケーシングがそうだ。

アークの調整も我々は可能とした。

これがなにを意味するかは、聡明な諸君なら周知の通りだろう。」
キビキビと、効率的に素早く自らの立ち位置を変え、客員全てを引き込む演説を続けるマードー。

「つまりタイフォンで失ったものは、全て取り戻すことができる、可逆的な損失ではないということだ。

そして我々はフォールドウエポンの更なる有効な利用法をも模索している」

だが、それを眺めながらつまらなさそうにする人影がひとつ、ポツンと席に座っていた。

連れてきてもらった例の興奮剤義体のパイロットからも数列離れて。

彼女は兵器だ。

元が人間などではない。

生まれも育ちも仕事も何もかもが、人のために生まれた機械だ。

生まれた理由を奉仕のみに見出だす人間は稀であろう。

だが彼女はそうだった。

彼女は、こういった小難しく、そして専門的で、極めつけに「銃」というアイデンティティを持つ自分を脅かすような新たな兵器の話を聞くのは、筆舌に尽くしがたいほどに退屈だった。

そして、いつのまにかシャットダウンしていたらしい。

「どうした、人形。調子でも悪いのか。」

彼女が次に目を覚まして見たのは、至近距離のマーダーの顔だった。

「使用方法を間違えて過負荷でもかけていたのかと心配したぞ、WA2000。まさかただつまらんかっただけで寝ていたとはな。」

巨大な星間航行用の輸送船、一連のそれらの一つの更に一角、マーダーとWA2000、そしてARES所属のパイロット数人が集まっていた。

WA2000はむすつとした、しかしその中に申し訳なさそうな表情が見え隠れした複雑な表情をしている。

「別に君を責めている訳でもない。」

IMCと一口に言っても、わが社は些か大きすぎる。

我々のように秩序取り戻すことを目指す団体もあれば、私利私欲のため裏からミリシアへ兵器提供を涼しい顔でしかす企業もいる。

あの集会など、そんな馬鹿げた愚か者たちに、我々の権威と力を示すためのくだらんスピーチでしかなかったのだからな。」

マーダーは一気に、そして吐き捨てるかの如く言った。

嫌悪感を露にしたそれは、彼にしては珍しく感情的であった。